THE CENTRAL REVIEW

中央公論

第廿六年　第五號

第二百六十六號

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

SANSEIDO'S
ENGLISH-JAPANESE DICTIONARY

内容體裁

[SAR—SAT] 142

ノ藥草[撒爾沙巴里兒刺]. *Australian sarsaparilla.* ヒトツバマメ.
e′nět (särs′nět), *n.* =Sarcenet.
tor, *n.* 裁縫師, 仕立職.
tō′rĭ-al, *a.* ❶裁縫師ノ, 仕立職ノ. ❷【解】縫匠筋
tor-ite (-īt) [< *Sartorius* von Waltershausen
809–76)], *n.* 【鑛】輝鉛砒鑛. 「筋.
tō′rĭ-us [*pl.* -*ri-i* (rĭ-ī)], *n.* 【解】縫匠
n[1]. *n.* ❶飾帶, 肩帶, 腰帶.
❷【軍】懸章. ❸頭帶, 鉢卷.
—[1], *vt.* ❶飾帶ニテ飾ル, 肩帶チ着ク.
❷懸章チ佩ブ. ❸頭帶チ卷ク.
h[2], *n.* 窓框, 硝子枠. —[1], *vt.* 窓框チ附ク, 硝子枠チ附ク.
h′-bär′, *n.* 棧.
h′-dōor′ (-dōr″), *n.* 硝子戸.
h′-gāte′ (-gāt″), *n.* 水門.
h′-līne′ (-līn″), *n.* 釣紐, 引綱.
s′ĭn (sās′ĭn), *n.* 【動】印度產ノ一種ノ羚羊[*Antilope cervicapra*].
s′sa-bȳ (sās′a-bĭ) [*pl.* -*bies*[z]], *n.* 【動】南あふりか產ノ一種ノ羚羊[*Alcelaphus lunatus*].



[Sasin.]



[Sassaby.]

s′sa-fras (sās′a-), *n.* 【植】薩沙富拉斯[北あめりかノ東部ニ多ク見ル樟科ノ植物, 其根ノ木部芳香性揮發油等チ含有ス], 黃樟.
ās′sen-āch (sās′ŭn-āch), *n.* さくそん血統ノ人; いんぐらんど人 又すこっとらんど低地人.
ās′sō-līn, Sās′sō-līne (sās′ō-līn), *n.* 硼砂.
āt. Sit ノ過去.
ā′tan, *n.* 魔王, 惡魔.
ā-tăn′ĭc, *a.* ❶魔王ノ, 惡魔ノ. ❷惡魔ノヤウナル, 極惡ノ.
ātch′ĕl (săch′ĕl), *n.* 小鞄, 胴亂.
āte (sāt) [*sa*″*ted*[d]; *sa*′*ting*], *vt.* 飽カス, 飽キ足ラス, タンノウセサス. ☞ sated with pleasure.



[Sassafras (葉及果實).]

Sāte (sāt). Sit ノ過去.
Sat-ēen′ (săt-ēn′), *n.* ❶擬繻子. ❷一種ノ綿織物.
Sat′ĕl-līte (săt′ĕ-līt), *n.* ❶從者, 供人; オタイコ. ❷【天】衛星, 陪星.
Sā′tia-ble (sā′shia-bl), *a.* 飽カサルル, 飽キ足ラサルル, タンノウセサセラルル.
Sā′ti-āte (sā′shĭ-āt) [-*a*″*ted*; -*a*″*ting*], *vt.* 飽カス, 飽キ足ラス, タンノウセサス. ☞ with pleasure.
Sā′ti-āte (-āt), *a.* 飽キ足レル, タンノウセル.
Sā-tī′e-tȳ, *n.* 飽キ, 飽キ足リ, タンノウ, 滿腹.
Sat′ĭn, *n.* 繻子. *Figured satin.* 綾子.
Sat′ĭ-nět′, *n.* 綿絹繻子.
Sat′ĭn-ȳ, *a.* 繻子ノ如キ, 繻子ヅヤアル.
Sat′īre (săt′īr), *n.* 諷詩, 諷刺, 落首, 惡口, アテコスリ, アテツケ, イヤミ. ☞ against follies.
Sa-tĭr′ĭc, Sa-tĭr′ĭc-al, *a.* 諷刺ノ, イヤミノ, アテコスリノ.
Sat′ĭ-rist, *n.* 諷詩作者, 落首作者, 諷刺者.
Sat′ĭ-rīze (-rīz) [-*rized*[d]; -*ri*′*zing*], *vt.* 諷詩ニテ諷ス, 落首ニテアテコスル, 惡口チ言フ, アテツク, 諷刺ス.



1



2

[Satchel: 1, 學童用; 2, 旅行用.]

Sat′ĭs-fac′tion (-făk′shon), *n.* ❶滿足, 適意, 自得, 本懷. ❷償, 賠, 報償, 賠償. ☞ for some fault. 申分ナク, 圓滿ニ.
Sat′ĭs-fac′tō-rĭ-lȳ, *ad.* 滿足ニ, 十分ニ, 思フ通リニ, 圓滿

どの譯語もくだけて居る

編者（いろは順）					
マスター・オヴ・アーツ 男爵 神田乃武先生	醫學博士 樫田龜一郎先生	農學博士 横井時敬先生	工學博士 高松豊吉先生	工學博士 中村達太郎先生	工學博士 藤岡市助先生
法學博士 江木衷先生	工學博士 寺野精一先生	法學博士 文學博士 有賀長雄先生	海軍中將男爵 肝付兼行先生	理學博士 神保小虎先生	理學博士 平山信先生

縱五寸六分横三寸
紙數二千二十六頁
語數約十萬插圖約四千
特價壹圓五拾錢
定價貳圓
送料 内地八錢 清國・朝鮮・臺灣・樺太十四錢

（前付の二）

發行所 東京神田 **三省堂書店** 振替貯金口座東京一五九七

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

模範英和辭典

特色

▲最新英語辭書の長所を採り組織斬新なり
▲純日本語を以て譯し漢字には假名を附す
▲最新の語辭を含有し專門學術語を網羅す
▲發音記號は正確にして一新機軸を出せり
▲前置詞用法に注意し熟語慣用句の數夥し
▲多様の意義ある語には成べく用例を示す
▲外國地名人名一覽及類語對語表は新工夫

内容見本呈上（送料二錢）

輿評

井上十吉先生曰く 模範英和辭典は内容完備の點に於て未曾有の英和辭書なり、從來世に行はれつゝある凡百の英和辭書は多く日就社の英和辭書及ロブシャイドの英華辭典に則りたりと雖、模範英和辭典に至りては是等の辭書に基礎を置かずして編纂せられたるものゝ如し、此の書は同種の辭書中語數最も多く且努めて通俗の邦語にて翻譯せられたるものにて術語の數も亦他辭書より豐富にして余の判斷し得る限りに於ては正確妥當の譯を施されたり

磯邊彌一郎先生曰く 此辭典は普通語は勿論、熟語成句夥しく網羅し居る上に、最も喜ばしきは、近代學術の進歩に伴ひて新に生れたる新語を多く收め、之に各專門の譯語を施したるは英學者に取りて一個の福音である。此點から言へば本書は一面百科辭典にも代用が出來る

ブリンクリー先生曰く 此書は是迄日本國に於て出版せられたる此種の書物の其何れのものよりも遙かに優れるものと存候、而して日本國に於て英語の智識を弘むるには此上も無き便利のものと存候、此書は十二碩學の編輯に從事せられたる丈の十分の價値あるものと存候

山縣五十雄先生曰く 先づ印刷の鮮明用紙の良好なるを喜び、組織の進歩したるに感じ候、挿畫の饒多にして實用的なることも此辭典の一大長所と存じ候、されど譯語の平易にして且つ適切なるは何よりも小生を服せしめ候

發賣所 全國各地書店

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

BUMMEI-DO & CO.

ENGLISH, JAPANESE BOOKS & STATIONERIES.

1750 Sutter Street, S. F., Calif., U. S. A.

WE SOLICITE—
ADVANCE ORDERS

For any new book advertised in this magazine. We supply the new books of all publishers in America promptly on the day of publication. Our prices are most liberal, and will be found to be the lowest for all parts of Japan. One trial order will convince you.

B. Bjornson	A Lesson in Marriage ... by mail,	$ 0.60
J. London	Adventure	$ 1.66
J. London	The Cruise of the Snark	$ 2.20
H. S. Taylor	The Mediaeval Mind. 2 vols	$ 5.60
C.Y.C. Dawban	The Social Contract	$ 1.37
H. J. Ford	The Cost of Our National Government. (America)	$ 1.65
Y. Guyot	Socialistic Fallacies	$ 1.65
J. Don	Modern Method of Water Purification	$ 4.62
C. H. Desch	The Chemistry and Testing of Cement	$ 3.30
W. Fite	Individualism	$ 1.92
A. C. Forbes	The Development of British Forestry	$ 3.30
J. A. Howe	The Geology of Building Stones	$ 2.75
E. Emerton	Unitarian Thought	$ 1.65
W. L. Phelps	Essays on Russian Novelists	$ 1.65
R. G. Moulton	World Literature	$ 2.20
A. R. Wallace	The World of Life	$ 3.80
H.M.P. Eckardt	A National Banking System	$ 1.65
J. R. Spears	The Story of American Merchant Marine.	$ 1.64
H. C. Sherman	The Chemistry of Food and Nutrition	$ 1.65
A. T. Mahan	The Interest of America in International Conditions	$ 1.65
H. B. Morse	The International Relations of the Chinese Empire	$ 6.60
E. B. Dewing	A Big Horse to Ride	$ 1.65

米國桑港　須藤文明堂

取次店　郁文堂

東京本郷森川町一　振替口座東京一四九八一番

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

福本日南著

元祿快擧錄

淺野家時代赤穗城及藩士屋敷割圖極彩色石版大地圖二葉添付

▲全一冊 菊版八百五十頁上製頗美本函入 定價貳圓三十錢 郵稅十二錢▼

本書は文壇の雄豪日南子の椽大なる史筆を揮ひて二百年來我社會上下に深き感化を與へたる赤穗義士復讐の顚末を說述したる一讀神爲に躍り魂飛ぶの概あり蓋し義士に關する代表的著作也

元軍艦初瀨乘員海軍少尉 市川禪海著 ●好評廿六版●

殘花一輪

▲全一冊 菊版四百八十頁上製頗美本 定價壹圓二十錢 郵稅八錢▼

是れ曾て狂憤七たび死を決して遂げ得ず大悟一番佛門に入りし隻脚の少尉の發心錄也日露海戰の活歷史を經とし之を緯るに自家半生の悲哀事を以てす正に現情相兼ぬるの好戰史一字一淚不可卒讀

京都帝國大學法科大學講師 池邊義象編

古事記通釋

▲全一冊 菊版四百五十頁上製頗美本函入 定價壹圓三十錢 郵稅八錢▼

古事記は我國最古の典籍にして我建國の由來を究め國民性の本源を知らんとする者の一日も座右を離す可らず本書は本居平田諸先生の註釋を基礎として最も簡明なる解釋を施し以て初學の便に供したり

福本日南監譯 賴山陽自筆南北朝論原稿大阪局頰用コロタイプ挿入

國語日本政記

▲全一冊 珍袖版七百五十頁上製頗美本天金函入 定價八拾錢 郵稅八錢▼

賴山陽不朽の名著日本政記は神武天皇より後陽成帝に至る百八世二千年間の編年史にして外史と共に本邦史界の花實たり今原書の漢字を和譯して之に細註を施し且つ謚號年號讀例故事出典要解等を附す

（前付の五）

發兌元 東京市本郷區本郷一丁目（振替口座一〇二一五五番） 株式會社 啓成社

信用なき店舖及卑猥なる賣品の廣告揭載は謝絕す

（前付の八）

五月號の偉觀

文章世界

五月一日發行　第七號　正價廿錢　郵税二錢　前金郵税共十六冊三圓十二錢

◎新文章論　島村抱月

◎青年必讀の漢籍　竹越三叉

◎短篇小說　正宗白鳥

◎當今の文章家（島村抱月 田山花袋）　天王星

▲室內の裝飾法　高村光太郎

▲翻譯小說 穽　ゴンクウル

▽近著批評數項　諸家

◎作文の心得一則　矢野龍溪

◎北村透谷の文章　犀兒生

◎自己を叙した句（新傾向句評釋）　荻原井泉水

◎文範數項　記者

東京本町　博文館


宮内省御用達
時計及美術品
時計及附屬品、
ダイヤモンド、
其他寶石各種、
貴金屬製美術
工藝品、和洋服
装飾品、眼鏡類、
製作及販賣
D.K.
東京市
京橋區八官町
直輸出入商
小林時計店
電新、長一〇三
一〇四

中央公論第廿六年第五號目次

▲公論

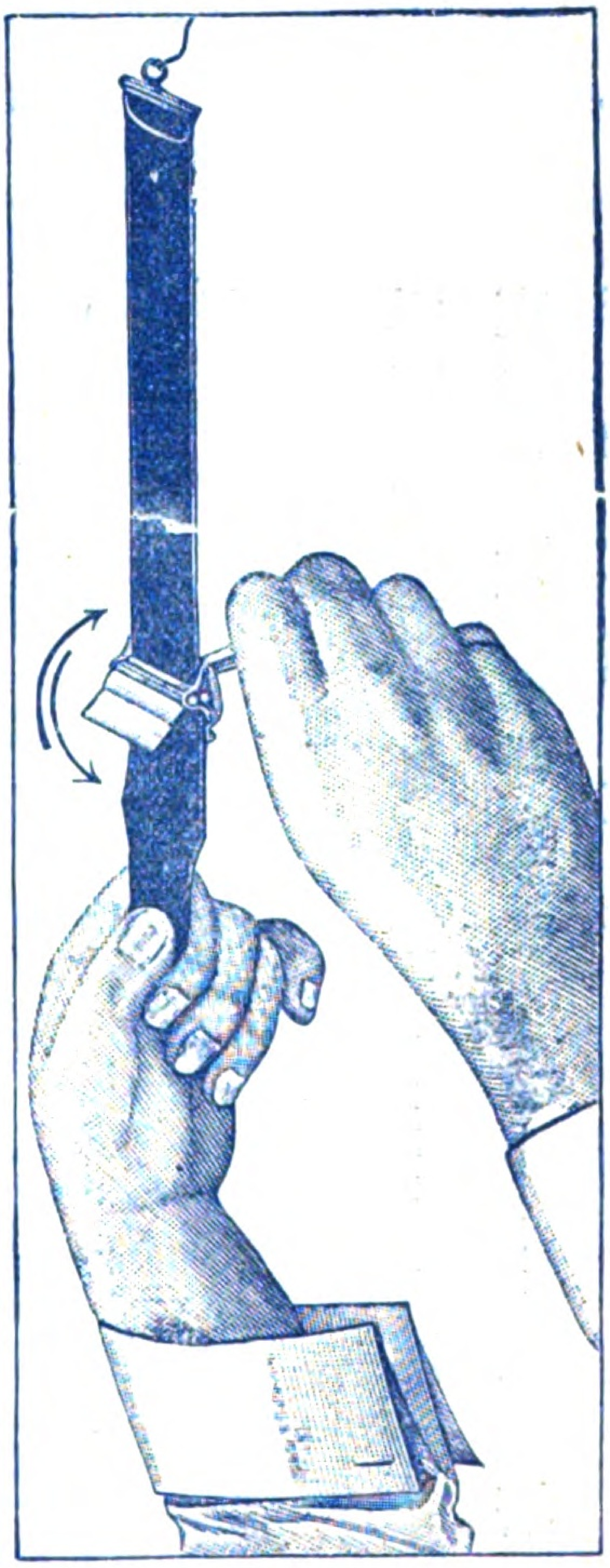
▲說苑

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

オートストロップ

自働研ぎ安全剃刀

ドンナ經驗のない御方
でも安心して直ぐ使用
して少しも怪我のない
のが此最新式自働研ぎ
安全剃刀。
此研ぎ方の具合が無類
簡便なり。



革砥及格刄付 ……
壹組金拾壹圓五拾錢

送料 …… 內地 十二錢
臺樺 三十錢
朝滿 卅五錢

東京日本橋通
丸善株式會社

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



HENRY H. PARKER.

中央公論



第二十六年
第五號
第二百六十六號

朝鮮の統治を論ず

（一）

吾人は曾て朝鮮併合に反對したりき、今も尙ほ當時の意見を捨つるに忍びざるものあり、然れども奈何せん、併合は竟に事實となれることを、然り、事實は事實也、最早論議の餘地を存せざる也

玆に於てか吾人は更めて併合の結果を好くすることを考慮せざる可らず、今日以後は一意專心、主として朝鮮の統治を完成することを企圖するの外あらずとす

此の見地より推考するに、今日の紛々たる世論は、吾人多く與する能はず、請ふ少しく之を言はん

（二）

新附の民生を統治するには特別の手法を要す、況んや八萬二千方哩の土地と、二千萬の人口と二千年來の歷史とを有する朝鮮を統治するに於てをや

臺灣の統治の良好なる、世界殖民政策上新レコードを作れるものとして、列國の歎稱を受けしは何ぞや、素より當局の施設、殊に故兒玉總督、後藤民政長官の措畫最も宜きを得たりし結果なると論を俟たざるも、また國民が當局に信賴して聊かも不安の心を懷かず、世上の論者また擧げて當局をして十二分の手腕を揮はしめ、寸毫も誹議し惡罵して之を掣肘せざりし結果ならずや、臺灣は土地肥沃にして利源饒かに、人口甚だ寡小にして而して民の氣風柔順に、之を治むる頗ぶる易きものあり、然るも吾人操觚者は尙ほ十年緘默を守りて曾て攻擊の言を發せず、其間或は人權蹂躪の形迹を見聞せざりしに非ざりしも、忍耐して敢て口を開くことなかりき

今夫れ朝鮮は土地の宏く戶口の多き臺灣に幾倍するに拘はらず、地味瘠鹵にして利源豐かならず、山赭く野荒れて、而して歷世惡政の結果、民貧にして智ならず、然かも兩班と稱する一部族に至ては、政を秉り民を虐して生活し、且つ互ひに權力を爭ふて相排擠する惡癖あり、習ひ性となりて陰謀を好み權略に長じ、面從腹非、幾んど度す可らず、一言にして蔽へば、極めて統治し難き國土と人民なり、故に之を併合して我が統治の下に置く以上、特別の手法を要するや論なく、我が國民殊に論議批判の職に在るものは、曾て臺灣に對するよりも遙かに寬宏の量を以て當局に自由手腕を揮はしむるため、少くも十年以上の緘默を守るを當然とす、彼の詐きて以て直と爲し、事情の彼我相異なるを視ずして徒らに非難

攻撃を事とするが如きは、根本に於て已に謬れり

世上の紛々たる論議は、幾んど朝鮮總督たる寺内子を標的と爲すもの丶如く、寺内子の一身は、今や恰かも群謗の焦點たり

（三）

此の非難の中、最も人を首肯せしむるものは、寺内子が陸軍大臣にして總督を兼ぬるを非とする議論なるべし、吾人も一應は之を理ありと信ず、然れども熟々思ふに、寺内子の兼任は、寧ろ實際に於て便とする事情なきにあらず、彼の陰謀に長じたる韓國太王の如きは、之を挫くに武威を以てするの外あらず、伊藤公の老練と誠意とを以てして、尚ほ且つ彼れを心服せしむるに足らず、而して之を圍繞する雜輩に至ては、叛服常なく、到底武力を以てするの外屈伏せしむるを得ず、千萬の仁德を以てするも、彼れ及び彼れの周邊のものは、頑として木石の如く、一の感應あるとなし、乃ち武威を輝かして之を壓伏するの外一の方法だも之あらずとす

現に伊藤公すら、統監服なるものを製し、佩劍を鏘々たらしめて以て彼等君臣に臨むの外なきに至れるにあらずや、彼等を御するの道、唯だ武あるのみ、故に寺内子が一面總督として彼等に臨むに方り、陸軍大臣の肩書を併有して、何時にても大兵を左右する權力を掌握するが如く視せしむるは、是れ彼等を御するに於て一種の妙法ならざらんや、寺内子にして自から勞働して兼任に堪ゆると爲す以上、現在の如くするを妨げず、任の重きがために、兼ぬるを難ずるは、寧ろ今日の事情に遠き感なき能はず

（四）

第二に朝鮮總督を難ずるものは、其の手法の武斷に過ぐるをいふ、然れども是れ亦朝鮮の實情に昧きを免かれず

朝鮮の生民は、少くも李氏の朝以來歷世虐政に苦めるもの也、生民に直接する地方官は、漫りに法を曲解して人民を虐し、苛斂誅求、動もすれば民を殺し財を奪ふて自から利福を恣にす、而して中央政府の官吏及び國王等は地方官の賄賂を受け、甚だしきは漁して以て其の利を奪ひ、要望度なし、茲に於てか地方官の民を虐する益々甚だしく、生民資に產を失ふて流亡せざるを得ざるに至る、法律あれども行はれず、生殺與奪一に官吏の手中にあり、彼の野荒れ山赭きは皆惡政の結果にして、政治學者の理想する惡政の結果は、正さしく此の東洋の一半島に示現せらる、されば其の國と民とを救はんとするもの、素より仁慈を主とすべきと言を俟たずと雖も、又勗めて法章を簡明ならしめ、簡易の治を布かざる可らず、法律の效力を嚴格にして、民の生命財產の安全を保障すると共に、又十二分に法の權威を示さゞる可らず、法の效力を尊嚴ならしめ、合せて簡易の治を布くとは、文治にあらずして却つて武斷政治にあり、武斷何ぞ憂と爲すに足らんや

且つ彼の治者たるべき特權を有する遊民、即ち所謂兩班なるものに至つては、陰謀を好むと殆んど食色よりも甚だしきあり、苟くも機の乘ずべきあらば、其の君民を蠱惑して變亂を起し、以て火事場泥坊の利を收めんとす、彼等は亂を好む所謂凶險の徒也

又儒生なるものあり、慷慨激越、名を好むと甚だしく、殊に愛國の情に篤し、彼等は朝鮮が曾て支那の附庸たり、未だ一びも完全なる獨立國たるとなきを悟らず、常に國名に執着して其の存立を欲す、今や朝鮮の我れに併合せらるゝや、彼等衷心の悲憤想ふべし、其の未だ蹶起せざる所以のものは、唯だ其の機會なきがためのみ、彼等は兩班の徒の如く心術卑しからずと雖も、實は兩班と共に起たんとするもの也、然り、彼等が新治の公明に悅服して、幡然其の舊思想を一變するに至るまては、實に注意を怠る可らざる一團として之を待せざる能はざる也

　彼等をして若し乘じて以て蹶起せしめん乎、我が統治の將來に大妨礙あるに止まらず、眞に新附二千萬の生民の最大不幸也、之を防遏するがためには、我れ實に全力を盡さゞる可らず、而して之を未前に防遏するもの、實に武を以て威壓するより有效なるはあらず、今日朝鮮に臨むに武斷政治を以てすると、實に已むを得ざる必要に出づ、彼の井上侯の前に破れ、伊藤公の後に屢々蹶かんとしたりし所以を思へ、武斷政治の必要なる、應さに多言せずして會得せらるべし

　吾人の領解する所によれば、伊藤公は其の統監を辭する僅かに以前に在てこそ、朝鮮の併合に同意したれ、其の統監の要位にありし間は、併合を非として飽まで保護國の實績を擧げんと欲し、此の旨意を以て彼等の君臣を指導したりき、彼等の君臣が後に至て多く公に信賴したりしは、實に此の結果にあらずや、然るに我が廟議竟に併合を行ふに決す、彼等君臣の意中果して如何ぞや、若し凶險なる兩班の徒蹶起し、而して慷慨なる儒生また手を戟にして踴躍せば、彼等君臣また密かに計を通ずるや論なからん

凡そ此の時際に在て、動亂を未發に制するとは、苟くも寸分だも緩ふす可らず、之を是れ知らずして、內地の憲法條章を楯にし、頻りに武斷政治を難ず、寧ろ舟中大學を講ずるよりも迂也

夫れ治安支持のためには、生民を安定せしめんがためには、假令權道と雖もまた之を容認せざるを得ざるとあり、佛者の所謂彌陀の利劍にして、大慈悲のためには小殺伐また必らずしも諱むべきに非ず、德川家康が豐臣氏の遺孤を煽して、竟に大阪城を滅亡せしめたる、不德且つ殘忍に似たるも、然かも妬婦驕兒等が多くの亡命者を驅つて天下を亂すの治安上默視す可らざるがためとすれば、經世家はまた家康の用意を諒とせざる能はざるべし、武斷政治は原則として歡迎すべきものに非ざるや言を俟たずと雖も、また阿彌の利劍にして、巳むを得ざる權宜ならざるに非ず、朝鮮の治安を支持し、新附二千萬の生民を救はんとせば、實に之を容認せざるを得ざるのみ

（五）

第三に朝鮮總督を難ずるものは、其の言論の檢束の甚だ嚴なるをいふ、是れ蓋し非武斷論の一節也

言論の尊重すべきや多辯を要せず、然れども殖民地に在ては、其の本國と齊しく言論の自由を維持しがたき事情あるとも、また之を諒とせざる可らず、況んや凶險にして亂を好むものある新附の大殖民地に於てをや

彼の兩班及び儒生等は、統治の手にして少しく緩まば、必らず蹶起せんと欲するもの也、然るに言論の士にして、若し其の統治の手法を難じ、或は總督を攻擊し、甚だしきは訐きて以て總督其の人の人身

攻撃をも爲し、總督の信用を害する如きに至らば、彼等は手に唾して乘ずべしと爲さん、是れ洵に亂を導く也

故に言論の士にして眞に心あらば、日本のため、其の仁慈主義を新附の民生に徹底せしむるを主とし、指導誘掖、切偲を盡すに怠らす、假令總督及び其の以下の官吏に缺點あるも、陰に之を忠告して改悛を求め、陽に之を掩ふを當然とす、所謂親は子のために匿し、子は親のために隱すの情味なかる可らず、且つ殖民地には、母國の憲法行はれず、法律も同じからずして、主として民生の生命財産を安固ならしむるに止め、簡易の治、多くは行政者の手法に待つとせば、一々例を内地に求めて以て一律に論ず可らず、所謂十年緘默を守りて、當局に自由手腕を揮はしむるを要とせずや、然るに徑々然悻々乎として爬羅し剔抉し、非難攻撃或は及ばざるを恐るゝが如きは何ぞや、言論の自由を内地と同一に期して以て亂を好むもの多き新殖民地に臨むが如き、抑も本末を知らざるの甚だしきにあらざるか

馬上素より天下を治む可らず、而して言論また殖民地を治めがたし、曾て臺灣に對して思慮ありしものにして、今や臺灣よりも大に、且つ臺灣よりも治めがたき朝鮮に於て、獨り經世の心なきは何ぞや、吾人は先づ第一に專ろ之を怪む者也

（六）

第四に朝鮮總督を難ずるものは、其の會社令を布きて一切の企業を阻止せんとするをいふ、會社令のために、母國の企業家が果して足を揚げざるや否やは、吾人の未だ知らざる所也、然れども其の制令の

意が企業を阻止するにあらずして、却つて之を保護し奬勵する目的にあるや爭ふべからず

朝鮮には新たに我が恩賜金を手にして富裕となれるもの甚だ多し、而して彼等は利を興し資を殖すに於て甚だ短なるもの也、隨つて狡猾なるものに欺かれて、會社を起し利益を圖るといふ美名の下に、其の資を蕩盡せんとする掛念なきにしもあらず

日本の浮浪者又は一種の政客中には、土地森林其の他に或る特權を得置き、之を高價に賣飛して以て多く勞せずして奇利を獲んとするもの甚だ多し、殊に其の官府と夤緣して出沒の敏捷なる、殆んど端睨す可らず、我が北海道が未だ大に統治の績を擧ぐるに至らず、隨つて其の利源を拓くとの未だ全く緒に就かざる所以のものは、實に此の徒輩のために前後屢々蹂躙せられし結果に外ならずとす、故に新たに殖民地を統治して、速かに且つ十全に其の利を擧げんと欲せば、嚴密なる用意を加へて、我が北海道の覆轍を踏まざるを要す、朝鮮に會社令を布けるは、乃ち此の主旨に外ならざるにあらずや

會社の許否の一に總督府當局の手中にあるを危むものあり、今や官吏の知見大に進みて、且つ心を秉る常に公平を主とす、眞に信用あり恆産あるもの丶組織したる會社ならば、當局豈之を謬まるの虞ある可けんや、純乎たる專制君主と雖も、未開人種國にあらざる限り、また史にあるが如き暴虐を敢てす可らず、智德大に進んで文明の光輝遍照する賜然るのみ、故に會社許否權の當局手中にあるを危ぶむは、寧ろ杞憂に過ぐ、之を以て總督を非難するは蓋し酷也

吾人の聞く所によれば、總督府は信用ある企業を歡迎する趣意にして、現に官營として將來最も有望

なる殖林事業の如きも、信頼すべき企業家を求めて其の手に移すべしといへり、果して然らば是れまた諒とせざるべからず

（七）

第五に朝鮮總督を難ずるものは、警察に重きを措きて、多くの犯罪を即決するとをいふ、然れども既に仁慈の大方針に遵り、民生の生命財産の安全を保障するに法律を以てせる以上、更に簡易の治を以て民生に臨むの寧ろ有效なる以上、即決例の却つて大に利あるや明白也

我が警察官は清廉にして寧ろ曲謹に過ぐ、之を以て古の郡守若くは其の下僚の如く、賄賂によりて法を左右し、私意を以て律令を枉ぐるものと爲す可らず、故に僅かに一紙半錢を竊めるがために、正式の裁判を受け、少からざる日時と費用とを要するが如きは、斷じて新附の民の堪ゆる所にあらず、其の權義の重大にして、生命財産に關係多きものは、素より正式の裁判を受くべしと雖も、所謂輕罪に至ては、寧ろ警察官の即決を利とすると言を俟たず、裁判所は其の數すら甚だ少しと雖も、警察官は到る處にあり、其の判決を求むる、實に敏にして且つ簡なれば也

秦の苛法に窘められしものは、沛公の法三章を謳歌し、簞食壺漿して之を喜び迎しにあらずや、今の朝鮮人は歴代の苛政虐制に苦められし秦の遺民也、之を治むるに簡易の治を以てするの經世の要を得たるを知るもの、誰か即決例の甚だ適切なるを疑はんや、之をしも捉へて總督を非難するが如きは、新附の二千萬人をして、文明のハイカラ政治に困踣せしめんとするもの也、其の志は素より必らずしも非な

らざるも、治民の術を得ざるや甚だし、蓋し亦朝鮮の實情に深く通ぜざるの罪のみ

（八）

朝鮮總督を非難するものは、區々の缺點を訐きて以て大聲疾呼するに止まる、是れ非難せんがために非難するのみ、最も進歩せざる黨人の黨略を用ふると擇ぶなし

未だ根本的に朝鮮統治の要義に顧み、之より推して以て評論を下すものなきは、果して何の故ぞや、嗚呼果して何の故ぞや

曾て朝鮮に在りし我が邦人にして、朝鮮人を目するに一種の劣等人種を以てし、之を毆ち之を蹴り、多くの凌辱を加へて恬然たるのみならず、甚だしきは無賃にて人力車を乘捨て、賃錢に代ゆるにステッキの一擊を以てする者すら多かりき、彼等は斯くして朝鮮人を凌辱したるに止まらず、又朝鮮國に於ける有らゆる利益を壟斷し得て、朝鮮人には一指だも染めざらしめ得るものと信じたるが如かりき、然るに伊藤公の統監と爲るや、邦人の非義と倨傲とを抑ゆるに力を致せしのみならず、彼我を一視同仁とする主義を宣明し、而して寺内總督に至つて、益々此の旨義を嚴明ならしめたるを以て、今や邦人の朝鮮人を凌辱するもの殆んど影を絕ちしに似たり、然るも彼等は之を以て伊藤公寺内子の德を頌する心なく、却つて胸中に之を怨嗟するや爭ふ可らず

今日の總督非難論の如き、其の底の底を割れば、頗る不義にして非理なる怨嗟の凝集せるにはあらざる乎、萬々一にして若し然るあらば、吾人は寧ろ進んで大に非難者の罪を鳴らさゞる可らず、必らずし

も殖民地統治の要義に通ぜざるのみに非ざる也

政界財界に跨れる怪問題

(一)

今や財界をして頗ぶる不安の念を懷かしむるに止まらず、政界、殊に黨人、最も政友會の幹部を驚擾せしむる一個の怪問題あり、之を興味ある演劇とすれば、頗ぶる喝采を博すべきも、實は眞摯なる人の寧ろ顰蹙を禁ぜざる所とす

怪問題とは何ぞや、政府筋が將さに特許を與へんとするが如く吹聽せらるゝ新電燈會社是れ也

所謂怪問題たるは、新會社の發企人の重もなるものが、皆一種の黨人にして、實業家らしき實業家なきがため也、其の財界をして不安の念を懷かしむる所以は、政府が株式會社に對する方針不定に視ゆれば也、其の政界殊に黨人、最も政友會の幹部を驚擾せしむる所以は、同一黨中に賛否の二派ありて、盛に相訌爭すれば也、而して眞摯なる人々の顰蹙を禁ぜざるは、其の問題を扱ふものが徒らに事を好んで甚だしく不眞面目なれば也

(二)

風聞子の傳說する所によれば、遞信次官仲小路氏の歐米を巡視し歸るや、各國の都市到る處に三個以

上の電燈會社あり、盛んに水力を利用して廉價に電燈を供給し、市民の擧げて其の便益を享くるを視、歸來東京市に於ても尙ほ新たに電燈會社を起すの餘地あり、殊に之を起すに依て、電燈料の著るしく低廉なるべきを確かめ、其の調査材料に添ゆるに意見を以てして、之を遞信大臣後藤男に提出したり

此の時に方つて中央俱樂部の某々等、明年の總選擧に一大飛躍を試みて、其の黨務を擴張するがため、曾て計畫せる電燈會社の案を提げ、之を五十萬圓の價を以て東京鐵道會社(電車)に沽らんと試みたりき、一說にいふ、沽らんとを求められし相手は東京電燈會社なりと、然るに此の相手は曾て屢々政友會の誅求に窘められしを以て、今また中央派の强請に應ずる餘力なしとし、竟に之を拒絕したり、某々等乃ち往いて之を後藤男に謀る、男莞爾として曰く、我れに一策あり、東京電燈、東京鐵道（電燈を兼營す）の外、尙ほ一會社に特許を與ふる餘地あるを以て、卿等彼の政友會の某々等が發起せる會社と合併し來れ、然らば與ふるに特許を以てせん、而して政友會も拒む能はず、彼等既設會社も亦窮するや必せり、卿等の志必らず成らんと、某々等深く感謝して去る

斯くて日本、東都の兩會社合併して特許を出願し、其の必成を世間に吹聽し廻れり、而して兩會社の發起人は實に政友會員と中央俱樂部員となり

耳敏き株式市場は之を傳聞して、東鐵株東電株に嫌氣を附せざるを得ざりき、兩社の株式の下落は、また延きて他の諸株の低落となり、株式界の不振益々甚だし、曾て株式の騰貴によりて財界に景氣を附けんと焦慮せる政府側の智者が、今や却つて反對の結果を招けるを視し世人は、政府の方針一變せるを

疑ふに至れるも無理ならず

電燈會社の社長佐竹作太郎氏は、政友會に於ける最良なる金主の一人たり、而して東鐵の大株主にして又重役たる利光鶴松氏は、自由黨以來の有力者にして、政友會の財布のためにも爲る人たり、此の二者新電燈の起りて競爭するを好まず、共に政友會の幹部に迫りて之を押潰させんとす、蓋し幹部をして情意投合の名の下に政府に求むるに、新會社に特許を與へしめざらんとする也、然れども政友會中に於て可なり有力なる人々も、亦新會社の發起者たり、彼等は新會社の特許を得るに由て一攫巨利を占めんとするもの也、萬難を排除しても其の利を手にせんとするもの也、茲に於てか政友會の幹部は、ヂレンマの地位に立たざるを得ず、陽に何をか成し得んと稱して多く關心せざるが如きも、實は恟々として深く困惑すといへり、茲に於てか多くの人々は、之を以て後藤男能く圖りて政友會内を攪亂するものと爲すに至る、吾人は素より政府及び後藤男が果して此の如き機略を弄せしや否やを斷言すると能はず、唯だ〳〵此の問題が政界財界に渉りて不安且つ驚擾を與へし事實を事實として視るのみ

(三)

吾人は素より既設會社に些の恩怨を有せず、随つて之を助くべき理由もなければ故らに敵視する意思をも有せず、純乎たる獨立の一市民としての利害より打算して本問題を視んと欲す

既設會社、殊に東京電燈の料金の高さ、實に日本第一にして、而して又世界稀有と稱せらる、之を更めて相當の低位にあらしむるの至當なる、素より多言を要せざる也

然れども東京電燈の外、東京鐵道が電燈を兼營して、兩社對抗せんとするに方りて、更らに一會社を起さしめ、三社鼎立の形を爲さしむる利害は如何、是れ極めて眞面目に考慮すべきもの也

眞に國の經濟全體よりいへば、仲小路次官等の常に唱ふる資源保存のため、無用の物資を消費せしめざるを要す、無用の消費は、實に天物を暴殄するものなれば也、彼の電燈の如き、若し一會社に獨占せしむるを以て、最も無用に物資を費消せざるものとせば、一會社に獨占を許すを至當とすべし、唯だ獨占のため不當なる電燈料を收めて以て市民の利益に反する如くんば、國家の權力に由て之を相當の價に改めしむべきのみ、今や電氣事業法の實行せらるゝあり、政府は宜しく此の法律の尊嚴と效力とを以て、正當に電燈料を低減せしめて可也

然れども一個の會社のみにては、全く獨占の弊を矯むると能はずと做す乎、然らば則ち更に一個の會社に許特を與ふるまた可ならん、此の點よりいへば、其の資力の大なる東京鐵道をして、電燈業を兼營せしむるは、正さしく兩社をして對峙競爭せしむる也、政府は此の間に立ち、電氣事業法を提げて其の料金を極度まで制限して可也、必らずしも三社鼎立を現ぜざるを得ざるの必要あらず、勿論三會社鼎立するも、無用に物資を費消するとなく、天物暴殄の虞なき乎、吾人は寧ろ進んで鼎立を歡迎すべし

吾人の耳にせる所によれば、東京鐵道は初め競爭上其の方針を秘せるも、新會社の出現せんとするに恐慌して、竟に一切の計畫を發表せり、此の發表せる計畫によれば、近く一兩年中に百萬燈を點じ得べく、其の料金も當分九十錢臺とし、追つては更に引下ぐべしといへり、東京電燈の現在點火せるは五十萬燈

にして、是れ亦將來百萬燈を點ずる計畫なりといへば、兩會社合して二百萬燈となる計算也、我が東京市の戸數近郊を合して四十萬戸のみ、即ち一戸平均五個の電燈を點ずる割合となる、若し五十萬戸とするも一戸四燈とす、一戸四燈の割合は寧ろ多きに過ぐるも斷じて少きに失せず、況んや電燈の外に瓦斯燈あるをや、故に新電燈會社を興すは益々電燈を多くして、彌よ供給を餘りあらしむる也、物資を無用に消費する也、天物暴殄ならずや、國の全體の經濟より視て、斷じて得策にあらざるにあらずや

新設會社の公言する所によれば、一燈七十五錢にて可なりといへり、石油燈一個の費は約六十錢と稱せらる、若し七十五錢とせば、石油燈悉く變じて電燈と爲るべし、然れども二百萬燈と瓦斯燈と合して、果して尙ほ點火の必要ありや否やといはゞ、數理自から明白ならん、況んや東京鐵道は其の料金を七十錢まで引下ぐる決心を有すといふをや

電燈會社の利は、一柱に就て燈數の多きにあり、地方に由ては一柱六十燈に及ぶもあり、大阪市に於ては一柱平均四十燈なりといふ、東京電燈の如きは、平均二十二三燈なりと聞く、蓋し東京市は、歐米の都會の如く、縱に膨脹せずして横に延ぶ、故に廣袤の大なる、世界に我が東京の如きもの多からず、茲に瓦斯及び電燈を設くるの費用多き、到底歐米と同率に視る可らず、殊に既設線の外、新會社起るに於ては、其の線路徒らに延長して、一柱當りの數彌よ減ずるや自明の理也、換言すれば、市民にして眞に電燈料の低廉なるを欲せば、寧ろ新設會社を抑へて成立せしめざるを當然とす、點燈料を引下げんには、一柱當りの數を增加するに有るや爭ふべからざる計算なれば也

（四）

吾人を以て既設會社を庇護して新會社に敵するものと誤解すること勿れ、吾人は實に數理に由て立論す、二二は四也、何人と雖も數理を變ずる能はず

遞信次官が東京市に一會社を新設せしむる餘地ありと斷ぜし調査は、果して何を標準とせりや、吾人頗ぶる惑ふ、次官にして眞に歐米識者の思慮する國の利源保存を必要と信ぜば、寧ろ無用に物資を費消するに反對すべき筈也、若し夫れ之を政略に應用すること若し事實ならば、洵に言語同斷のみ

（五）

或は曰く、新會社は到底成立の見込あらず、發起人等は政府より特許を得て、而して之を高價に賣飛さんとするのみ、素より事業經營の資と力と兩つながら有せずと

千代田瓦斯の成立するや、其の發起人中、實に其の權利を東京瓦斯に賣飛ばして以て奇利を占めんと企てし者ありき、然かも事業實營を主とせる株主あり、且つ一種のハメに由て、竟に競爭して其の事業を強行することゝなれり、之に由て瓦斯料の多少低落せしは、市民の便とする所なるも、無用に物資を費消するの實なきや否やは、識者の考慮を要する所なるべし

彼の新電燈會社の發起人、及び之が出願を受くる政府は、深く注意を要せずや、吾人のシリアスに考ふる所は斯の如し、以て世の輕躁者流を戒め得ば足る

公論

現代思想界の救治策如何

藤井健治郎

一

我國の思想界は之を各方面から察して觀るに、今や過渡期に際して居るかの如く見ゆる。社會の各方面に種々の思想が紛起して人心爲に動搖し、不祥なる現象なども起つたのである。其の他社會の各方面に、過渡期の徴候を看取することが出來るのである。さて實際過渡期だとすると、可成早く安らかに此の期を脱して、平靜なる狀態に進ましめねばならぬ。そこで此が爲に或は議會の問題となり、或はその建議となり、其直接文敎の任に在るものは固より、一般政府に在るものは一意專心何とかして安らかに此過渡期を通過せしめんと焦慮しつゝあるのである。又世の先覺有識の人々も之を憂ひて、或は著述に、或は講演に、或は新聞に、或は雜誌に、各々其救濟策を發表し、以て我思想界の健全なる發達を指導せんと努力しつゝある。此形勢を以てすれは、或は我過渡期思想界は、安全に此の渦中を脱して靜穩なる前途の行路を續け行くべしとも察せられる。

思想の過渡期といへば何人も直に想起すべきは、夫の希臘のペルクリス時代なるべきが、當時に於て專心其國を憂ひ、其民族の將來を慮りて、眞面目に思想界を指導せんとせるは、僅にソークラテース、プラトーン

等の如き一部少數の人々に止まり、多數は凡て過渡期の盤渦中に捲到し去られて、能く其將來の行路に思ひ至るが如きは極めて少かつたのである。而かも此ソークラテース若くはプラトーン等の努力が能く思想界の新發展を促し行くを得たりとすれば、何くんぞ獨り日本の現代に於て、在朝在野の先覺有識の方々の、斯く迄國を憂ひ民を慮るの努力が、我思想界をして此過渡期の盤渦より脱し、容易に將來安全なる行路を續け得るに至らぬことがあらうか。されば吾等後進の徒は、唯安んじて先覺の指導に從ふべきであらうなれど、退いて其の所謂救治策なるものを考ふるに、どうも腑に落ちかねるものがないでない。もし此の大切な過渡期に、一寸でも梶の取り方を誤つたならば、實に救ふべからざるの境涯に陷らぬとも限らぬ。かゝれば心は過渡の擾亂を救ふに在りても、實は其擾亂を助くといふが如きつまらぬことになつてしまう。苟も今の時に當つて言を立て志を述べんと欲するものは、能く過、現、未の三世に亙りて我國思想界の性質及び推勢を研究し、直に其病根の所在に察到して之を除き、以て健全なる針路を與へることに勉めねばならぬ。今此見地に立つて現代一二の救治策なるものを見るに其要を得たるもの寧ろ頗る乏しきの感あるは、甚だ遺憾とする所である。余は茲には右の批評を簡單に述べやうとおもふ。その余の積極の意見の如きは、之を後日に期する。

二

今日一部の識者が最も憂ふる所は、忠孝觀念の漸く我國民の間に衰へ、其間に乘じて邪惡危險なる思想が愈よ其根柢を固め、漸次精神界を支配せんずる形勢を呈しつゝありといふ點に存するが如くである。故に之を救濟するには一面には大に忠孝の觀念を鼓吹し、一面には日本の家族制を再び確立せざるべからずと說くやうに見ゆるのである。由來忠孝觀念が論者の謂ふが如くに、果して薄らぎつゝありや否や。こは事實の問題であつて事實を精査した上に非ざれば決して明確なる斷定をすることが出來ぬ。忠孝觀念大に薄らぎつゝ

ありと認むる論者は、果して如何なる材料、如何なる事實に本づいて謂はるゝか、余は其明示に與からんことを欲するのである。如何にも夫の大逆事件の如きは、其忠孝觀念の薄らぎ居れるのみか、全く消磨し盡せるを示せるが如くにも見ゆるけれども、あンな非道な無法な考を有つて居るものは、我六千萬同胞中の僅に一小部分て、それを以て他の一般を推すことは出來ぬ。或は又南北朝問題の喚起を以て忠孝觀念衰頽の證左と認むるもあるやうなれど、そは全然見當違ひてあると思ふ。何となれば所謂北朝正統論者、乃至兩朝對立論者といへども、その論の是非は別として、不忠の精神から是が說を爲したのてはなく、却つて忠義の精神から爲したるものなることは、當時論者自身の屢次明言せし所にもあり、誠に左もありなんと思ふ。苟も一國名譽の學位を有せる紳士にして、不忠不孝の考を抱くといふが如きは萬あるべからざる事、想像にだも及ばざる事だからてある。左れば南北朝問題の喚起は、忠孝觀念或は不明になりたりとは言ひ得べくも、それが爲に衰へたりとは直に斷ずるを得ないのである。

又或は一部靑年の間に所謂自然主義の思想を懷抱するものある事實を以て、直に忠孝觀念の衰へた證據とするものもある。されど此謂ふ所の自然主義なるものは、外國のそれは姑く措き、日本に於て現れたるものを觀察するに、幾多の種類があつて、其中には矯激にして危險なるものも亦無きに非るが如きも、又中には極めて穩健なる思想も散見するのである。何れにせよ未だ劃かに此自然主義の思想が忠孝觀念衰頽の爲に出たものてあるや否や疑問てある。或は實は忠孝觀念は存すれども、そは暫く意識の奥に潛み、廣く世界の思想界に接觸したる結果として、斯ゝる自然主義の思想が意識の表面に現はれ來れるに非るやも亦知るべからざることてはないか。或は又今日の靑年の天下國家を說く事少きの事實を證とし、是に因つて忠孝觀念の衰頽を談らんとするものもあるが、是も亦單にそれのみにて直に爾く斷ずる譯には行かぬ。政治上に於て、學問上に於て、將た產業上に於て、今日日本の社會の先

頭に立ち居る人々は、多くは明治以前、若くは明治の初年に敎育を受けたものなるが、當時の學問といへば依然昔の支那流に修身齊家治國平天下の道の研究を以てして居つたので、勢ひ所謂宿昔青年の志といへば、そは多くは廟堂に立つて自己の抱負を實行するを指稱したるものであつたのである。之に加ふるに、特に維新後明治政府の開かれて列國と交際を結び、內外の國勢愈よ繁雜を加ふるに從ひて人才を要する愈よ急なるを致し、そこて身に一藝一能あるの士は早く官途に就き國家の樞要の位置に就くを得たのである。然るに、明治政府の規模はかくて漸次擴大せられたれど、同時に敎育の普及と進歩とは人才の輩出益々多きを來し、其結果、供給は漸く官途の需要に超過するに至り、書生の榮達は最早や昔日の如くある事が出來ぬ。試に大學一覽を繰り見るに、概していへば明治廿年前後迄に大學を出てしものの立身出世は甚だ速てあつたやうてあるが、其後の出身者の昇進は、それほど速くはない。最近の有樣にては高等專門の敎育を受けたるものても、出てて直に官途に就くは頗る望み難き事となつて居る。從て今の書生は實際就職難と生活難との大厄を背負ふて居るのである。天下國家を論ずる前に、自己の米櫃の心配が必要になり、又政治界に腕を試すの餘地が乏しくなつた爲めに、他の社會に、殊に實業方面に切つて出やうかとも考へて居るのが今日の書生の有樣てある。されば昔の書生は大に天下國家を論じたが、今日の書生は之を論ぜずと言ふも、そは實に然るべく、無理ならぬ事情の下に起りし現象と見なければならぬ。されば一概に今日の書生が天下國家を論ずる事の少くなつたといふ事實を以て、忠孝の觀念の我一般思想界に衰へたと斷ずるのは寧ろ早計てある。斯の如く考察し來れば、一部の論者が信じて居る如くに、忠孝の觀念我國に衰へたりとは容易に斷定し得ざる事にて、更に仔細に調査を要するのである。

由來、昔のまゝの忠孝觀念が明確に今日に傳つて居るならば、過渡ても何てもなく、別に騷ぐには及ばぬことてある。昔の忠孝觀念が今やメタモルフヲーシス

をやりつゝあれば過渡である。即ち忠孝觀念が衰へたりと見ゆるのは、唯昔の形の忠孝觀念が衰へて行く、その後にはチヤント新しい形のが出て來るのかも知れぬ。恰度乳齒の變り目のやうかも知れぬ。若くは又忠孝の觀念は中に鬱勃たるものあるけれども、其發するに機會がなくて潛んで居るのかも知れぬ。故に其機會だにあらば中に鬱勃たる精神が、直に煥發して異彩ある現象を來すとも考へ得らるる。例へば日清・日露の戰爭の際の如く、國家に一大難ある場合には、我六千萬同胞の忠孝心は猛然として振ひ起るとも見られるのである。如何にも日露戰爭當時に於ては不都合な非戰論を唱へしものもあつたけれどもそれ等は極めて一部少數の徒なりしのみならず、而かも其唱道者の重なるものは今は此世になき人の中に多かりしが如くに記憶する。故に忠孝觀念衰へたりとて徒らに悲觀するのは能てない。悲觀するに先つて能く事實の眞相を精査する必要ありと信ずる。既に述べたやうに、今は醱酵時代、メタモルフヲーシス時代なればこそ過渡期とも見られるのである。即ち舊形式のものが新形式のものにならんとして居る處が過渡である。されば時代の指導者は、斯かる時代の出て來た由來原因を精覈し、其の當さに執るべき前途の針路を定め、以て一世を導くの用意がなくてはならぬ。

三

暫く一部論者の言の如く、忠孝觀念が漸次に衰へて、邪惡なる危險なる思想が跋扈せりといふを事實と假定する。扨て、斯く假定して彼等の主張する此の過渡期の救治策なるものを觀るに、果して此過渡期の盤渦を免れて我思想界を平靜安穩なる行路に就かしむるを得べきや否や隨分と覺束かぬものがある。中には家族制度の確立によりて此過渡期を經過せんとの思想を抱くものもある樣て、是の論は隨分勢力ある論のやうに思ふが、是は尙ほ非常の調査を要することゝ思ふ。從來維持せられ來つた日本の家族制は、慥に日本特有のものであつて、成し得べくば之を保存したいものなれども、是迄の家族制の維持の困難なるは、予が先年已に

本誌に於て縷述せる所なるが故に（本誌第二十三年第九號參看）、重ねては言はざるべきが、若し從來の家族制の維持を困難とせば、問題は如何樣に是れを改造して、能く時勢の進歩に伴ひ得しむるかといふに在る。されど此點に就いては未だ論者より明確なる考案の出たことを聞かない。此迄は其論者は勿論、其他一切思想界に携はる人々の共に大に攻究すべき處であると信ずる。加之又一方に於ては我國の忠君思想の如きは決してその家族制に由來して居るものでない、否な個人を沒し家族を滅すといふ處にこそ、日本の忠君思想の根本が存するのである。家族制を保存し得ずば日本の忠君思想を維持し涵養し得ずといふが如きは極めて淺薄なる思想で、極めて笑ふ可きの言なりと主張するものもある。此の論も亦慥に一面の道理なりと信ずる。若し論者の信ずるやうに、容易に在來の家族制を維持し存續せしむること出來るものならば、過渡期〳〵と心配することも騷ぐことも要らないのであつて、そういふことが困難なればこそ大に熟慮しなければならぬ必要もあるのである。此等の諸問題は公平なる見地に立つて最も深重に考察しなければならぬ。

又或る論者は今日行はれ居る中學校の修身書に就きて吟味するに、其中に忠孝の事を說いて居る分量が甚だ少い、此の如き修身書で敎育しては、到底忠孝思想を普及し、且つ根柢に迄鼓吹することが難い、大に改竄しなければならぬといふて居る。論者はかく消極意見を述べた丈で未だ積極的に我國の修身書をば、少くも中等敎育に於ては如何なる風に編纂し、如何なる風に敎授すべきかの意見を明示して居らないからして、論者の意見の存するところ猶ほ明瞭でないが、右の修身書に對する批評から推考するに、更に多くの分量に於て忠君愛國の說明を費さゞる可からずといふにあるが如くである。論者の意若し然りとせんか、是も亦大に考ふべきことである。論者は只分量に於て多く忠君愛國の說明を費しさへせば、それで能く忠孝の觀念を涵養し、維持することが出來ると思ふが如きも、如何に其分量を增加した處が、もし其說明にして已に變遷

し居る人間の思想に適合せざらば何かせん。千言萬語畢竟徒爾となるのである。固より忠孝の心は、昔も今も變るべき筈はないが、その事は時代の如何によつて異つて來るのである。昔の役人の心得べき忠のみが忠てなく、今日は平民の忠を說く必要がある。專制時代の忠のみが忠てなく、立憲時代の忠を說く必要がある。鎖國時代の忠のみが忠てなく、萬國對立時代の忠を說く必要がある。故に忠を說くにも孝を說くにも、過去も、現在も、未來も、よく見通しを付けた上て說かねばならぬ。假令好し其說明適當だとするも、之を反覆すること幾回もすると、却つて倦怠厭惡の情を挑發し、甚しきは輕蔑反抗の念を刺激するとになつて來る。忠孝の我國道德の大本たる事は固より予も之を認むること論者に讓らず、又苟も修身書の編纂には念々刹那に之を心に體して忘るべからざる事も承認するものてあるけれども、徹頭徹尾凡ての分量を之に與へざるべからずといふに至りては、予は實際敎授の上に甚だ困難の事にもあり、又其効驗が却て薄弱となりはしないかと杞憂するのである。試に山鹿素行氏の語類中に見ゆる士道の一篇を把つて見ても、其士道全部の精神の固より忠義に在るは、既に第一篇の「己れが職分を知れ」の條に明白なれども、さりとて其士道全篇を通じて終始之を繰返しはせず、寧ろ其大部分は心術の工夫を論じて居る。從來の中等敎育の敎科書に缺點あるは予も之を認め得る者てあつて、嘗て今の東北大學總長澤柳氏が中學修身書を編纂せし時、其編纂の趣意書なるものを發表せられ、中に現行敎科書の缺點を指摘せられたことがあつたが、予は彼の全部には必ずしも賛成するものてないが、其大部分には賛成てあつたのてある。從つて現行の敎科書の不備に就いては予も論者と等しく認むる所てあるが、されど其不備とする點は全く異つて居る。予は論者の言ふが如くに其忠孝觀念を說くの分量の少きを以て憂とせずして、如何にすれば忠孝觀念を修養し、如何にすれば忠孝觀念を有する士を得べきか。之が工夫心術を說くの用意が缺けて居るを以て其の缺點と見て居るのてある。蓋し、徒らに忠

孝の御念佛を唱へたとてそれて正確なる忠孝思想の涵養を必することは出來ぬ。

四

又他の一方に於ては、凡そ各民族の思想の發展は、常に同一の進路を取るものであつて、只甲と乙との間の差別は其思想發達の階級に於ける高低の差に外ならないと見て、我國の思想界が今此の如き過渡期の擾亂を受けつゝあるのは、一面歐米の先進國の如き思想に進まんとする氣力あるに對し、一面それを控制せんとする保守的精神起り居る爲に其の軋轢確執から出た現象に外ならない。歐羅巴にても曾ては斯ゝる過渡期を經過したのである。近世の初に於いて、十八世紀の末に於て又十九世紀の中葉に於て、斯くして相遞して今日に至つたのである。我國の思想界も同じく曾て歐羅巴の思想界の歩みし道を反覆し居るものであるから、その過渡の盤渦から免れしめんためには、可成早く一躍直に今見るやうな歐羅巴の如き思想と爲さねばならぬ。啻に思想界のみならず、政治、法律、經濟、產業の如き、社會萬般の制度も亦同じく進化するもの、而して日本の現行の諸制度も歐羅巴の過去の道行を反覆して居るに過ぎざれば、是れ亦一刻も早く今見る歐羅巴の如き制度に倣つてそれにしてしまはねばならぬ。然らざる限りは此擾亂の決して鎭定するものでないと考ふるものもある。即ち之を以て最も賢い救濟策となし居るものもある。如何にも抽象の論としては此論は必ずしも否定すべきものでない、凡て思想制度は共に變遷進化するもので、又必ず變遷進化しなければならぬものであるが、されど國には各特徴あり、民に各々特色ありて存在するものであるから、其各々の特徴に從つてこそ進化し行くべきもので、必ずしも甲の民族の歩みし儘に乙の民族も亦歩まねばならぬものではない。即ち歐羅巴の諸民族には彼等の特徴ある習慣風俗ありて、而して其歴史に見る如き發達進化を遂げて來たものであるが、我が國には亦我が國の特色があるから我國の思想制度が進化發達するに當りても、亦自ら其特徴に從ふべく、又從はざるべからざるものであ

る。故に夫の歐米の今日に見るが如き發達それのみが必ずしも文明でない、日本は日本の特徴を帶びて其儘に進化するが同じく文明たるに相違ない。徒に己を忘れて他に倣ふは個人としても極めて陋にして、個人の生存及び價値を忘却することとなるが如く、一國として徒らに他國を模倣するあらんか、其醜其陋更に唾棄するに堪へたものである。

五

之を要するに現今の過渡思想の救治策として現れ居るものは、二道の潮流に歸するといふことが出來る。一は歴史主義であつて、一は理性主義である、歴史主義は專ら我國史の由來に立脚し、凡て日本の思想、風俗、習慣は日本の歴史の所產なるが故に必ず之を重んじ行かざるべからず、而かもそれ等の歴史上の所產がそれ自身にて價値を有するもので、それ以外に價値を有するものなしとの主義であつて、他の理性主義といふは理論に萬國變りはある筈はない、我が國史の由來、性質などといふは偏狭の考である。特殊の個別性を脱し、普遍のものを求めた所にのみ價値あるものがあるとするの主義である。此歴史主義及び理性主義は汎く古今の思想史を見るのに、過渡期には大抵共に現はれ來つたものであつて、我日本の現時も同じく其一例たるに過ぎないのである。今茲に古今東西の兩主義の敍述及び批評等は一切之を省き、只現時我思想界に現はれた者に就いて、直截簡明に言へば、此兩主義は孰れも一長一短あつて、其一に偏すべきでない。歴史主義は堅實であつて能く秩序を保持するといふ大効驗ありとはいへ、それに偏せば保守固陋となり、進歩を沮害し、時勢の變遷に伴はざるに至る虞がある。今忠孝の思想を鼓吹するに當つても、時勢の變遷人心の推移を察せずして、徒に古き忠孝の觀念を以て之に擬せんとするに至れば、殆んど其効力を現じ得ざるのみならず、却つて其弊のみを助長するが如き事がないとしない。又理性主義は之に反して進歩發展を促すには極めて恰好なる主義であるけれども是に偏せば甚しきは破壞の勢力ともなるのである。由來人間の理性は一面に

は必ず破壞的性質を帶ぶるものにして、物を比較し研究し批評するといふは軈て其ものを破壞すといふ事である。故に徹底せざる理性は、動もすれば破壞に陷るは免れ難き自然の勢である。夫の抽象的に個人の絕對自由を考ふといふが如き、亂暴にして誤れる思想を抱くに至るも畢竟此の不徹底なる理性の命ずる所に外ならない。此兩者の一のみにては到底今日の過渡期を經過し、我國の思想界をして再び平安なる行路に就かしむることが出來ぬ。唯是あるは能く兩主義の衷を折して其一に偏せざる所に在るのである。

此兩主義は一見相反するが如きも、實は決して然うでない。歷史主義は歷史の所産として生れたものは凡て價値あるもので價値あるものはそれ以外に無いとするものなれども、其主張を分析し考察し來れば、其處に必ず一定の理想の存在を認めざるを得ない。何となれば、歷史的に發生し變遷し來れるものは必ずしも善きものとのみはいはれない、善きもあれば惡しきも亦ある。例へば法律の漸次進むに從ひ之を破る方法も智慮も共に進むが如く、善き者の進化と共に惡しき者の進化も亦免れない、若し歷史的に生ぜしものはすべて價値あるものとすると、其惡しきものも等しく價値あるとしなければならぬ。是れ甚だ不都合なる議論といはざるを得ない。只其處に理想なるものがあつて、其理想を尺度として計ることあるが故に、此は價値あり彼は價値なしと判斷するを得るのである。故に理想なるものなくしては歷史主義は成立つものではない。次に理性主義に就いて考ふるに、理性主義の主張する所謂理想なるものは如何にして生れるものかといふに、そは歷史を離れて存在する事の出來ぬものである。理想は現實存在し居るものを分析批判し、其本質を捉へ來りて其向ふ所を察し、それを再造するによりて生ずるものである。それには元より古今東西幾多の事例を引いて比較參照する必要がある。若し然らずして現實成立する事實を閑却し去り、單に一片の理論によりてのみ或る觀念を打立てなば、そは理想にあらずして空想である。理想は現實の根柢に立ち、乃至歷史の基礎

に立ちて變現し得らるべき底のものである。之に反して空想は過去及び現在の事實を閑却して立てるものてあつて、到底實現し得られるものてない。故に空想ならざる理想を重んずる理性主義ならば、そは必ず歴史の基礎の上に立たざるべからざる者てある。斯かる道理故今進化といふ一片の抽象的理論にて、我日本の今日の思想界を批評し、又之を指導せんとするが如きは、所謂空想に驅られて實現すべからざるものを實現せんとするものて、予は決して其の可なるを知らないのである。

六

最後に我思想界の一隅には沒我主義、主我主義などといふを立てて此過渡期の救治を爲さんとするものも見ゆれど、所謂主我主義なるものの思想も明瞭ならざれば、又沒我主義なるものの思想も明瞭てない。而かも論者は我國の思想の特徴は沒我主義にて西洋思想のそれは主我主義なりなどと一概に斷じ去るけれども、それとても爾く容易に斷じ去らるべきてない。能く事實精査の上に爲すべき事にて、我國の思想も所謂沒我主義らしく見ゆる所あれど亦甚しく主我主義らしき所もあり、之に反して西洋思想は所謂主我主義らしく見ゆる所ありと雖も、其中又往々に沒我主義らしく見ゆる所もある。此頃動もすれば一部の思想界に日本の國民性は云々のものなりなど、無雜作なる立言を爲すものもあれど、是等は所謂質の一面をのみ見て云爲するの徒てあつて一國民族の特性といふが如きは精細なる研究を遂げずして言はるべきものてない。又精細に民族心理を研究せば愈よ以て斯かる大膽なる斷定を下すの困難なるを感ずるてあらう。而かも予の寡聞なる未だ日本の思想史を材料に取りて精細なる民族心理の研究を遂げたものあるを聞かぬ。否、日本の思想史そのものの研究すら今日未だ大に起れりといふを得ざる有樣である。然るを輕々に日本の國民性は此の如きものなりなど誠しやかに論ずるは決して學者的態度といふを得ない。世の國民性を論ずるものは、大に猛省せざるべからずと信ずる。(了)

社會病と慈善問題

海野幸德

一

慈善問題を深く討究するには、どうしても人種改造學に突入しなければならぬ。されど人種改造學上の慈善論は他日發表する筈てあるから、こゝには他の方面、即ち社會問題としての慈善を論ずるのてある。人種改造學上の慈善論は本論のつゞきてあるから、併せ讀まるゝを希望するのてある。

我國に極端なる社會主義の發生すべき原因があるか、社會狀態はそれほど切逼して居るかどうか、之れは論ずるまてもなく明白なることてあるが、兎に角危險なる社會病の發生した以上、之れに對する救治策殊に根本的救治策を定めてをくことが必要てある。根本的救治策は生物學上のものてある。救治策は、之れを政治上より經濟上より宗教上より教育上より社會政策上より哲學上より案出することができるが、根本的救治策は生物學上より設定することをうるのみてある。

一切の人事は外圍と遺傳との司掌し支配するところてある。外圍と遺傳が基礎になつて居らぬ人事なるものはない。人事の根本は外圍と遺傳とてある。從つて社會病の救治策なるものも、その根本的のものは、外圍と遺傳との兩者に關係を有し、その基礎の上に形成せられ建設せられたものてある。又なければならぬ。貧者とは何ぞ、不具者とは何ぞ、犯罪人とは何ぞ、惡質者とは何ぞ。之れは生物學上の問題であつて、政治學上の問題ても經濟學上の問題ても宗教上、教育上、社會上、哲學上の問題てもない。貧人は何故に貧人なるか。遺傳と外圍との兩者が貧人を造成するのてある。犯罪人は何故に犯罪人なるか。遺傳上、身體的精神的

社會的遺傳の分量品質及趣態が犯罪人なるタイプを鑄造するのである。惡質者とは何ぞ。父母並に先代のサイコフイジカル、コンステイテユーションが惡質者を現生するのである。貧人の貧人たる原因も犯罪人の犯罪人たる原因も惡質者の惡質者たる原因も悉く生物學上のものであつて、遺傳と外圍とに基礎を有して居るものである。貧人の貧人たる原因を除き、犯罪人の犯罪人たるの原因を除き、惡質者の惡質者たるの原因を除くことが社會的缺陷を根本的に救治する所以である。されば社會病の根本的救治策なるものは生物學上のもの、即ち遺傳と形質とに基礎を有するものでなければならぬ。政治上、經濟上、宗教上、教育上、社會上、哲學上の救治策は生物學の基礎に建設せらるべきものであつて、之れに牴觸し又之れを破壞するやうなものであつてはならぬ。若し生物學的根據を有せず又之れに背反したやうなものであれば、それは救治とならずして破壞となるは明白なることである。社會心を發揮して、慈善博愛に從事することはよいが、生物學的識見を有しないと、たゞに勞して効なきのみならず、個人を傷害し人種を衰敗し社會と國家とを衰亡することゝなるのである。文明社會に行はれて居る慈善博愛なるものが一つとして十全なる結果をえて居るであらうか。貧救院は社會に如何なる幸福をもたらしたか。養老院は如何。慈善病院は如何。孤兒院は如何。犯罪人保護事業は如何。感化院は如何。一つとして人類の幸福を增進し社會と國家との昌榮を促進したものはないではないか。人類を衰敗せしめ社會と國家とを破壞する要具たるが如き觀があるではないか。救貧院を開設する。その結果は如何。幾何級數的に貧人の增加となり、貧人は社會と國家とに充溢することゝなるではないか。食物對人口の關係については近く鄙見を發表する積りであるが、食物と衣服と住居との獲得と安固とはその程度に比例して人口を增加するのである。されば貧人に衣食住を給與すると云ふことは貧人を製造すると云ふことになつて、慈善博愛の目的は少しも達せられぬのである。世人の中には予の論法を以て、貧者

や弱者を窘迫するものとなすものあるやうであるが、予はたゞに貧者や弱者を迫擊せざるのみならず、生物學的根據に從ひて積極的に救助せむとするのである。慈善病院や感化院や孤兒院は現時の如き感情的盲目的根據に立つて居る以上、百害ありて一利なきものである。感化院、孤兒院、慈善病院、救貧院、養老院の建物を破毀せよと云ふのではない。之れはそのまゝにして置くがよろしい。されど事業を經營する主義と方針とは一變しなければならぬ。生物學上の法則に據り遺傳と外圍との分量、品質、按排を考定し、知識と智慧と論理と理想とによりて、十全圓滿に其目的を達成しなければならぬ。

政治上の救治策も經濟上の救治策も宗教上、教育上、社會上、哲學上の救治策も、生物學上の原則法則を充分に加味し咀嚼し消化しなければならぬ。然らざればたゞに効果なきのみならず、人種を衰敗し社會と國家とを破壞することゝなるのである。

二

社會の病根を治醫するには遺傳、外圍の兩者を充分に考慮せねばならぬ。特に遺傳を重視しその眞義に明徹しなければならぬ。吾人々類の可塑性は同一ではない（拙著「日本人種改造論」參照）。各個人の心的受容力は差異を現じて彼此一致せぬのである。個體を形成する素質は千差萬別である。從つて同一の個體は存在しないのであつて、個體には優良なる個體も劣惡なる個體もある。若し優良なる個體の數が多ければ人種は優秀なるものであるが、之れに反し劣惡なる個體が多ければ人種は劣惡なるものである。原則として優良なる個體は劣惡なる個體よりも生存に適する。されど事實は之れに反することが多いのである。劣惡なる個體が反つて優良なる個體を驅逐し壓迫することがある。植物や動物にはかくの如きことは絕えてない。優良なる個體は必ず存續する。不良なる個體を壓伏し驅逐する。かくして動植物の改造は行はれ、人類の場合に於けるが如き不良劣惡なる個體は絕えて生存しない。貧者、不具者、犯罪人、惡質者の如きものは淘汰せられ健全

なる形質を有するもの丶みが生存するのである。獨立自助の能力ある個體のみによりて社會や國家が形成せられて居るならば、貧人など丶云ふものは社會や國家に存在しないのである。從つて社會に病根など丶云ふものはないのであつて、社會病など丶云ふものは現生せぬのである。社會病の現生する根源は不良劣惡なる個體の存在によるのである。されば社會病の根源は形質によるのであつて遺傳は社會病の原因をなして居るのである。社會病の原因は遺傳にあり形質にある。然るに遺傳と形質との問題を除外し、政治によりて貧人を處理せむとし、經濟によりて之れを救助せむとし、宗教教育によりて之れを教化せむとし、社會政策によりて之れを救出せむとし、哲學によりて徹底せる解案を見出さむとするのは木に縁りて魚を求むるの類であつて何等の効果なきは明らかである。不具者も白癡も犯罪人も惡質者も、其不具者たり白癡たり犯罪人たり惡質たる原因は遺傳にあるのであるから、貧人の場合と同じく根本的の救治策は形質を改良し遺傳を精良ならしむることにある。形質問題、遺傳問題に留意せずして、無益なる人命救助や有害無益なる感情的慈善を行ふ結果は、不具者の增加となり、白癡、犯罪人、惡質者は社會と國家とに充滿すること丶なるのであつて、かくして社會の病因は確實に導入せられ、こ丶に社會病を發生するのである。社會病を根治することは盲目的感情的慈善の職能ではない。又職能たりえぬのである。感情的慈善は確實に社會病の病因となるものである。されば世人にして慈善を以て社會病を根治せむとするが如きは、たゞに勞して効なきのみならず、幾倍幾十倍幾百倍の病根を培養し獲得するのである。慈善を以て救治策となすは思はざるの甚だしきものであつて、若しその目的が十全に達せらるれば、將來必ず重大なる社會病の發生するに至るは火を睹るよりも明かなることである。社會病を救治するものは生物學上の知識を遺憾なく適用したところの知識的慈善と稱するものである。慈善の堂宇は破壞するを要せぬのである。その方針と其主義とを一變すればよいのである。

慈善は善いことてある、醫術もよいことてある。されど理想的慈善と理想的醫術がよいのてあつて、熟れの慈善も熟れの醫術もよいと云ふ譯てはない。慈善にも醫術にも方法、組織、理論並に理想がなけらねばならぬ。現今行はれて居る慈善は極めて粗朴なる見解によるものてあつて盲目的感情的なるものてあるが、醫術も亦單に治醫するを以て目的として居るものてあつて、單純粗朴なる見解によるものてある。醫術は治療術たるだけのことてある。然るに人事は極めて複雜てあつて千種萬種の關係が入り亂れて居る。此の複雜なる人事界に於ては醫術も亦單に治療術たるだけてはいけないのてあつて、諸種の關係を取り入れてプラス、マイナスしたものてなければならぬ。治療術だけてよい筈がない。少しく考慮すればかゝることは何人にも思ひ出でらるゝことてあるが、現今に於ては未だ醫術は治療術として存し何等複雜なる關係を取り入れて居らぬのてある。これは早晩變改さるべきものてあつて、動物に對する治療術より人類に對する治療術にうつらなければならぬのてある。現今の醫術は感情的慈善と同じく人類を破壞する要具たるが如き觀がある。疾病者を治醫すると云ふことが人種を强健ならしめ社會と國家との幸福を增加すると云ふことてはない。優良なる個體の疾病を治醫してその死滅を免れしむることは人種にも社會にも國家にも有益なることてあるが不良劣惡なる個體を治醫してその死滅を免れしむると云ふことは人種にも社會にも國家にも有害なることてある。不良劣惡なる個體は治醫するを要せずと云ふのてはない。此の種のことは既に論述したから更めて辯妄するの必要はない。醫術の優良なる個體を治醫して人類の幸福を增加するの大なるは言はずもがなのことてあるが、現今の盲目的醫術にありては不良なる個體の生存を助長すること大にして、全體上より言はゞ醫術は人種を破壞して居るものてあると言はねばならぬ。その然るは「東洋時論第二卷第三號」に述べたから再說せぬのてある。吾人は醫術が速かに動物の治療術より人類の治療術に進轉するを希望するのてある。

社會病の根治策は形質と遺傳とを充分に考慮し咀嚼し消化したものである。世に謂ふ慈善なるものは社會病の病因を培養するものであつて、社會問題の解決とはならぬのである。然るに此の種の慈善観は感情的盲目的に鼓吹せられ唱導せられて、いつ如何にして重大なる社會病が襲來するかを知らぬのである。愚なることである。

三

亞米利加には一八八〇年に六萬六千二百三ヶ所の貧民收容所があつた。それが一八九〇年には七萬三千〇四十五ヶ所に増加して居る。米國政府の一年間に支出する慈善金は壹億萬圓に達する。慈善團體の金額を加ふれば驚くべき巨額に達するのである。莫大なる金額はこゝでもそこでも慈善の爲めに費されて居る。然かも人種を衰敗し社會と國家とを破壊する爲めに費されて居る。之れが爲めに惡質者は確實に増加して居るのである。惡質者が増加して居るか否かを確實に證據立つることは社會問題にとりて重要なることである。惡質者の増加が確實なる事實であるならば將來重大なる社會問題を惹き起すことは明白なることである。惡質者は増加して居るかどうか、惡質者の全體に渉りて攻究するを要するのであるが、こゝにはたゞ貧人に就てのみ攻究し他は類推するに止むるのである。

貧人は外圍に適合すること少きもの又適合せざるものである。飢餓に窘迫さるゝ、疾病にをかさるゝ、諸種の危險に侵害せらるゝ、風雨に曝露する、思慮乏しく短見なるが爲め諸種の事變に遭遇する、精神上の苦痛は常に侵迫して止むときがない。貧人は外圍に適合せざるものである。その生存を保全することのできぬのは明白のことである。されば貧人の死亡率は高い。英國にては上流社會の生存年齢は平均四十四年であり、中流社會は二十六年であるが、下等社會は二十二年である。上流社會の四十四年に比して著るしき差異である。アンダアソンに據れば四室を所有するものゝ死亡率は一二、三パーセントであり、三室のものは一七、二パーセント、二室のものは一八、八パーセント、一室

のものは二三、八パーセントである。カスパルに據れば一千人の富者と貧者との各年齢に對當する生存數左の如くである。

年齢	富者生存數(千分の)	貧者生存數(千分の)
五歳	九四三	六五六
一〇歳	九三八	五九八
二〇歳	八六六	五六六
三〇歳	七九六	四八六
四〇歳	六九五	三九六
五〇歳	五五七	二三八
六〇歳	三九八	一七二
七〇歳	二三五	六五
八〇歳	五七	九

即ち富者の平均生存者年齢が五十歳なるに貧は三十二歳である。ヴイレルメイの調査によれば富裕なる地域は死亡數が五十三分の一であるが、貧者なる地域は四十分の一である。ロード、エブリングトンによればロンドン市の富裕なる地域は死亡數が四十分の一であるが、貧窮なる地域は十三分の一である。ウォルフによれば生兒の死亡數は、勞働者にありては三〇、五パーセントであるが中流社會は一七、三パーセント、上流社會は八、九パーセントである。レックに據れば收入高と生兒の死亡數とは左の如き關係を有する。

收入高	死亡數
〇―七五マルク	四一三
七五―一〇〇マルク	三四四
一〇〇―一五〇マルク	三三〇
一五〇―二〇〇マルク	二七二
二〇〇―二五〇マルク	
二五〇マルク以上	二三〇

バヘムによれば收入高と生兒の死亡は左の如き關係を有する。

收入高	死亡率
六〇〇マルク	二九パーセント
六〇〇―一五〇〇マルク	二五パーセント
一五〇〇―三〇〇〇マルク	一八パーセント
三〇〇〇マルク以上	一五パーセント

貧者の死亡數の多いと云ふことは以上の數字によりて確證されたのである。貧者の死亡率は富者より多い。然らば次代の大部分は富者によりて形成せらる、

てあらうか。否、否。次代の大部分は貧人によりて形成せらるゝのである。貧人の死亡數は多い。然かし出產數も多い、極めて多い。富者の死亡數は少ない。然かし出產數も少ない、極めて少ない。されば全體上よりは貧者の生存數が富者の生存數よりも多いのである。かくして人種は漸次貧人によりて形成せらるゝことゝなり、人種的價値は低下するのである。

ベルチイロンの調査するところによれば富者と貧者との出生數は左の如くてある。

	赤貧者	貧者	中產者	富者	富豪
巴里	一〇八	九五	七二	六五	五三
伯林	一五七	一二九	一一四	九六	六三
維也納	二〇〇	一六四	一五五	五三	一〇七
倫敦	一四七	一四〇	一〇七	一〇七	八七

富者と貧者との出產率が異るのみならず、結婚年齡も亦異るのであつて、富者は貧者よりも結婚することがをそいのである。坑夫の結婚年齡は平均二四年てあり、書記は二六年、商店所有者は二七年、專門的職業に從事するものは三一年てある。それてあるから富者の出產高は貧者の出產高よりも著るしく劣ることゝなるのてある。ダンカンに據れば年齡によりて生產力は異るのであつて、一五―一九年に於ては出產力九、三てあるか、二〇―二四年には七、九二てあり、二五―二九年には六、三〇てあり、三〇―三四年には四、六〇てある。此の關係を數字によりて提示すれば、Aなる貧者とBなる富者との增加の割合は次の如くてある。

年數	A	二七	五四	八一	一〇八	一三五	一六二
	B	三〇	六〇	九〇	一二〇	一五〇	一八〇
人口		四	八	六	三二	六四	一二八

年數	A	一八九	二一六	二四三	二七〇
	B	二一〇	二四〇	二七〇	三〇〇
人口		二五六	五一二	一、〇二四	二、〇四八

これて見るとAは二百七十年間に二、〇四八になるのてあるが、Bは二百七十年間に其半數一、〇二四となるのてある。

貧者は出產數多く死亡數が多い。富者は出產數少く死亡數が少い。それてどちらが增加率が高いかと云ふ

に、富者の出產率ひくき原因、即ち制情は益々廣く深く强くなるに反し（本誌第廿五年第十號參照）、貧者の死亡數は外圍の改善により益々確實に減少するのであるから、貧者の增加率の方が高いのである。今後益々高くなる傾向がある。現時に於ても貧者の增加率の高いのは、ダルウヰン、プレーツ、スタンレーなどが云ふ通りであつて、次代の大部分は貧者によりて形成せられるのである。

こゝに於てか天下を顚倒せしむる大禍根の存在が確證されたのであつて、吾人はどうしても高臥安眠することができぬのである。之の大禍根を除去することが社會問題を解決することゝなるのである。然るに一部の人士は大禍根を培養する感情的慈善（知識的慈善にあらず）を以て之れを除去せむとして居るのである。無謀にも淺慮にもほどがある。予は今に於て之れを六千萬人の同胞に警告しその猛省を要請するのである。

四

貧者の增加は確證された。然かし貧者の遺傳的劣惡者たる確實なる證據があるか。惡質者の全部は遺傳的のものである。予は今之れを精細に論述することをえぬのであるが、貧者に對してのみ一瞥を加ふるのである。

動物の優劣は身體を標準となし、人類の優劣は精神を標準となすのである。されば人種改造とは精神改造と云ふことであつて、ある人の云ふが如く身體改造と云ふことではない（此の種のことは科學世界に寄稿してをいた拙稿によりて承知せらるゝを乞ふ）。身體や體格の改造などゝ云ふことはどうでもよいことである。精神に關係する範圍に於てのみ身體改造は必要なることである。日本人種の體格改造などゝ云ふことは無意味のことである。身體はどうでもよいと云ふのではない。人類改造は精神を標準とするものであるといふのである。人類優劣の標準は精神にある。然らば貧者と富者との價値は精神の優劣によつて定めらるゝのである。果して兩者の間に精神の差異があるであらうか。

アンモン、プレーツは精密なる研究の後、貧者の頭

腦の富者に劣ることを發見した。にンモンは學者、技師、工藝家に就て攻究し、その頭腦の長さ十八センチメートルより劣るもののなきを發見した。タルノヴスキーに據れば醜業婦の頭腦は一四五二キユビックセンチメートル、女犯人は一四六二、農業に從事する女子は一四六五、都會に住する女子は一四六七である。ル、ボン並にウエルケルに據れば頭腦は階級により左の如き差異を現じて居るのである。

頭腦の周回cm	五二—五三	五三—五四	五四—五五	五五—五六	五六—五七
學者	〇、〇%	二、〇%	四、〇%	六、〇%	一八、〇%
市民	〇、六%	一、九%	六、三%	一四、〇%	二四、五%
當時の遺族	〇、〇%	五、七%	八、二%	一三、八%	二八、五%
奴婢	一、八%	五、四%	五、四%	三五、九%	四三、八%

頭腦の周圍cm	五七—五八	五八—五九	五九—六〇	六〇—六一	六一—六二	六二—六二、五
學者	二六、〇%	一八、〇%	八、〇%	六、〇%	二、〇%	〇、〇%
市民	二四、五%	一四、九%	七、六%	三、三%	一、八%	〇、七%
當時の遺族	三〇、〇%	一三、八%	八、三%	一、八%	〇、〇%	〇、九%
奴婢	一〇、七%	〇、〇%	〇、〇%	〇、〇%	〇、〇%	〇、〇%

これて見ると、精神的貴族即ち學者の五二—五七のものは三〇、〇パーセントであるが、奴婢は八九、三パーセントである。之れに反し五七—六二、五のものは學者は七〇、〇パーセントを占め、奴婢は僅かに一〇、七パーセントを有するにすぎないのである。之れて劣等者の精神的に劣惡であるとが確證されたのであつて、貧人の頭腦は確實に富者の頭腦よりも劣つて居ることが、分るのである。されば貧人は形質上の劣惡者なりと斷定することができるのである。かゝる劣惡者の增加し跋扈することは、人種や國家に取りては由々敷大事である。

五

以上論述せしところによりて不具者、白痴、犯罪人、貧人、惡質者の如何なるものなるかゞ分つたのである。形質上の劣惡者を處分することはその個體の蕃殖を制限し又阻遏するより外にないのである。即ち社會病を根治することは社會病毒の原因となつて居るところの惡質者を減少し之れを除去することてある。消極的には惡質者の生產を制限し又之れを防遏し、積極的には劣惡なる形質を改造することが眞の社會問題解決法て

ある。之れ以外に社會問題を解決する方法なく又社會病を根治する方法がないのである。されば社會病の根本的救治策はどうしても生存學上のものでなければならぬのであつて、政治上、經濟上、宗教上、教育上、社會上、哲學上の提案は根基にふれぬ皮想的なるものである。慈善博愛などゝ云ふ淺薄なることで社會病は解決せらるゝものではない。文明人士も未だ慈善に關する識見に乏しい。その結果勞して効なきは勿論、惡質者の減少を計りて却つてその増加となり、その救助を計りて却つて之れを苦呻せしむることゝなるのである。社會問題の根本的解決法、社會病の根本的救治策はどうしても生物學に基礎を置く知識的慈善又人種改造より外にないのである。人種改造の事たる我國人に紹介せられし以來日尚ほ淺きを以て、充分その眞義に透徹しその必要を覺知するものゝ少きは止むをえざることであるが、之れより、漸次その意義に通達し熱心に之れを實現するに至らなければならぬのである。聖上陛下の聖旨に從ひ慈善博愛の目的を圓滿完全に遂行するにはどうしても予の論法に從はなければならぬのである。

觸れざる政論

足立北鷗

一

本邦近時の政論は十數年前に比し確に其活氣を減じた傾きがある。それには色々の理由があらう。所謂官僚派と所謂民黨との相撲が殊の外長期に渉つた爲め、双方とも既に角力疲れ、觀る者も亦張り合が抜けたといふ事が其の一つ、藩閥非藩閥とも其旗色が年々褪め

て來て黑が黑ならず白が白ならず、互に鼠色になつた爲めに、勢ひ花々しい喧嘩の出來無く爲つたといふ事が其の一つ、又た政論が漸次に抽象的より具體的となり、放膽的より小心的と爲つた爲めに、大雜把の議論の大向の喝采を贏ち得るに足る者が無く爲り、何と無く景氣の惡い樣に思はれるのも其の一つであつて、其外にも猶二三の原因と思はるゝものが無いでもないが、要するに、皆是れ皮相の見、淺薄の説であつて、眞の大原因は確に別に存在して居ると思はれる。其の果して何であるやは一言にして盡す譯には行かぬが、強いて簡單に言はゞ「政論が物の要點に觸れて居ないからである」といふに歸着する。

二

此の觸れて居ないといふ事を説明するには其資料として各種の事實を臚列するの必要があるが、我輩は便宜上、先づ政府と議會、藩閥と非藩閥、官と民といふ樣な相對物乃至敵味方を超越したる日本の立國の大方針に就て一應の考究を試み、次に、最近數年間の政爭及び其政爭の周圍に起れる言論を吟味して見たいと思ふ。斯くすれば政論が迂遠であつて國務及び政務の肯綮に中つて居ないといふ事は、直に此紙上に躍り出るのである。

三

我輩は平生各種の會に出入して、所謂當世の諸名士に面接する事が度々ある。其中には、官吏もあり、學者もあり、實業家もあるのであるから、會話は多岐多樣であるが、言苟も邦家の將來に及べば、何人も先づ聯想するものは、支那の將來である、乃至支那の運命より波及すべき東洋の風濤の動き加減である、將又、太平洋問題の商量である。凡そ此等の事は皆關係が極めて重大であるので、誰れにも彼れにも悉く長計大策の定つたものがあるといふ譯でもないが、何とか彼とか方針を決定し無くてはならぬといふのは異口同音の響である。而して此等の人々の中には、極端なる誇大な考を持つて居る者があると同時に、又反對に非常なる退嬰的の説を立てゝ居る者もある、其誇大の分は暫

く措くとして、退嬰的の人士中には滿洲放棄論もあれば朝鮮賣却說もある、米國も非律賓賣却論あり、英國に對南亞非戰論ありしと同樣、必ずしも驚くに足らないのであるが、國務を積極的に行るのと消極的に行るのと、又帝國主義的に行くのと非帝國主義的に行くのとは、政治の根本義、立國の大方針に於て重大の相違があるのであるから、是れは大に考へなければならぬ事と我輩は感じて居るのである。早い話が海外に於て雄飛を試み一步も退くまいと思へば、自然に陸海軍の擴張も要るし、又內治一點張で進むのならば、軍事費を節約して之を生產費に廻すも好し租稅輕減の資とするも可といふ事になるのであつて、眞面目なる政綱の分れ目は確に此處に在ると思はれるのであるが、眼を轉じて政界の分野を見ると、彼等の離合集散は決して此分れ目より分れて居ない、言はゞ分水嶺の無い行潦の如きもので、流派も無く流脈も無く、淸濁雜揉、大小混淆、方物すべからずてあるから、各派から口々に思ひ〳〵の偶感を述ぶる事、恰も水筋が何方へ向ふやら分らぬ樣な趣があるが、其の論旨が國家經綸の大方針と相接觸して居ないのは、即ち異口同調てある。我輩は今之を具象的に言つて見やう。

四

今春の議會には廣軌鐵道案が出た、反對の勢が强かつた爲か非耶、兎に角、延期になつた、乍併、結局今より十三年目には出來上る事に爲るのである。此政府の案に對して民間ては當初(我輩は特に當初といふ)種々の非難があつた、第一は財政上から第二は狹軌普及との前後緩急からてあつた。一見一理窟ある樣てあるが、廣軌の發案者より見れば、斯んな事は理窟にならぬのである、何故ならば、政府の考ては何を排しても此案をば實行したいからである、『何を排しても』といふ前には、『或者がある』といふ事は何の權威もないからてある。注意すべきは、十三年目といふ此十三といふ數字てある、此十三が何を意味するや、又十三に對し政府に如何の信念、如何の決心あるやを合點せずして、緩急論や財政論を振り舞しては、立案者より言は

と物笑の種に過ぎないのである。つまり、此問題は、我輩の所謂分水嶺さへ峙ち居れば贊否は初より定まるのであるが事實はさうでなかつた。又た毎年の議會を賑はす三稅廢止論なるものがある、其主張者の論理は頗る堂々たるものであるが、是れ亦、政府より意中を言へば『御說には御同感なれど立國の大計上歲入を減じ難き苦衷あり』などゝ應答すべきものである、詳しく言はゞ、政府の信ずる所にては何を扨置きても邦家の緩急に備へ度き或者あるを以て、之れを不必要なりと排擊せざる以上は、政府の爲めには反對らしき反對論とは聞へざる筈なのである。然るに廢止論者の陣笠はいつも乍ら『信義を守るべし』とか『惡稅は改むべし』とか、道德汎論乃至財政通論などにありさうなる抽象說なのである、事務論として拔本溯源の大議論と爲り得ないのは理の當然では無いか。猶ほ一例を引かう、此春の議會で決算が附議せられた時、一議員は稍出色の質問を爲た。それは斯う言ふのである『他の代議士よりは續々政府の不當支出を攻擊せらるゝが本員は支出よりも寧ろ收入に付きて政府の辯明を乞ひ度い。全體四十一年度に於ては世間不景氣にして收入少く政府の所謂自然增收も亦隨て減ぜしに拘らず、所得稅營業稅等の收入の却て前年度より增加せしは何故ぞ、政府は之れをしも猶ほ苛斂誅求の結果にあらずと强辯する乎』云々……成程一寸面白い着眼點であつた、其の爲め此質問には政府委員も頗る閉口の體ではあつた、が併し、其當時傍聽席に居た我輩より桂公の意中を忖度すると、公は屹度胸中にて『他の收入が減ればせめて誅求の出來る部分なりとも誅求せねばならぬ、誅求といへば語弊があるが先づ國務に必要の費用だけは取り立てねばならぬ……』と思ひ、而して我と我自ら辯解して『議會の攻擊も一理あれど國家を擔當する者には亦人の知り得ざる苦衷があるからナ……』など沈思默考したであらうと考へられる。故に此種の非難此種の攻擊に於ても、論鋒が立國の大方針に迄で切り込まねば迚も徹底しないと思はれるのであるが、今日の政論は此處迄屆いて居ないのである。公債政策にし

ても又同じ事、政府が償還をする時には毎度『そんなに還す必要は無い』といふ議論が論客の一部分から起るのであるが、是れとても、政府から言へば、斯くすべき必要が幾らもあるのであるらしい、而して其心事は天機難洩種類のものと推定すべき理由と事情ある事を我輩は夙に觀測して居る。其爲め此處でも亦、非償還論の論據は、他と同樣に、問題の中心を外れて居ると考へるのである。其外例を擧ぐれば猶ほ幾らもあるが、要するに、我帝國の今日に於ては、何を扠置きても、小にしては東洋問題、大にしては太平洋問題に對する將來の覺悟を一定するの必要があつて、萬事萬端皆之より割出して行かねばならぬのであるのに、此大問題に對する積極消極に依て政戰の旗色を分たず——左らば消極説の人は無きやといはゞ、隨分夥多あり乍ら、何故にや沈默して明々地に之を公表せず、單に腹中に之を藏しつゝあるを以て、筆舌の上に現はるる政論は其要領を得ざると前陳の如き次第と爲るのである。

我輩先日或人に向つて、『贊否は別とし、君の滿洲放棄論朝鮮賣却論——精力內治集中主義は、議論として確に一顧の價あり、同論者も亦少からざるに似たり、何故に之を公表せざる』と問ひしに、其人は『時期猶早し』と答へた。早き乎然らざる乎は我輩の知らざる所なれども、斯種の考を持つた者が、其反對の考を持つた者と相互に其所信を公言する樣にならなければ、眞の國利民福に觸れた政論は起らぬと思ふ。

附言　讀者の誤解を避けんが爲めに我輩は玆に我輩の立場を明言して置く。我輩は大日本主義の謳歌者である、退嬰主義を厭ふ者である、唯、議論の混濁を避け政論に確乎たる標的あらしめん爲めに明白なる反對者の出現を切望するのである。

五

次は最近數年の政爭及び政爭の周圍に起れる言論を資料として其政論の如何に間の拔けて居る乎を讀者の前に展開すべき順序と爲つた。處が局面は廣汎であるし、事件も多端であるから、一々之を引證し又批評する譯にも行かないから、我輩は玆に其中の最も重なるものを捉へ來つて、其餘は讀者の類推に一任する事としやう

六

最も重なるものとは、餘の儀に非ず、桂侯と西園寺侯との關係、否寧ろ桂内閣と政友會との關係である。此兩侯の事に就ては、ヤレ妥協をせぬとか、したとか、隨分長い以前から問題と爲つたもので、議會の開くる度每〳〵、諸新聞紙上及び政客間に於て盛に揣摩憶測したのである。今年は情意投合といふ新熟語が出來、政友會の御奉公振りも中々露骨である、剩へ精養軒の饗宴などあつて、水魚の交り管鮑も啻ならずといふ趣きがあつたので、世間も一時は最早兩者の親交を疑はないやうに見へたが、例の内閣の受渡しが頗る怪しいといふ風評が立つたので、ヤレ政友會が騙されたとか、甘く操縱せられたとかいふ冷嘲が方々て聽へる樣に爲つた。即ち之を一括して言ふと、桂と西園寺及び政府と政友會との關係は眞實如何なる程度に在るかといふ事は諸新聞及び政客連には、透明にして寸毫も曇り無い答へは出來ないのである。其結果として政論は常に暗中模索に陷り、隨て、左支右吾もすれば、又朝三暮四にも爲る、殊に時に依つては、桂侯の部下にも西園寺侯の部下にも、親の心子知らざる者あるのみか、怨中黨李の關係が全然支離滅裂に爲る事さへある。我輩が間が抜けて居るといふのは、即ち此處の事である。

七

信ずべき或根據に依つて我輩の確認する所によれば、官僚黨と政友會との今日の關係は、其の出て來る所、頗る遠いのである、其源流の探査は暫く別として、故伊藤公が政友會を組織した眞意が、既に議會を己が意の儘に操縱しやうといふのてあつた、『野武士の横議に委して置くと何を仕出すかも知れないから、此處は一つ乃公が柁を執らねばなるまい』、といふのであつた。(勿論他にも尙重大なる一理由はありたり)伊藤公の此考は、無論、邦家に對する公の忠誠から出たのであるが、此考の實行せられたる時は、即ち政友會の野武士連は悉く公の頤使に從へる議政府の決議機械と爲り了つたのである。然るに此公爵の後を承けた者は明に桂侯あり、野に西園寺侯ありてあるが、此兩侯は二

にして二にあらず、其實一身兩體にして、國家の大問題及び其將來の長計大策に就ては、伊藤公の生前より既に打ち合す所あり、又死後に於て度々相熟議し、今後とても亦互に相談する所あるべしと信ずべき理由があるのである。而して今日の處にては、分業上（我輩は特に之を分業といふ）桂侯は政府に居つて、西園寺侯は政黨に居るから、其自然の結果として、桂侯の内閣は立案して、西園寺侯の黨與は之を賛助し、西園寺侯の黨與は決議して桂侯の内閣は之を實行するのである。此兩侯爵が天下之英雄は使君と吾と耳と言つたか言はぬかは、保證の限りでないが、『議會の事は何分御願申す』『宜しい大丈夫』といふ應答が兩者の間に在つたのは、掩ふべからざる事實であつて、そして此關係は既に久しく連續して居るのであつて、議會の開會の前に毎度兩侯の會見があるのは、眞に細目の打ち合せに過ぎないのであるが、迂遠なる哉新聞記者、頓馬なる哉政客連、いつも〳〵ヤレ、妥協成立とか不調とか噪ぎ立つるのである。我輩は斯の如き際にいつも考へる、西桂兩侯から此下馬評を見ると噴飯可笑いだらうと。

八

茲に至つて讀者の思ひ當らるべき事は、西園寺侯が專斷に過ぎるといふ不平が毎度政友會の一角に起る事である。本年の豫算委員長及幹事の選定など皆此筆法の一例であるが、專斷は無理も無からう。元もと豫め何事もちやんと、政府と打合が着いて居るのであるから、黨員をして之を實行せしむるには、侯が或る程度まで意中を打明け得べき人を其事に幹たらしめやうとする筈であらう。事態は即ち如斯ものであつて、筋書は歷々と讀める、之れさへ呑み込んで居れば、現代政治史の謎は悉く容易に解けるのであるが、此秘密は桂侯語らず、西園寺侯語らず、兩侯の腹心の人さへ底の底までは知らぬのであるから、其他の人々は無論の事、知らぬが佛年々歲々神妙に操られて居る。操られる者の不見識もさる事乍ら、此關係を看破し得ずして、西桂兩侯、程によりては相反撥するかの如く期待し、種々の術策を弄する者の迂愚も亦滑稽の至りである。間

拔加減の夥しさ如斯、觸れたる政論の此間より生じないのは、理の當然ではないか。

九

以上に引證したる事例を中心として猶ほ思を其四周に擴ぐる時は、政論の時務に迂なる實證は累々として到所に發見せらるゝであらう。其爲め、天下の政論に蛙鳴蟬噪の響はあるが、國利民福とは何等の感應がない、言はゞ空高く吹く風の如き者であつて、人の頭上に何等痛切の利害を與へないから、世間では東風でも西風でもどちらでも好い、甲起乙倒、我に於て何か有らんと高を括つて居るのである。政界の沈滯も無活氣も皆此の賜であるとすれば、觸れざる政論の害毒も亦甚しいではないか、我輩は玆に序に此事を附言して置く。人或は言ふであらう、斯る議論を爲す者こそ却て政界の現狀實勢に通ぜざる者であると。果して然らば、我輩は次の如くに答へる。曰く斯る論者の多いのが即ち今日の政論の迂遠なる證據であると。(四月二十日稿)

露國の首相

朝比奈知泉

露國は土壤の濶大なるに應じて人物を輩出せしむるの國なり。而も材器卓拔の士往々慧眼の先輩に推薦せられ、一朝にして國政の要路に當り、士の相見ざる三日、須らく刮目相待つべきもの、眞に露國政界の奇相とす。露國に內閣ありて以來、最初の首相たりしウイッテ氏然り、今の首相ストルイピン氏亦然り。

ウイッテ氏南露鐵道會社に役員として、前の藏相ウイシネグラヅキー氏に知られ、氏の鑒識に由り大藏省

に入り、氏に嗣ぎて藏相となり、後內閣なるもの始めて組織せらるゝに方り、之を首宰するに至る。予はウイッテ氏と面識あるも、今の首相ストルイピン氏に至りては、十年前曾て其の姓氏すら聞きしとあらず。其一たび內相となり次て內閣を首宰するや、聲名徐々として興り今の歐洲の政界露國に伊人ありと呼ばるゝに至る。殊に其の一たび辭表を捧げて露帝の優詔之を却下せらるゝに逢ひ、職に止まりて、斷然波蘭自治制を布くに至りては、其猛然志を成すに勇なる亦壯とすべし。

ストルイピン氏は曾て地方官として、隣縣に一揆の起るに逢ひ、上命を待たずして、之を鎮壓するに成功せしより、其の敏才勇腕時の內相ヅルノヴォ氏の知る所となり、內務次官の一人（露國の制各省に三人の次官を置く）に擧げられ、後遂に內相となり、次て首相に任ぜられたるにて、陞進の速なる亦異數なるも、首相として議會に臨み、能く多數の黨援を得て、巧に之を操縱し、下院に臨むの勢成りて、乍ち上院即ち帝國參議院の反抗に遭ひ、而も其の張本は、先きに內相として、氏を識拔したるヅルノヴォ氏なるに至ては、亦奇と謂ふべし。

露國の內訌に首要の原因を伏するものは、波蘭を以て第一とす。波蘭は孛、澳、露の三國に分割せられ、孛は純然たる獨逸種族の邦なり、澳は獨人を皇帝と仰ぐも、其民種は多樣にして、天主舊敎獨り之を統一す、從て波蘭人は屢々政府に勢力を得て、政權を握ることあるも、露に在りては人種の全く波蘭と同じく斯拉布民族たるに拘らず、宗敎は正敎を國敎とするを以て、舊敎を奉ずる波蘭人に利あらざるの政を敷くこと多く、且つ我維新の前數年まで許されありたる議會も、一旦謀反して獨立を企てたるため其事の敗るゝと共に閉鎖せられ、芬蘭と共に露帝版圖內の立憲國と稱せられたる面影さへも久しく消滅し、露の全帝國立憲政治の邦となりてより、其の議員は固より露の下院に選出され居るも、一地方は以て全露國に敵すべくもあらず、波蘭人の自治を求むるや、其聲益急に益悲し。遂に露帝

差遣の總督を暗殺するの謀議を決して、秘密聚團を設け、波蘭を分割せる三國中比較的自由を得る澳のクラカウを擇びて、本部の所在となし、陰謀密策虚日なく、前總督副總督が引續きて狙擊に遭へるも此が爲なり。ストルイピン氏の慧眼夙に鎭撫の策自治を許與するに若くはなしと認め、議を下院に提出して、其賛同を得たるも、上院たる帝國參議院は波蘭人に同情なく、膠なく之を否決し去りたるにぞ、ス氏の辭表提出となりたるも、氏に代りて此の難局に當らんとする傑物なく、露帝は辭表却下と共に、氏の請議を容れて、議會に數日の停會を命じ、我憲法に於ける緊急命令の一種として、波蘭自治の制は設定せられぬ。之と同時に先には氏の推薦者たり、今は氏の政敵たる前内相ヅルノヴォ氏は勅命を以て上院議員出席停止を命ぜられ、波蘭問題は茲に一段落を告げぬ。

ストルイピン氏は斯くして波蘭問題を片付けたるも、此問題の解結は之を以て永遠のものとすべきや否や、予の知る所に非ず。差向き波蘭に半點の同情なき上院が今後如何の決議をなすべき乎は、ス氏の爲にも、露國全體の爲にも、殊に注目を要するの問題とす。露は廣大の版圖を擁し、各異の宗教風俗を有する民族を包括す。其政治の行ひ難く、成功の期すべからざる殆ど邦人意料の外に在り。

ス氏の波蘭政策は纔に露帝の大權に依り一生面を開き得たるのみ。今後の計談何ぞ容易ならん。ス氏膽大氣豪雄辯滔々議堂を厭するの人と聞く。今日迄の政績は兎に角成功と謂ふべし。更に心胸を豁大にして以て内外各方面の紛絡を解くに努力せんと、予未知の人なるを以て亦之を望まざるを得ざるなり。

依然たる聖堂教育

福本日南

何が明治の新教育歟、教育は依然たる德川時代の聖堂教育だ、由來義務を強いて、權利を與へないといふのが朱子學なんだ、是は治者には至極都合がよろしい、それて德川時代には此朱子學が根本となつて、聖堂教育となつて居たものだ、今日明治時代の新教育などいふけれども政府は矢張り權利思想を國民に普及させたくはない、昔ながらの治者にのみ都合のよい教育を施して居る、忠孝などいふ事をばかり地方の中小學に教え込まうとして個人の權利などは薩張り說くまいとする、憲政など語ることさへも學校ては避けしめる有樣だ、世は依然たる聖堂教育である。

世は徒に議院を責め、議員の無氣力、無節操、腐敗などゝいひ續けるが予の見るところを以てすれば、それが即ち能く今日の民意を代表するものなのだ、彼の日糖事件に關係した瀆職議員の如き最も然りだ、何となれば元々賄賂て當選した議員てある、すればそれが又賄賂て節を賣るのは當然てないか、今の我國民はウン／＼脊中から乘り付けられ、權利は與へられずに義務ばかり責められて居る。斯ういふ政治の下に個人の努力などが起るものてない、起らうとしても抑え付けられる、それに慣れゝば愚圖／＼になる、其中て躍起と爲つて撥ね起るのがあれば偶まファナティックて健全なものてない。到底順番にはいかぬ。併し斯うなるのが當然の結果てある。夫の大逆事件の如きがそれだ、ソシアリズムから進んてコムミユニズム、アナアキズムなどが飛び出すのだ。が此等の徒はまだ馭し易い、彼等は猛烈てある代りに主張するところがある、何等かの目的を持つて居る、その目的が如何にかなればそ

れて治まる。が更に他に始末に了へぬものがある。

それは文士仲間のフエミニンの思想だ、文藝といふと一寸政治と無關係の樣に思ふけれど左樣ではない、至大の關係がある、政治て個人の權利が餘りに壓抑されて伸びる瀬がない時に一國の元氣は銷磨して妙にフエミニンになる、つまらん張臂するよりも寢てて氣樂なことが言ひたいといふ樣になる、それて文藝に趣くものが多くなる。予の友人に小山正武といふ者がある、飲んだくれて仕樣のない男だが、併し醉つて取止めもなく話す語の中には斷片的に面白い思想を含むて居る、彼の正岡子規等が俳界に奮ひ起つた當時の言ひ草が奇拔だ。愛媛は高知と背中合はせの國だ、それて高知の勢力に推されて苦しい所から俳諧などいふ下らぬものが出るんだと、併し斯樣いふ事は昔にもいつたものがある、それは夫の赤穗義士の大石主税だ、久松の屋敷に置かれた時に、赤穗にはあれほど多勢家來が有りながら僅かこればかり忠義のものがないのかと問はれたら、左ればてある、以前は酒飲みが多かつたものだが、今はそれが少くなつて俳人ばかりになつたからだと。旨い事をいつて居る、が文藝にも文藝がある、强ち女性的のものと限らぬ、男性的のものも亦ある、それなら宜しいが、女性的となると一國元氣の消長の上に甚だ憂ふべく而かも前の社會主義などいふものよりも態度の因循なだけ一層慢性的痼疾て始末がわるい。僕等の書生時代には遊廓這入りする青年が多かつたものだが、遊廓這入りする方のものは、一時は盛に遊び詰めても、下らぬから止せといふと、存外早く悟つて止しもする、が只良家の娘共の跡を追ふものがある、此樣いふものは遊廓這入りとは違つて事情の込み入り居るだけ仲々側から言つた位て止せるものてない。文人仲間の女性的感情に根ざす害毒は恰も此樣なもので、際立つて目立たぬ丈に却つて根張りが强くて除き難い。

彼等は又懷疑に陷る。陷つても進んで理性の鍵を以て疑惑の庫を開らかうといふ積極的精進的の態度はなく。懷疑其まゝを悟とする樣な我賢しのニヒリズムに

走る。消極的退嬰的である、なまぢつか學問のあるだけ根差しが深く、又プライドもあるから容易に移り難い、醫者に聞いても左樣いふ、同じ精神病者でも色情狂とか又物に驚いて急に發狂したとかいふ者の方だと早く直るが學者の高慢病ばかりは一寸に直らぬと、是が矢張りそれだ。斯樣いふものばかりになると國家は抵抗力を失つて列强對峙の間に存立が六かしい、古來の諸國の興廢の跡々通觀するに、其國勢の凌夷する時にはそれに先つて先づ其國の士氣が衰へる、女性的になる。印度がそれである、希臘の末路がそれである。又支那でも竹林の七賢などの出た時代は其國運最も傾いた時であつた、印度などへ行つて御覽。此處の樹の根、彼處の岩角と乞兒の聖人が澤山ゴロ／＼して居る、特に其南部の方に一層多い、一向ら虛無靜寂を樂んで現世的活動を厭離して居る、そして風體こそ破れ衣を引き纏うて居るが捉まへて話しかけ樣ものなら皆一廉の學者で、幽遠な宇宙觀やら人生觀やらを滔々と浴せる、彼等は如何して馬鹿にならぬ人種だ、身體こそ黑いものの仲々思想に於ては偉大な處がある、盛に面倒な理窟を並べ立てて得々として居る、が其國勢如何と顧れば誰も知る憐れ果敢ない有樣である、けれども彼等の目には國域はない、一切人類を平等視して居る。物は見方による者の、此お互の生存を否定し寂滅を喜ぶなら國家は要るまい、從つて我々の樣な考のものは其者等には大俗物とも見え樣が、併しながら生存は現實だ、それで其生存を續けて行く上から國家は必要なりと我々はするものである。從つて愛國の精神も必要になる。私は曾て禪學の我國に盛な時に斯樣いふ歌を作つて友人に贈つた事がある。

印度行け聖の乞兒路に充つ
　その大陸を人にまかして。
支那野行け、阿片に醉える知識充つ
　齊魯割かれて燕趙棄てて。
敷島のやまと男兒は脚くみて
　達摩のまねをせざるものなり。

國家存立の上からは虛無靜寂を喜ぶ非活動主義の徒

の忌むべきはいふを要せぬ。併し此樣な思想の國民に起るのは本づく所政府者の態度によるもので、國民に十分の自由が與へられず、努力の精神が殺がれて仕舞ふ時には自然此樣な思想の方向を取る。病源の此所に在るを悟らないで徒に有らぬ方面に力を用ひた所で始まらぬ。

忠君愛國を說くも宜いが、それにも說き方がある、最早や知識の進んで居る國民に向ひ、昔乍らの神聖、神權一點張りで說いても、毫も注意を喚び起すものてない。又かといつた態度て不眞面目に聞き流して仕舞ふ。我々も忠君愛國は必要と思ふが、併しもつと深い根柢から說かなくては今の國民は承知せぬ、國家はヒユーマニチーを維持する爲に必要なものである、世にはコスモポリタニズムを奉じて居てパトリオテイズムを排斥する態度のもののあるは不思議てならぬ。兩者が相撞着矛盾する樣に見るならそれは考が足らぬので決して矛盾も撞着もして居はせぬ。パトリオテイズムを以て侵略主義かなんぞの樣に考へては間違ふ、何も國家を組織することが必ずしも侵略を意味するものてない。そしてパトリオテイズムの原義は只父の國を愛するといふ丈てはないか、併し人類は凡て同胞だからには互に國を立てて小さく固まる必要はない、盡く國域を撤し軍備を廢すべきだといふも知れぬ。けれども悲しい哉今日は猶ほ强者が始終弱者を喰まんとして居る時代て、全人類ヒユーマニチーを重んじて居る時代てはない。此時に國域を撤し軍備を廢するなど眞先がけてするならば、弱肉强食の大勢は必ず其處へ流れ込んて、ヒユーマニチーを蹂躙し去るてあらう。假に今日本の國家が露西亞の自由になるとしたら如何てあらう第一に人種が違ふ。言語が違ふ。風俗が違ふ。彼等の同情は決して彼等の本國人に對するが如くてはなく、屹度我々を野蠻人同樣に取扱ふに相違ない、左樣いふ狀態の下に果して我々が忍んで居られ樣か、盜賊橫行の今日に先づ牆を撤し戶締りをせぬ家があるなら先づ慘禍を蒙る者は必ず其家てある、即ち一家の安全を保つ爲には矢張牆や戶締りの肝腎てある如く、國家も亦互

に虎視眈々爪牙を磨いて居る間は我のみ獨り國域を撤し軍備を去る譯にはいかぬ。即ちそれが我圈内だけのヒューマニチーを擁護する當然の手段だ、此同じ目的の下に組織せられた國家が、共に其侵害者に備へる爲に提携し合ひ、次第に其範圍を擴めて行くなら、遂には全人類悉くヒューマニチーの下に結合するとが出來る、即國家はヒューマニチーの爲に存在する者であつて相背く筈はない、從つてパトリオテイズムとコスモポリタニズムも相反撥すべき者でない、それは中には侵略を目的とするパトリオテイズムもあらうが、左樣なものは特にヴヲルガパトリオテイズムといふ。我々のいふパトリオテイズムとは違ふ、それならコスモポリタニズムと明に相背くが只のパトリオテイズムは決して左樣な者でない、忠君愛國を説くには當に此意義に於てすべきであつて、決して一方にのみ義務を押し付ける樣な昔の聖堂流の思想を以てすべきでない。

聖堂教育流の政府者の態度の弊が唯政界や文藝界に影響するのみではなく、凡ての方面に波及して居る、經濟界の如きを見ても左樣だ、今の紳商などいふものの多くは皆政府者と結托して居る、彼等の中にも正しい考を持たぬものばかりではない、けれども結托せなければ大きい事は出來ぬ、人にやられて仕舞ふか、馬鹿々々しい、矢張り結托する方が捷徑だといふ樣な風で、意識しつゝもやる事になる。斯う見て來ると世は明治と改まり二十世紀となつても、新しいものは服飾器甑の類のみで矢張り德川時代の聖堂教育の世の中である、政治は依然たる專制政治である。强固なる國家は常に人民の自由が尊ばれ個人の權利が十分に伸長された所でなければならず、又左樣あつてこそ初めて人民に國家を愛する念が痛切に起る譯であるのに是ては困る、それは文明の度が進めば人心も複雜になる、從つて政府の面倒も多くならうが。已むを得ぬ、之を面倒だとて文明の自然の潮流を抑え止めてはいかぬ。要するに此根柢に於て一大自覺が開かれ一大刷新が行はれなくては、何事を策しても畢竟徒勞に終る。(次)

島の人（下の二）

黒頭巾



其一

◉吾輩、嘗て、山陽道を經過するとき、汽車中、島の人に邂逅し、尾の道に於て、盛んに、因島を說くを聞く。

◉因島の名、既に、戰國時代に、瀨戶內海を壓す。「海の日本」の發達を論ずる者、此の島を閑却するを得ず。

◉瀨戶內海の島の發達は、則ち、吾が日本の海上權の發達史なり。瀨戶內海に海賊發達し、日本の沿海のみならず、延いて、東亞大陸の沿岸に橫行し、若し、其の膨脹の勢をして、自然に、伸びて已むこと無からしめば、三百年前、すでに、吾國に、優勢なる海軍の基礎を造る可かりし也。

●尾道より、沖は、九州、四國の海上に當り、島嶼散布し、此より進んで沿海の各方面に發展するに宜しく而して同時に、沿海各州の勢力も亦た、此の間に、錯雜して、扶植し、戰國時代より昭代の今日に至つて、干戈と漁網との混戰地たり。

●此の趣味饒き海面の中心點は、則ち因島ならずんばあらず、這般の意義に於て、因島は、日本の名島たる也。

其二

●因島、は戰國時代に於ける、海賊船の根據地也。今、船渠會社、此の島に設けられ、日露戰役には、海軍に貢献すること少からず。事業般盛にして、繁華の島の町を現出す。而して、島中、當年、海賊の舊城壘、猶ほ存す。

●大内氏の盛時より、毛利氏の初期に亙りて、盛んに、此の海上に戰爭す。毛利氏が遂に、海上權を獲得するは、此の島の豪族村上一族が、彼に歸參するに因らずんばあらず。

●村上一族は、因島、(或は院島)來島(或は來留島)能島(或は野島)の三島に割據し、殆んど瀬戸内海を横斷するの勢あり。能島最も大に、因島は最小也。能、來の二島は、伊豫に屬し、因島は備後に屬す。

●海賊發達史を語るは、本章の主意に非らず。然れども、海賊が陸軍と呼應して、其の用を爲すは、南朝の北畠親房卿に始まると傳ふ。

●南朝遂に海賊を利用し、北朝も亦た之に倣ひ、遂に、伊勢、紀伊より始まりて、瀬戸内海、四國、九州に波及し、到處、海賊にも順逆あり。而して、彼の三島の村上一族が、親房卿の後裔たること、又た以て一奇緣とせずんばあらず。

●海賊の發達史に於て、其の組織、節制の最も完備せるものは則ち三島の村上氏也。彼は、其の態度、すでに、儼然たる海上の諸侯となり、其の領土、人民を保安し、海上の通行船より關税を徴收し、自らまた稱して、海賊大將軍といふ。村上家譜には、累代、朝廷より將軍の綸旨を得たる事を記すといふ。

●如上の意義に於て、村上一族は、海賊の語に、頗る進歩したる内容を附與す。村上の全盛は、吾が海賊史に於ける「三島時代」を劃す。

●村上は、早く既に、大内氏と結托し、支那、朝鮮に貿易し、或は海軍として活動す。當時、支那、朝鮮人にして、貿易を自由にするの意思あらしめば、彼我の通商は、長足の進歩を見しや必せり。

●彼に勘合印あり、貿易に、窮屈なる制限を付す。而して海賊船の貿易力、溢れて已まず、遂に、腕力に訴へて、貿易を強行するに至れるもの、則ち倭寇の一要因ならずんばあらず。

●毛利元就の陶晴賢を討つや、彼我、互に、三島の海賊を招く。嚴島の一戰、水陸の聯合戰也。勝敗の決、唯だ三島海賊の嚮背に由つて定まる。

●當時、三島は、能島に村上武吉(大和守)其子掃部頭元吉、三郎兵衛景親。來島に來島右衛門太夫通康。因島に村上新藏人吉充あり。皆、勇武を以て著はる。一族、相謀り、義に依つて毛利氏に應ず。

●嚴島戰の前一日、大小關船數百艘、舳艫相啣み、三島を發して北に馳せ、悉く、毛利氏の管下に集る。之を統轄する者は、小早川隆景也。嚴島戰の大勢、戰はずして、殆んど、定まる。

●三島の海賊を得るの後ち、毛利氏の海軍、實に、海内に冠絶す。而して、また、三島の歴史に於て、最も光華ある時代ならずんばあらざる也。

其三

●吾輩、未だ三島に一游せず。久しく、其の風光を夢想す。人の因島を語るを聞く、地沃にして海風軟かに吹く。江湖に志を得ざる者、一釣竿まさに珊瑚樹を拂つて、棲老すべきの仙鄕也。

●或はいふ、島の海岸、斷崖の處、亂松、海面に垂る、崖上に家すれば、海色、窓に映じ、雲影。軒に臨む。

●今、船渠會社の職工の町ばかりを以てするも、一小學校を維持するに足る。此の中より、他日、如何なる海國男兒が輩出するぞ、

●風雨順調なれば、此の島より尾道に達する、僅かに、

小汽船一時間程に足らず。觀光の客、筆を載せて、此の島を訪ふも、亦た易々たる事のみ。

●昔時、此の島の盛時を憶ふに、村上氏の城壘、蓋し、龍骨を掛けて梁と爲し、魚鱗を緝めて瓦と爲し、江漢の朝宗を通じ、溪湖の献納を受くるの慨ありしならん。村上氏一去、此の島、久しく振はず。

●今、吾が海軍大發展の盛時に際し、此の島に、一宿して、日出に金鷄を聞き、淡月を微烟に望み、横笛を吹いて、以て、海賊大將軍の雄魂を招かばや。

其四

●村上一族の系譜を尋ぬるに、村上源氏より出づ。伊豫の海賊村上三郎左衞門義弘、内海の海賊を統一して、其の首長と爲り、威勢甚だ盛也。義弘歿して子無し。

●傳ふ、南朝の遺臣、北畠山城守師清、遁れて信州に在り、師清は顯家の子親房の孫也。義弘の死を聞き、以て謂らく、吾も亦た村上源氏にして彼と同宗也。乃ち、手兵數百を率ゐて、往いて、義弘の家を繼ぎ、其の黨の頭領となり、後ち、子孫、三島に割據し、威を西海に振ふ。

●師清は、眞に、親房卿の孫たるに恥ぢず。南風競はざるのとき、新生面を開拓して、永く、南朝の天地を海上に扶植す。また南朝忠臣の快心事業たるを失はず。

●村上一族は、毛利氏に於て客將を以て禮遇せらる。秀吉征西のとき、三島を招く。來島のみ、之に應ず。村上一族、乃ち彼を義絶し、毛利氏の厚誼に報ふ。

●石山城の戰、毛利氏、糧船を送つて、顯如上人を援く、信長の攻圍頗る急。於是、木津川口の海戰あり。

●此時、三島の諸村上、急先鋒たり。村上景廣、敵の大安宅船に攀ぢ上り、先登第一を呼ぶ。諸軍奮進して、遂に、悉く、敵の大艦を奪ひ、糧を城中に入る。此の頃、三島海賊の武威逞しき事、以て想見すべき也。

●海賊の名、必ずしも盜賊にあらず。幕府の初世に至つても、海軍を稱するに海賊衆といふ。海賊發達して海軍となる。日本、英吉利、東西の島帝國ともに、同一揆也。

●三島海賊の陣法、陸戰の甲州流に對し、合武三島流

の名あり。然れども、其の實戰に顯はるゝもの多く傳はらず。

●彼等の戰法、今日と其の精神を異にせず。唯だ兵器の精粗あるのみ。而して勝敗の決は、大砲にあらずして白刃にあり。是を以て、船艦を密集するを得策とし、專ら梯隊を用ひ、單縱陣を執ること無し。

其五

●三嶋の村上一族が、毛利氏に臣事するは、關ヶ原の戰後に在り。

●當時、幕府、海外の交通を斷ち、大船の製造を禁ず。吾が海軍の發達、一大頓挫を來たす。

●此時、毛利氏は、猶ほ元龜天正時代の遠略を忘れず。三田尻を以て、水軍の根據地として、村上一族其の他、水軍の士を祿して、三田尻に置き、分ちて船手兩組とし、麾下に準ず。其の下に水軍の輕卒を置く。特に村上元吉に、大島郡の地、二千石、其の弟景親に大島郡の地、千五百石を與へ、子孫世々相併せて、水軍の主管たらしむ。之を兩村上といふ。

●昇平三百年、毛利氏、水軍の制、古に及ばずと雖も、また綿々として絕えず。つねに操舟の術を習ひ、毛利氏兵備の一部を爲す。

●彼理渡來の後、大勢一變、吾が日本の造船、泰西に倣ふに至つて、三島全盛時の面影、遂に夢となれりと雖も、長州海軍の基礎を爲して、幕末に活動するを得しめたるものは、三田尻の水軍也。

●蓋し、三島、精英の血は、長州に移植せられて、空しく航海遠路の大精神を蘊蓄せしこと三百年也。

其六

●小豆島の名は、雅びやかならず、寒霞溪の名は、甚だ漢癖あれども、霜葉の勝景なれば、それも惡しとは言ふ可らず。

●芭蕉も、小豆島には遊びたることあれども、此の島、久しく顯れず。明治二年十一月十五日、成島柳北、寒雨を衝いて、寒霞溪を攀づ。此の時、神駈の名ありて流石の柳北も、未だ寒霞溪の雅名を用ひず。

●柴秋村、播州に遊び、また嘗て、寒霞溪に登臨す。

神駈は溪の名にあらず、島の絶頂、削壁の山也。之を寒霞溪といふは、耶馬溪に對するのみ、文字遊戯に過ぎず。

●去年、畫伯吉田博、石井柏亭、小杉未醒、滿谷國四郎等、太平洋畫會の領袖相率ゐて、カンバスを載せて、此の島に探勝したるは、此の島ありて以來の、珍客の一ならずんばあらず。

●島の人の淳樸なる、是等の珍客を迎へて歡待甚だ至れり。未醒、「方寸」に通信を寄するを見るに、其の間、頗る喜劇に富めるを想像するに足るものあり。

其七

●芭蕉の『初時雨、猿も小蓑を、ほしげなり』の句、實に、寒霞溪に登りて作るところと傳ふ。此の句、人間に流布して、寒霞の名、久しく知られず。

●芭蕉は、感興を賦して、奇游を傳へず。柳北の游、また、實に、此の句の景情を得るものあり。吾輩、暫らく、柳北の文を抄譯して、芭蕉の奇游を偲ばん。

其八

●柳北の、此の山に登る、寒雨蒼茫として至る。地、僻なれども、酒香殽味、孤島のものに似ず、淸潔、此の粹人を喜ばしむ。

●山麓にある石燈、皆、自然石を以て造り、古色愛すべし。山路に登るに隨ひ、溪水潺湲として苔石磊砢たり。村落の童女、松葉を竹籃に盛りて、山を下り來る。石逕を攀ぢて登るに、雨霽ぎ雲沸く。

●登ること半里、素麪瀑に至る。水、三丈餘の巨巖の面を打ちて下り、水條、流るゝこと綫の如し。兩岸、峰巒突起して、劍の如く、屋の如し。

●四面、皆、石山。澗水琤々。青松は巖頭に生じ、楓樹を交う。薜蘿、纒綿し、岩松、斑爛として石質を埋む。

●支那の畫に見る怪奇の山水は、吾邦に在りては、寒霞溪を推さずんばあらず。山形、或は、尖鋭、刀刃の如く、夾立、屏風の如く、老獅、咆哮し、巨人、坐嘯す。吾邦の山水の、概ね、溫厚の氣象を帶ぶるに似ず。

●益々登れば、益々奇。愈々進めば、愈々怪。啻に、

一歩一景のみにあらず。山巓に近くして、岫雲往來し、山容出沒す。景物、幽深を極め、猿鹿の外、一物を見ず。

●或はいふ、此の山、數千の猿あり。半月は、此の谷に棲み、半月は、阪手の觀音山に移る、其の往來の時、索々聲を發し、草木震動すと。若し、それ、嗷々として半夜に嘯哀する時、月も亦た愁ひて、峰に隱るべし。

●峰巒少しく缺くるところ、讃州の諸山、海を隔てゝ青し。下村港の人家、雲煙の間に、明滅たり。

●山氣溟濛。寒雨、森々として銀竹を投げ來る。柳北は、其の奇に耽り、笠を捨て、帨を頭に纒ひ、衆を扶けて山頂に至る。輿丁いふ、游人、皆、晴和の日をトす。未だ、風雨を冒して、此の險山に登るを見ずと。

●山頂より四望す。山岳海灣、千里一目。蒼海は杳渺として島嶼幾千あるを、知らず。讃の高松。備の岡山。播の赤穗、姬路、其の他の城壘數十、眼中に在り、眞に天下の壯觀。

●柳北等、山頂に坐し、風雨の中に、瓢酒を酌み、酔興爽快也。連峰忽ち雲湧き、須臾にして滿山溟濛。一陣、風來り、雲片四散して、山容明らかに、千里、眼に入る。

●樵路を尋ね、奇逕を貪りて下る。巨蛇棲老し、時ありて、出でて猿鹿を呑むと聞けば凄し。日漸く沒す。松杉生茂し、脚下、巖石。逕を辨ぜず。氣を勵まし、高く歌ひて行く。鹿、飛び出づること數々也。雨歇み、雲晴れ、十五夜の月色、林間を射る。

●山麓に下る。農家を叩きて、草鞋を買ひ、苦茶を啜る。主人、圓き餅と、作り立ての暖かき黑砂糖とを勸む。月を便りに、村路を辿る。丸き石橋を谷川にかけし所を過ぐ。海岸に出でゝ、舟に歸り、迭みに、奇游を語れば、三更の月影蓬窓に稜々たり。

其九

●吾輩、嘗て謂ふ「霜葉紅於二月花」の時、此の島の絶頂に立ちて、展望を縱まゝにせば、滿山の楓葉紅謊して火焔を吐き、計らず、身は、海上の一大活不動尊を現出する也。

●寒霞溪の絕勝たる所以は、其の紅葉にあらずして、寧ろ其の山勢の險奇を極むるに在り、展望の快濶なるに在り。之を寒霞溪といふは、名、美にして、神駈の舊名の事實を表現し得て遺憾無きに若かざるものあり。

●神駈の名、何んぞ崇厳なる。神駈の名を聞けば、溪山の懷深くして、怪奇に、幽奥に、神代的の背景を展開し、天上の諸神、下りて神駈るの神秘的光景を冥想せしむ。

●此の島に、田中河内介父子の墓ある事は、又以て、島人の記念に値せずんばあらず。聞く、父子、薩州に護送の舟中、斬殺され、別々に海波に投ぜられたるが、此の島の、同じ岸に漂ひ著きたりといふ。

●河内介は、勤王の烈士。而して、今上の御少時、初めて經書を進講す。彼は、討幕の首唱者、其の死の慘烈なる、實に餘哀あり。

●河内介、父子の忠魂、長へに、此の名島の精采となるならん。其の子、一代の美少年、其の遺屍、流血に塗みれて、凄婉、悲壯を極め。觀者をして、熊谷小次郎を追想せしめずんばあらざりしと聞く。

其十

●瀨戸内海の『島巡り』は、銷夏の清游ならずんばあらざるべし。海碧に、島美也。淡路島、小豆島より因島、能美島、江田島を經由して、嚴島に一夜を送り、大島郡にも杖を留め、干珠、滿珠を眺めつゝ、下關海峽に入る。

●瀨戸内海は、大なる公園也。遊覧の目標、到處に在り。然れども從來、未だ「島巡り」の遊覧船を艤せし者あるを聞かず。

●或は謂ふ、盛夏をトし、『海上講演會』を開き、好學の客を載せて、瀨戸内海の『島巡り』を爲さしめば、則ち、吾が學界、空前の清游たるを失はずと。

●若し、それ、「島巡り」を爲して、到處の島に上りて、適所の講演を爲すも亦た妙ならずとせんや。

●淡路島に、上世史。小豆島に、地理、風景論、因島に戰國、海賊、造船、江田島に「海上の日本」。而して宮島に、美術、大島郡に殖民等は好題目ならずとせず。

●瀬戸內海の「島巡り」には、尙ほ奇勝の探るべきもの少からず。金毘羅參りは其の副產物の大なるものなるべし。

●吾輩、嘗て、むかしの瀬戸內海航游を追想し、其の淸興の津々として、『詩の海』に滿つるを愛す。近くして、成島柳北が、備前航行中、一葉悠游して、時に漁舟に邂逅して鮮魚を買ひ、酒を暖め詩を論じ、或は章魚壺の趣味を說く如き、今日、文人、容易に、此の閑游を爲さず。

●嘗て、金毘羅道中膝栗毛を讀む。中に、參覲交替の諸大名の御座船に逢ふの記事あり。綺羅びやかに、幕打つて、「殿樣」の威儀、蒼波を壓し、船頭歌、長閑かに、軟風に送らる。蓋し、諸大名の瀬戸內海、航行は、活きて海上に浮び出でたる「錦繪」ならずんばあらず。

●吾輩、また、嘗て聞く。瀬戸內海、『風呂舟』あり。舟中に、風呂を沸かし、航過の船客を引きて浴を取らしむ。則ち『海上の風呂屋』なり。

●師宣が畫ける元祿の玉の湯と雖も、瀬戸海の「風呂舟」の興趣には及ばず。

●若し、海上、風呂舟を得て、淸和の日に、身を浴槽に横たへ、徐ろに煙草を吹きて、詩を思はゞ、紫煙、微かに、「詩の海」に、たなびきて、仙風、腋下に生ぜん。知らず三助は如何なる人ぞ。

●瀬戸內海の「島巡り」は、必ずしも、講演會の汽船を要せず。或は妻兒を載せ、或は親朋を伴ひ、一帆の大「ヨット」、輕く波上を駛るも、亦た頗る淸興也。

●「ヨット」の家族的閑游に適するは、恐らく、吾が瀬戸內海を以て、世界の理想鄕とせずんばあらず。

●此の如くにして、風呂舟に逢ふも亦た閑中の一忙事。漁舟に魚を買ひ、團欒の膳に上ぼす。或は、煙草を吹いて書を讀み、文を草し、或は、帆かげに、珈琲を啜りて、御伽噺を談笑す。

●「ヨット」島巡り、茶話、葉卷、鮮魚、團欒、健康は、瀬戸海上の理想美にして、また、吾輩閑游の理想たらずんばあらず。

●「ヨット」以て瀬戸海の島巡りに、閑游を樂しむは、

發展しつゝある「海の日本」の家庭美たらずんばあらず。富人、詩人は、續々、之を試みよ。

木曾義仲と巴御前

青柳有美

其一　木曾は天下の要害

中央線鐵道は、愈よ此の五月一日に其全通式を名古屋に擧ぐるまでに運んだが、中央線沿道の名所はと云へば、問はずと知れた木曾である。此の木曾をして此くまで其の名を高からしめたものはと云へば、是又問はずと知れた木曾の冠者義仲である。木曾は森林よりも義仲を以て其名普く知られて居る。伊勢は津で持ち津は伊勢で持ち尾張名古居屋は城で持つが、信州の山奥木曾は、檜よりも義仲を以て中央線汽車客の注意を喚起する。

國家の統一が完全に行はれず、群雄諸國に割據せる時代は素より言ふ迄も無く、德川氏封建の泰平時代に入りても、信州は天下の要害であッた。有名な尾張國小牧山は小さな山であるが、尾張平原の如き山岳の稀な地に於て、若し兩軍が干戈を交ふる段にでもなると、この小さな小牧山を取ると取らぬとが勝敗の分れ目になる。こんな例は日露戰爭に幾らもありて、兩軍が滿洲の一望千里の平野に、微々たる一小丘を爭ふて居る。畢竟するに、其一小丘が一會戰の勝敗に關するところ、頗る大なるものであるが爲めだ。昔の信州も恰度そのやうなもので、之を我が勢力圈内に入れると入れぬとて、天下に覇を稱する事が出來るか出來ぬかの分れ目になッたものである。況んや小牧山の如く小さなものに非るに於てをやだ。つまり、信州は八方に睨

みの利く土地て、若し東京よりするもの、此の信州を手中に收むれば、西近畿を陷るゝに易く、西よりするもの若し又此信州に據るを得ば、東關東平原を征服する事難からず、又若し信州に根據を構ふる者あれば、西に討つて出づるにも將た東に討つて出づるにも利便好都合この上無く、信州は實に東に關東平原西に近畿を控えた天下の要地てあッたのだ。是に於てか、今の商戰に於ても五月一日全通の中央線を利用し、東西の商人は互に此の信州を其の勢力圏内に收めやうと、鎬を削りて陣立おさ〳〵怠りが無い。天下の要地たる此の信州のうちても、木曾は又一段と難攻と不落の要害て、假令數萬騎を以てするも攻め落すに難く、一たび之に楯籠られると、昔ならば、馬も人も通ずべき道無く、弓矢も其功を奏せずして、敵は散々な目に惱まされることになる。

是に於てか、徳川氏の時代には、此の木曾に嚴重なる關所を設け、徳川御三家の筆頭たる尾州家をして之を監せしめたものてあるが、此の關所趾は、今も中央線木曾福島驛の所在地たる長野縣西筑摩郡福島町の町端に尙ほ存せられてある。此くして、木曾路福島の關所は、徳川氏の時代に於て、相州箱根の關所、遠州荒井の關所と共に、當時の三大關所の一に算へられたものだ。それも誠に其筈て、福島は實に海拔二千六百四十七尺、木曾路到るところ斷崖絕壁、山嶽崢嶸奇水ならざるは無しなんだから。

其二　虎を懸崖に放つ

久壽二年春二月、義仲の父帶刀先生義賢が、左馬頭義朝の嫡男惡源太義平に討たれた時には、義仲なほ僅に二歲、駒王丸と稱せられしものなるが、流石の惡源太も斯る乳呑兒を殺すに忍びざりしものと見え、これが保育方を畠山庄司重能に依囑に及んだ。ところが、重能は自ら之を保育して兎角後の禍の種を播くやうてはと心配したものか、更に又その保育を齋藤別當實盛に賴むと、實盛も自ら保育の勞に當らずに、木曾といふところは何んても山深いところて、狐か狸若し精々人間に近かいものがあるにしても猿くらゐに過ぎぬ

故、是處て育てさへすれば、假令長ずるに及んて亡き父の仇を報ぜんものと幾ら力んで見ても、山又山、水又水、棧道の險に遮ぎられ容易に此の山奥を出づること能はざるべく、同志を糾合して軍を起すにも、十人の手勢をさへ得るに困難すべしと見て取り、その頃、今の長野縣西筑摩郡新開村字上田に居を構へて居た中三權頭兼遠に二歳の駒王丸を養はしむることにしたのてある。この新開村は中央線木曾福島驛より、約一里半の地點にある。虎を野に放つのは素より危險てあるが、それにも增して更に危險なるは、八方睨みの利く天下の要害に虎を放つことてある。齋藤實盛が駒王丸を木曾の中三權頭兼遠に託したのは、虎を懸崖に據らしむることにしたのも同然だ。平將門は、比叡山に登りて、一たび王城を眼下に瞰んだのみて、謀反心がムラ／＼と胸中に萠したといふが、東西の勢力を坐して揺かし得る天下の要害に人と成りて見れば、長ずるに及んで義仲が天下を狙ふ大志を懷くに至つたのも誠に自然の勢てある。かく虎を八方に睨みの利く懸崖に據らしむるのは、思ふ存分上等の餌食のあるところを見定めて、精々食ひ荒らすが可からうと頼み入れるも同じことてある。義仲が兎に角あれ丈けの仕事の出來たのは、全く地の利を得て木曾に旗擧をするを得たからの事てある。齋藤別當實盛にして、若し眞に駒王丸を終生起つ能はざらしめんとする目的て、木曾の中三權頭兼遠に託したものとすれば、其地理に暗きも又甚しといふべしだ。そんな事なら、日本國の國はづれ蝦夷松前の端て無いまでも、せめては陸州の奧あたりに流したら可かッたのてある。義仲如何に豪邁の傑物ても、陸の奧に據りては、天下を覆すまでの大業を成し得んものでは無い。是に至ると、孤駒王丸を託せられた中原兼遠は、流石に居を木曾に構へし丈けに、能く其天下の要害たるを知り、駒王丸こそは八幡太郎源義家四代の嫡孫なれば、是非に之を北陸道の大將軍に護り立てんと日常訓練を怠らず、誠に驚くべき卓見を示したものといふべきてある。

然し、齋藤實盛は到底唯の鼠て無い。戰陣に臨んて

は白髮を黒々と染め立て、又芝居て見ると敵將の子を一本の腕（かひな）にすり替えて其の命を全ふせしむる仁慈の武士である。或は將來駒王丸をして源家の嫡流を起さしめんとする心より、特に天下の要害木曾を選んて、中三權頭兼遠に帶刀先生義賢の孤を養はしめたものかも知れぬ。すると、實盛は愈よ以て唯の鼠では無いのだが、要するに、義仲の木曾に現れたのは、全く地理の影響てある。

其三　僧侶の謀反心

最近に於ける無政府黨の一味徒黨に加擔して、死罪の刑に處せられた者のうちにも、僧侶があるやうだが、兎角、世に志を得ざる人物は、その時代の社會傾向に反動して、折もあらばその時代を攪亂し、その社會を顚覆しやうといふ氣になる。これが即ち謀反心と名けられる。苟くも二本差したる北面の武士が、顱（あたま）を圓くして僧形にならうといふのは、誠に以てよく／＼の事て、志を其當世に展る能はざるの致すところだ。つまり、社會の繼子（スポイルド・チャイルド）である。是に是てか、我が往古時代の趨勢を見ること恰も蛇蝎の如く、我が籍を置く社會に對するや殆んど不倶戴天の敵に於けるが如きものが往々にして僧侶のうちにある。又、正面から政治舞臺に乘り出して、天下の權を掌のうちに總攬しやうとしても、手も足も出（で）ぬ時代だと見て取るや、身を緇衣に包んで名を勤行に假り、以て時の大權に近づき、天下を左右する機會を得んものと所存の臍を固めた英傑も、昔は隨分出（で）て來（き）たもので、人も知る英王チャールス第八世の宰相たりし大僧正ウルゼー、乃至は佛王ルイ第十三世の宰相たりし大僧正リシエリウなど即ち其例であるが、僧侶の進言献策のうちには、神佛の加護を說き信念と併せ吹き込むもの故、俗人たる軍師參謀の進言献策よりも、人を動かす力の强いものである。德川家康は、あれほど聰明叡智の人物ではあったが、天海上人に歸依する事篤く、進んで其言を聽いたものである。かの關ヶ原天下分け目の決戰に、敵の機先を制し得たのは、一夕天海上人が、軍は拙速を貴ぶとの言を聽き、晝夜兼行で軍を進めたのに基する。

頼朝をして平家内閣顚覆の志を固ふせしめたものは、文覺上人である。文覺上人の前身は、是も能く人の知る如く、遠藤の武者所盛遠であるが、一たび失戀の過ちに袈裟御前を刃にかけてより、十八歳にして髮を削り、高雄山に入りて神護寺修補造營の心願を發念し、十方上下の勸進に廻れる折柄、院の御所法住寺殿に罷り出でたる際、これはとばかりの無體なる侮辱を受け、あまつさへ遂に伊豆に流罪の身となッたので、當時の政府を恨み其權政に憤ること甚しく、慷慨の執念骨髓に徹し、玆に謀反心が萌したものである。折しも、伊豆に於て流罪の身なる頼朝に近づくや、時こそ來れと此の頼朝に平家内閣顚覆の信念を吹き込み、自らは其軍師參謀を以て任ずるに至つた。朝頼は素より文覺を利用したらうが、文覺は確に朝頼を利用したので、或る意味より云へば、頼朝は文覺の一傀儡たるに過ぎぬのだ。木曾義仲を操りて、あれほどまでの芝居をさした傀儡師に、又太夫坊覺明なる僧侶のある事は、決して忘るべきでは無い。

其四　太夫坊覺明

中央線木曾福島驛を去ること約二里半の今の長野縣西筑摩郡日義村德音寺の開祖太夫坊覺明は、素と勸學院の文章博士で、其名を進士藏人通廣と稱したものであるが、平家内閣の横暴を憤慨して出家し、南都に入りて西乘坊信救と名乘り、不平の鬱勃たる高倉宮を助け奉りて平家に反かしめ、それやこれやで清盛の逆鱗に觸るゝこと甚しく、爲に益々その怒を買ひ、刺客を向けらるゝことも度々になッたので、都に近い南都に居るのは頗る危險なりと見て取り、窃に逃れて三河國に下り行家に據ッたが、行家は義仲と其頃既に交通をして居た縁故から、更に行家と共に木曾に入り、文章のことから義仲に知らるゝに至ッたものである。木曾の冠者義仲が、平家内閣を顚覆して、辱められたる亡父の名を揚げやうとしたのは、中三權頭兼遠の教育よりも、太夫坊覺明が平家を恨む憤慨心と倶に天を戴かずとせる平家に對する敵愾心とに燃やされて吹き込んだ宗教加味の信念に基するところが寧ろ多いのであ

る。覺明が如何ばかり強く平家內閣の暴政を憤慨して居たかは、その義仲に代りて書いた諜狀や願書などの上に明々白々と現れて居る。中原兼遠は、素より義仲を護りたてゝ、之を天下の大立て物にしやうといふ氣はあッたらう。然し兼遠の考は稍々地方的のもので、平家內閣を顚覆し、義仲をして之に代らしめ天下の大將軍たらしめんとするまでの大希望無く、精々のところで北陸道の將軍たらしめやうと念じた位が關の山である。然るに、太夫坊覺明は義仲の大器たるところを見込んで、之に天下の大將軍たるべきを勸め、義仲によりて平家內閣に對する欝憤を晴らさうとし、頗る力めたので、木曾の冠者義仲も、遂に又その氣になり、平家を征伐して其內閣を顚覆するのは、是れ王法佛法を擁護する所以なりと信ずるに至ッたものらしい。この點に至ると、義仲は流石に木曾育ちの初心なものでその昔文章博士にして今は佛法の弘法師たる覺明の言がひどく胸にこたへたに相違無い。

此くの如くにして、義仲は恰も彼の賴朝が文覺の傀儡たる如くに太夫坊覺明の爲に平家內閣顚覆の道具に使はれたものである。木曾義仲は極言すれば覺明の傀儡なのだ。長野縣西筑摩郡福嶋町の興禪寺には、この覺明自筆の軍中書簡が今に保存せられてある。

其五　木曾駒の朝日將軍

尾濃三の平野に於て使用せられる駄馬や耕馬には二種類ある。一は三河馬で他は木曾駒である。三河馬は一見したところ、體が大きく如何にも立派さうだが、至つて輓力駄力に乏しく、耐久力に乏しい、隨て今のところ一頭三四十圓の價格を維持し得るに過ぎぬ。然し、木曾駒は見たところこそ餘り引立ちはせざれ、輓力駄力に富み、その蹄の力の強いことは、實に驚くべきものだ。木曾駒の蹄は恰も蹄鐵の如くに堅く、荷車を輓かしても駄馬としても、將又、農耕用馬としても、其の粗食にして能く過度の力役に堪ふる點に於ては、全國の馬が兎ても及ぶものでは無い。これは恰も木曾義仲が、黑飯に無鹽の平茸を添えて食ひながら天下無上の珍味と心得、能く戰ふたのと同じである。此く木

曾馬の强いのは、山岳崎嶇羊腸の間に育つからて、義仲の豪毅の質を得たのと、事情を一にするものてある。木曾駒は、三河馬の一頭僅に三四拾圓なるに比すれば頗る高價て、漸く四尺四寸内外のものでも、少しく良馬の部になると一頭七拾圓には昨今賣買せられる。苟も木曾駒と名のつくものなれば、幾ら下の部に屬するものても、四十圓を下るやうなことは無い。中央線木曾福島驛を中心とせる周圍四五里の界限は、この木曾駒の產地てある。

木曾の冠者義仲が、亡父帶刀先生義賢の恥辱を雪ぎ、大に父祖の名を揚げんとして、平家內閣顚覆の志を決し、京師に攻め入らんとするや、先づ信濃國を馳け從へて一千餘騎を得たのてあるが、それより北陸道を征して都に討つて入らんとし、小島太郎、樋口次郎、今井四郎、根井小彌太など四天王の面々を引き具し、加賀越中の國境なる礪並山の合戰に、平家の大軍を俱理伽羅谷に攻め落した時に、此の礪並山の險に據りて、義仲が平家の御大將越前三位通盛三河守知度を惱し得たのは、かねて木曾山中に於て山嶽重疊起伏段々の間を驅け廻すに慣れ切ッて居る馬術の神を盡くして、義仲主從が蹄の力の强いことゝ、又山地を跋渉して毫も疲勞の色を顯はさゞることゝに於て天下無比の稱ある木曾駒に跨りて、縱橫無盡に乘り廻せたためてある。一たび礪並山の戰に勝つや、木曾の軍勢は恰も大河の堤を決する如く、忽ち四萬餘騎の大軍となりて江州勢多より京に入り、壽永二年秋八月、木曾冠者義仲は遂に征夷大將軍の宣旨を拜し、朝日將軍と稱せらるゝに至つたのてあるが、義仲の木曾勢が斯く到る處を風靡するを得たのは、全く其跨れるところの木曾駒の蹄の力に依るもので、義仲は木曾駒に助けられ、征夷大將軍の月桂冠を贏ち得たものといふべきてある。是に於てか、馬を鹿などと馬鹿にすることは出來ぬものだ。

其六　陣頭の女將軍

裟羅雙樹の花の色は、盛者必衰の理を顯し、木曾の森林も御一新後の濫伐て民有林は皆な禿山となり、義

仲手植の時雨櫻も、今は僅に燒木となりて長野縣西筑摩郡福嶋町興禪寺境内に憐な姿をとゞめて居るに過ぎぬ。流石日の出の朝日將軍義仲も餘りに非道が募りて、松殿となん申し侍る美女の傍にへバりついてばかり居るやうになれば、奢れる者は久しからず、元暦元年春正月源頼朝後鳥羽天皇より木曾追討の勅命を蒙り、玆に將軍義仲は九郎冠者義經の爲に攻め立てられることゝなり、武藏國の住人秩父の庄司畠山重忠に追はれ、僅に十二三騎ばかりを具するのみて、三條白河を東へ向けて都を退き、栗津ヶ原に一ト合戰と四天王の随一今井四郎兼平をして五百騎ばかりを率ゐ勢多の橋を引いて戰はしめて見たが、敗軍再び利あらず、脆くも蒲冠者範頼に破られ、主從僅に五騎、栗津ヶ原より又も打出濱まで引き退き、遂に義仲は正月二十日相模の國の住人石田小太郎爲久の放てる矢に馬を射られて意氣地なくも首を上げらるゝに至ッたのである。此の木曾殿の最後の一戰に、額には天冠を戴き、紫隔子の織付ある直垂に萌黄縅の腹卷を一卷なし、眞羽の矢の射殘したるを負ひ、重籐の弓にせき弦かけ、連錢葦毛の駒に金覆輪の鞍を置き、綠したゝる黒髪を後へさッと振り流し、薙刀勇ましく打ち取りて甲斐々々しく陣頭に立ち、敵を苦むること一方ならざりし女將軍がある。これこそは、朝日將軍義仲の愛妾巴御前であッたのだが、巴は荒馬乘に妙を得たる大力無雙の女武者、その乘ッたる連錢葦毛は、洋馬の勢力が盛な今日でも一頭七十圓には賣れる木曾名産の木曾駒である。如何に勇者の譽高き遠江の國の住人内田三郎家吉が、名馬沛艾に跨り三十五騎を引き具して、巴御前一騎に攻め向ふても、到底勝てやう筈は無いのだ。内田三郎は遠江の國の住人故、音に聞えた名馬の沛艾といふのも御多分に漏れず、隣國三河の國に産した蹄の力の至ッて弱く耐久力の至極乏しい昨今ならば上等でも一頭三四十圓にしか賣れぬ三河馬だッたに相違無い。これて、蹄の力の強い木曾駒を巧に乘り廻す巴御前と戰ッたのだから、勝目になることの出來なかッたのは、寧ろ當然である。

其七　中原兼遠の女か

木曾の女は、今日に於ても馬を操縦する事にかけては、實に非凡の技倆がある。殊に、中原兼遠の館があッたと傳へらるゝ今の長野縣西筑摩郡新開村邊の女に於て然るものがある。全く木曾女は如何なる荒馬でも巧に乘り廻すことの出來る荒馬乘で、而も膂力までが、他地方の女に比べると二倍はあらうといふ女强力ばかりだ。

巴御前は、一般に義仲の養親たる中三權頭兼遠の女とせられてあるが、一説には又、義仲と旗を擧ぐるに先ち、私に京師附近の地理を探らんとして江州に入れる時、一日義仲の馬が荒れて駈け出したところに、道に一人の女あり其手綱を握りとめて、駈けるを制せしより、其儘其女を召し具して木曾に伴れ歸り、容れて妾としたものが、これ即ち巴御前だとも傳へらるゝ。然し、荒馬乘の名人で膂力の驚くべきものがあッたといふ點から押して考へて見ると、巴御前は何うしても江州女では無く木曾女であッたに相違無からうが、中三權頭兼遠の女ではあるまい。若しも巴が兼遠の女ならば、山吹御前といふ堂々たる正妻を迎へて置いて、更に巴を妾とする筈が無いのだ。それでは、養親たる恩義のある兼遠を著しく侮辱することになる。依りて思ふに、巴御前は木曾女たるには違ひが無いが、兼遠の女には非ずして、義仲が其馬術の巧みなのと膂力の尋常以上なところに惚れ込んで、特に容れて妾とした今は名も知れぬ人の女であッたらう。山吹御前こそ却て中原兼遠の女で、義仲が之を迎へて正妻にしたものかも知れぬ。現に今日でも、中央線木曾福嶋驛を去る約二里半の長野縣西筑摩郡日義村には、山吹城趾と稱せられて、兼遠が一たび城を築いた地點だと傳へらるゝ處がある。若し果して之が事實なりとしたら、兼遠が居城の名を取りて之を我が女の名としたものと考へるを得て、山吹御前は愈々兼遠の女で、義仲の正妻だッたといふ事が確になる。果して實か將た後世の造り物かは知らぬが、この日義村の德音寺境内には、山吹御前及び巴御前の墓と傳へらるゝものが今でもあり、

又この德音寺には、義仲と太夫坊覺明の像が藏せられてある。

新綠の富士の裾野

（丁）

小島烏水

一

書名は忘れたが、いつか或歌の古本を讀んだとき、地名の註釋に、風景のいゝ、名高いところではあるが、名所では無いといふ斷り書きがしてあつたので、一寸妙に感じた。今日で「名所」といふ語は、有名な場所即ち名所と、解釋して、大概差支ないのであるが、格式來歷をやかましく言ふ、往時の古典的批評眼に依ると、古歌に詠まれたところが、名所になるので、その對象の自然よりも、自然から副産した古歌の方に、重きを置かれてゐる、昔の人ほど、この尙古癖があるやうで、あまり囚はれ過ぎてゐると思はれるが、よく考へて見るとこれは頗る面白いことであると思ふ。

詩人の神經や、情緒は、燃燒的作用を起し易いものであるから、常人の平氣に看過するところを、鋭敏に感得して、之を詞藻の斑紋に織り成す、全人類は、その中から選ばれたる少數の詩人に依つて、織り成される斑紋を、鑑賞して、所謂內部生命を豐富にすることが出來るので、詩人の感傷が緣つて起れるところの自然を（自然そのものに權威があるかのやうに）名所と稱して、他餘のそれから、別扱ひにして、驚嘆、愛慕、憧憬の情を献げるのは、如何にも面白い。

今自然に對する人間の觀察が、細微に入らない前には、土地の衣裳ともいふべき植物に就いても、古代日本のクラシックな詩人の述作で見ても解る通り、大づ

かみながらも、花には限がついてゐるが、その他の細微な部分には、潜つて來て居ない、それが比較的近代の詩形の俳句となると、さすがに個々の花の姿態や、特質などに、隨分微細な觀察がしてあつて、詩人のデリケートな神經に、感心せられるのであるが、葉の方になると、例へば葉鷄頭とか、縞芒とかいふやうな、色彩の刺戟的でなければ、姿態の奇異なるものは、取り立てゝ言はれてゐるが、その他は、所謂萬綠叢中に、一括せられて、大ザッ端に扱はれてゐる。

只だ所謂萬綠が芽組んで、間もなくその色を新鮮に改める季節、即ち本州では五六月にもなると、青葉若葉なる名詞の下に、一團の嵩（マッス）として、それから生ずる氣分なり、情調なり、又配合の美くしさなどが、謠はれてゐる、これは殊に俳人に感謝すべき理由がある、併しながら視神經の一層鋭敏な近代の人に依つて、新たに味はれるのは、必ずしも色彩や、芳香の、特殊に刺戟的なる花に止まらず、新綠に及んで、青葉といふ中にも、若葉といふ中にも、白味や黄味の勝つてゐるのもあるし、素と々々葉の細胞内の綠色素には、濃淡深淺の程度を異にしてゐるものであるし、天空や四圍の自然狀態からも、支配を受けてゐるのであるから、何ぼ綠が葉の基本色であるからと言つて、時々刻々そこに明暗の調子があり、透明や半透明の氣分が起つて來るのに隨つて、新綠の新が幾樣にも變化し、新綠の綠が幾回にも推移されるのであるから、そこに新らしい新綠美の感覺が、醸されねばならない。

私は一體花だらけの春よりも、暮春から初夏にかけた、新綠の候が好きで、この頃になると、いつもボーッとして、醉はされるやうな氣になる、たゞし醉つてしまふから、却つて新綠に對する冷靜の觀察をしたことは無いのであるが、それでも自分の今まで觀たうちの、富士裾野の新綠に就いて、書いて見たいと思ふ。

二

多くの意味から言つて、日本の都會は田舍である、只だ田舍と言つて惡るければ、幾分か裝飾された田舍である、即ち自然から殊に仕切られたり、又自然から

離隔されて、一廓に別居されたやうなところが無くて、自然の群落と、人間の部落と、連鎖狀態の生活をしてゐる、別な言語で言へば、都會と田舍の間に引くべき白なる境界線を持つてゐない。地坪が高價の何のと言つても、家々に大概庭があり、庭には樹木がある、此頃になると煙のやうな青葉若葉の上に、鯉の吹き流しが、風を孕んで泳いでゐる、故に新綠を見るに格好なる土地と言へば、遠くの山中へ入らずとも、却つて都會附近に多い、例へば東京の周圍には、雜木林の多い武藏野がある、今日では草の武藏野とは言はれなくなつたが、杜の武藏野とだけは未だ言へる。

杜の武藏野は、やはり青葉若葉の美くしい武藏野であるが、私は富士裾野の新綠を話すに就いて、こゝに裾野の原野と、ツルゲネーフの「獵夫日記」の中にある原野と、武藏野のそれとに就いて、一寸比較をして言つて見たいことがある――暫らく話が青葉若葉を外れるが。

ツルゲネーフの獵夫日記は、曠茫たる中央露西亞の大平原で、故國木田獨步氏がその中の一章「あひゞき」(二葉亭氏譯)の樺林と、武藏野の楢林とを比較した文章は、今は誰も知らぬものは無いが、ツルゲーネフのは、武藏野のやうに火山灰などを含んで居ないし、廣さもあんな狹いものとは比較にならぬのは勿論であるが、波のやうに蜿ねつた阜のあること、乾ッ風が吹いて、動ともすれば塵埃が起ること、原の間にところどころに淋びしい宿驛の立つてゐること、森林が多くて、その寂びしい自然から、土人に迷信や恐怖の多いことは、ツルゲーネフでは「ビエジンの草野(プレイリー)」にシンミリと描かれてゐるが、武藏野でも昔の森林の名殘であるかと思はれる化銀杏の、何のといふ古木が、そこに妖怪譚を伴つて、今も多少の恐怖を以て、崇拜せられてゐるのを、似てゐるやうに思はれる。

併し山岳の無い露西亞では、空氣が柔かで、物が凡べて溫味(テンメアチス)であるらしい、恰度ツルゲーネフの文章が、あの原と森の感化を受けてゐるのではあるまいかと思はれる、それに反して武藏野では、富士、秩父、筑波

に加ふるに太平洋が控へてゐるので、小さいながらも空氣が荒くれて、尖つてゐる、國木田獨歩氏の、せゝこましく尖つた、鋭利の文章は、武藏野には何處か調和したものであつた。

富士裾野となると、その相違は武藏野とツルゲーネフの自然の、間隔どころでは無い、大なる山岳を中心にして、地盤がズリ下りに低下して行く、二十度から十、九、八度、果ては五六度の緩やかな傾斜になつてゐる、東北西の三方を、箱根火山彙、御阪山脈、天守山脈に截ち切られて、南は海だ、中央露西亞の廣大なる平原に比べると、大海と湖水ほどの違ひがある、それに火山灰や砂礫が多いので、重いから塵埃は、あのやうに舞はない。

それでゐて、武藏野よりも、より多くツルゲーネフの獵夫日記を憶ひ起させるのは、何故であるかと言ふと、原始的の草原(プレイリイ)といふところが似てゐる、尤も露西亞のは沼澤的濕地の多い濕原(ステップス)で、富士裾野はじめ日本の火山麓とは、似ても似つかないのであるが、人慣(な)ッこくないといふ氣分が、第一に人間が襲ふのが似てゐる、ツルゲーネフにあるやうな、月光澄明、星光冷徹は、富士裾野高原の森林から見たときに起る感じである。「壁のやうに厚い森」が、裾野以外に、今の武藏野の何處にあらう、鳥獸の多いこと、それ等に備へる山番の居ること、鶉を捉つたりすること、武藏野のやうに耕作(カルチヴエート)されなくて、荒寥(デザアテツド)なるところ、いづれか「獵夫日記」を憶はせぬことは無い、只だ如何にも土地が狹くて、鼻が支へるやうで「遠くの方で、小さい樺林の丸い扇形をした梢の頭が、殆んど水平の直線を折る、唯一の目標である」(獵夫日記第九章)といつたやうな、だゞッ濶いところが無い。

ツルゲーネフの「獵夫日記」に若葉の描寫が少ないのは、向ふの獵期が夏であるからだ、日本のそれは、秋から冬にかゝつてゐる、孰れも若葉には緣が無い方だが、併し獵などはどうでも構はぬ、猶ほ異同の點を擧げると、いくらもあるが、目的がそこに無いから、話を前に引き戻す。

三

富士山といへば、夏のものでなければ、冬のものにされてゐる、富士裾野といへば、秋のものにされてゐる、實際裾野にある目ぼしい草は、俳諧季寄せなどを見るまでもなく、最も秋の部に編入される草花の多いのは、事實である。芒、桔梗、刈萱、女郎花、男女郎花、薊などが、一杯に咲くからである、一體野原の小草のやうに、形體の大きくないものは、花でも咲かなければ、特別に人の注意を要求する事が、出來ないのだから仕方がない。

併し富士裾野の愛すべきは、富士山といふ白壁を背景に裾野といふ敷石を前景にして、その間に森林を控えてゐるからで、この森林の美くしいのは、他の季よりも、若葉の時節である。

私が特に若葉を觀る場所として、原野を選んだのは、日本の原野には、大概森林があつて、その森林は、高山のものと違つて、落葉濶葉樹が多いからである、秋の紅葉にせよ、初夏の新綠にせよ、一年で更新するから、葉の美くしいのは、落葉濶葉樹である、森林にはそれが一團一簇になつて、密集してゐるから、展覽に便利である。

併し富士の裾野は、山と野の兩相を具備した高原で、その森林には、山の一部分を取り込んで、常綠針葉樹と、落葉濶葉樹とが、三蓋笠のやうに重疊してゐる、具體的に言へば、富士は大宮方面になると、熱帶的植物の棕櫚だの、芭蕉だのゝ、淡々しい綠が見られる、それから槇、椢、辛夷、朴の木、樟、樫、石楠のやうな濶葉樹から、樅、タケモミ、シラビソ、檜、栂、落葉松、栂などの針葉樹となつて、それが一千米突から二千米突(一合目以下)近くまで茂つてゐることは、四方の山麓山腹ともに、甚だしい相違は無いので、樹の種類は、可なりに多いのである。

こゝでは空氣は霞んで、濃まやかな酒のやうで、どことなく柔かである、どうかすると、高原の特性を示して、初夏でも、朝のうちは、冴えて色の濃いブルシアンブルーを呈することもある、さういふ日は、大概

午後から强い風が吹き初める、さうして圓錐形の山を一周して、腹の央ごろから下は、常綠針葉樹が、葉綠素を黑いほどに、十分に青くさせて、その組織も固く、霜雪を持ち堪たへた力が、節々に充溢してゐる、流石にその一本々々の梢の尖頭には、今年生れた、黃味の勝つた、透明な若綠の葉が、劃然と古い葉とは時代の別をつけて、拔け出して、一寸二寸と伸さばつて、新らしい空氣に觸れやうとしてゐる。

この針葉樹の間に挾まつて、或はそれよりも一段と低くなつたところに、落葉濶葉樹は、光澤の强い若芽を吹いて、光線の具合で、それが嫩らかな光輝體のやうにも見える、或る幹は白く輝やき、或苔はその梢の下で、針のやうに蒼くなつてゐる、裾野の大原には、ところ〳〵村落があり、街道がある、コバルトの濃い杉並木の間から、壁畵の樣な富士山が見える「富士一つ埋め殘して若葉かな」といふ句を適切に感ずるのは、午後六時頃、夕照が山のうしろに傾いて、山は紫に雪は桃色に染められるとき、裙野の若葉の方々には、明暗の塊まりが出來て、薄い光澤のある、透明した黃の克つた、又は白く光る葉や、又は表が綠で裏の白いのが、表裏相映じて藍色に烟るやうになつて、茫々と波のやうに寄せて來るときは、悠久にして嚴肅な感じがする。

汽車で通行すると、函根の火山の北、即ち酒匂川流域の山北、小山から、裾野に入つて、御殿場、佐野、三島、沼津となるまで、鐵道線路は、地理學語の所謂「裾合谷」を偏よつて通過するので、富士裾野の森林からは少し遠ざかるから、さういふ委曲（ディテイル）は解らぬ憾みはあるが、それでもパノラマ風に、この新綠の大原野を、綜覽される便はあるから、新綠の美くしさにも、注を拂つてもらひたく思ふ。

新「ラケット」の人

黑頭巾

其一

●今、紫藤、花盛り也。緑りの若葉、曄々として朝日に輝く。此の美しき朝に、春の夢を辿る。

●紫藤花の蕾、未だ綻びず、白藤花の開きて、未だ三四分なりし帝都の花の頃、神商の主將、畑、岡。早、慶、商に轉戰して、其の鮮やかなる「ラケット振り」、到る處、花彩を添へし事を憶ふ。

●赤門の、櫻花に包まれたるコートに、兩京大學のマッチ、ありしも、今年は櫻花の開くこと餘りに早かりしにや、春風未だ都人を騒がすに至らず。

●早、慶の野球選手相次いで渡米し、野球の春は寂寞たり。一高對三高のマッチあり、一時、人目を集めしも、向陵の花少くして、帝都の春光を占領するに足らず。

●此の春は、テニスの春なりき。畑、岡は、敗れたりと雖も、此の春の花たるを失はず。

●彼等の東上する、多大の希望を以て、東西に送迎せらる。其の都下に轉戰するや、百花駘蕩、其の爽やかなる武姿に、春光滿つ。

●畑、岡の精棘なる妙技、帝都のコートを席捲するの慨無くんばあらず。憐む可し、武運宿らず。東風無賴、花を吹き散ず。

其二

●斯界に於ける東西對立は事實也。東都覇者の夢は既に醒めぬ。

●氏家、三神等が、大阪中ノ島に模範戰を見せたるは關東の全盛の榮華なりき。畑、岡の早、慶、商を震撼せしめたるは、關西興隆の新光采ならずんばあらず。

●早、慶の相次いで、關西に敗衄してより、大阪倶樂部の神田、堤。神商の玉垣、岡及び三高の福井、柳田の名、頓に東西に著聞す。

●關東人は、關西覇者の名を聞いて、未だ其の技を見ず。憧がれたる渴望は、喝采を以て、畑、岡を迎へた

るなり。

●三高の福井、ひとり山中の虎の如く、耽々として京都に據り、未だ關東の野に出て來らず。

●福井と岡とは、つねに、關西に覇を爭ひつゝあり。今、其の一覇者、既に東都に敗る。福井たる者、秋月の圓かなる頃、關東に向つて、復讐戰を試みずんばあらざるべし。

●東西對抗戰の、此の如くにして連續すると共に、新選手次第に輩出して、爭覇の野、光華爛漫たるを見るあらん。

●東西對抗戰は、兩京大學に始まる。京大は七戰七敗して、而して、未だ一大才の東都を驚かす者出るを聞かず。鴨涯の春色、京大の覇氣を銷沈せしむるや、奈何。

其三

●渾然として、老熟の境に在るは早大の伊藤、岩村也。此組は、斯界の「敎士」として、成る可く長く、早大の精華たらん事を望む。

●伊藤は、飯河、氏家兩雄の全盛時より、早く既に盛名あり。同時の舊選手、隱退し盡くせる今日、尙ほ大將旗を擁して、陣頭に立つ。斯界唯一の老將也。岩村は、彼の弟子の列に在るべし。岩村の技、今、其の全盛時に在り、花ならば滿開なるべし。

●若し打方、戰法等、テニスの技術のみを以て論ずれば、現代、伊藤の右に出づる者あるべしとも思はれず。唯だ老熟者は、生氣を缺く。伊藤が、往々にして敗るゝは、勝氣の失せたるに在り。

●伊藤は技に餘ありて、力と氣とに缺く。今の彼は、張出し横綱たらずんばあらず。

●等しく張出横綱といふとも、氏家、關澤は常陸山たるを失はざりき。伊藤は、恐らくは梅ケ谷ならん。彼は必ずしも强からず、上手也。上手といへば、彼は無類の上手也。

●全軍崩潰の後を受けて、孤軍奮鬪、以て回瀾の痛快事を演出せんことは、伊藤に期待し易からず。彼は「撫て斬」の猛者には非ざる也。

●飯河、氏家の如く、福井、岡の如く、大刀を眞向に

振りかざして敵軍を突破する底の壯觀は、伊藤のテニスには見られず。彼は、屢、『油の乘つたる勇士』に中てらる。去年來、田代に、鳥山に熊谷に、玉垣に、福井に、畑に、到處、新進の猛者に惱まさる。

●彼の特色は、輕妙にして細心なるに在り。其の調子に乘つて善戰するときは、飛鳥の如くに、馳驅し、攻守ともに水も漏さゞるの慨あり、天來の妙技、觀者をして恍惚たらしむ。敗ると雖も、櫻花の散るが如く、光彩絢爛たり。

●慶の和田、早の伊藤は、斯界に於ける最近の二元老也。和田は、無類の名人にして、また無類の弱者を以て知らる。然れども其の勇退前は、妙技を發揮して甚だ振ふ。

●伊藤のコートに立つも、前程甚だ遠きに非ざるべし。吾輩は、彼が心機一轉、勇猛心を發揮して、其の勇退前を飾り、大なる彗星の如くに、長く光芒を引きて天の一方に去らんことを望まずんばあらざる也。

●岩村の「ラケツト振り」は極めて美し。スタイルとモーシヨンの美しき事、人をしてアゼンスの勇士を聯想せしむ。殊に、其のスマツシングの華やかなるに至つては、日本にテニスありて以來、此の如く理想的に美なる者を見ざるべし。

●油に乘つたる岩村のスマツシングの美なるは、下界の花に比すべきものあらず。彼は、高山植物の美花也。恰も戶隱シヨーマの巨葩の純白花が、天風にゆらぎて其の麗彩を地上に送るものならずんばあらず。

其四

●京大の神田は、三高以來、京都の元勳たり。今にして勇退するは尙早かるべし。京大の副將高木、健鬪の氣慨、神田の後繼者たるを得ん。

●今の京大の大將大瀧は、癖多き球を打つて軍容甚だ揚らず。氣は强くして球は弱し。路傍の木槿花にも似たり。前衛川村は、當年、東北に殊勳を建つ。沈著にして確質なれども、餘りに地味にして引立たず。藥大にして小さき花也。

●京師の大出は、猶ほ當年の怪腕を揮ふ。或はいふ、彼

の前に前衛無し。蓋し、紳士のテニスとしては、恐らくは、彼は現代の第一流たらん。老蔓草の花彩、衰へざるもの乎。

●巍然として、京都に聳ゆるの慨ある者は、三高の福井也。彼は、優美なる京の花にはあらず。彼は、廣庭に、ひとり春光を占斷する、亭々たる大木の木蓮花也。

●福井の前衛梶原は、屡、引立役を以て目せらる。聞く、近時、彼の實力漸く進む。憐む可し、後衛に氣兼ねするが爲に、實戰に臆するを免かれず。

●或は謂ふ、彼は、挿花の根締ならずんばあらず。彼は、花彩を添へずと雖も、冥々の中、自から功あり。之無くんば、福井の花、活くべき理無き也。

●總じて、京都の前衛は、太だ振はず。此の春の兩大學マッチに、一宮僅に働きしとはいへ、其の技は、未だ多く言ふ可きもの無く、頭腦の明晰なる、能く一杯の活動を敢てせしのみ。清香に依つて愛せらるゝ丁子花ともいふ可きか。

其五

●濟々たる多士は、今の慶大と東商となるべし。商の土井、稻毛、明石、柏尾は、皆、錚々たる後衛、實力も、また互に伯仲の間に在り。慶には野村、熊谷、小山、國松、ともに優勢なる戰隊たるを失はず。彼此、衆芳を鬪はすの觀無くんばあらず。

●柏尾は、能く打つて能くネバリ、戰法に變化あり、將來、東商の花たらん。明石は脆きことあれども强し。稻毛は、怪腕を弄す。癖多きテニスなれば、當ることあり、當らざることある。神商の岡には苦手(にがて)なるべし。稻毛の前衛淸水は、無比の熱心家、輓近の發達驚くべきものありと聞く。此の春に、未だ振はざるは如何。

●土井は、場馴れして、流石に大將の貫目あり。其の體勢の堅實なるは、見るからに快感を與ふ。彼は、强球を練磨して、近ごろネバルことを自得し來る。殿軍として危氣少なし。彼の前衛須藤は、瀟洒たり。木の下に咲き出でし水仙花なるべし。

●土井は、其の光彩を以てすれば、椿の花たらん。彼が、神商に脆かりしは、其の餘りに岡を避けたるに因

らずんばあらず。岡に向つては須らく得意の强球を打つて突貫すべし。避ければ避くるほど、岡は長駈し來るべき也。

其六

◉慶の大將野村は、新進の鋭氣當る可らず。彼が、攻勢の陣法を執るや、敵を打ちて、打ち捲くるの勢を現はす。梅花の霜雪を侵して開くが如く、鐵幹崢嶸たり。櫻花の伊藤と對壘して、帝都の第一流たるを失はず。

◉彼の前衛羽鳥は、未だ此の大軍の主將たるの貫目無しと雖も、短小精悍。其の腰を屈して、敵球を狙ふは隼が、花林の小鳥を覘ふの姿勢あり。

◉熊谷は左手の强球。去年、稲門軍を薙ぎ倒して勇名を博す。小山、小久保、國松と共に、一齊に三田の野に咲く。他日、何人か、群芳の王たる者ぞ。

◉小山の前衛和田は、前代和田の襲名者たるべき見込あり。若けれども技能、鍛錬兼ね至る。機轉あり、沈著あり。其のモーションは水際立ちて鮮やか也。香色雙美の薔薇花にも擬す可き乎。

◉三田のテニスは、つねに研究的態度を發揮す。然れども、其の實戰に於ける長短處も亦た此に存せずんばあらず。

◉近ごろ、三田の前衛が、時に、兩手を張り、飛上りて、敵の後衛を威嚇する如きは、目立ちて見ゆ。其の姿態の殊に奇異なるものに至つては、東商とのマッチに飛魚の形容辭を贏ち得しものあり。

其七

◉東大のチームほど素人臭きはあらず。宛然、拔群の宮角力の寄合ひたるが如く、回向院の立者ともなるべき素質を有する者あらんも、其の軍容は、案外に振はず。

◉一高の關澤、二高の横田地。學習院の木場、五高の武富、六高の瀧澤、而して三高の勝田、柳田、皆既に斯界に知らる。東大、勇者無しとす可らず。此の多士ありて振はざるは如何。

◉蓋し東大のチームは、自儘勝手に咲き出でたる野の花の如く、未だ植木屋の加工を經來らず。遠望すれば

其の全景は光彩絢爛たり。近づいて見れば、取つて盆栽となして、以て應接室に飾るべきもの多からず。

●木場、勝田の如く、嘗て、園中の美花と謳はれし者までも、此の自然の野に放置して、元との野花に立戻れるの觀無くんばあらざる也。

其八

●牡丹花が、百年の巨幹、稀有の巨葩を著け得て、威風、白花を壓するの概あるものは、明大の鳥山也。明大が、近ごろ、强チームに列するに至れるは、彼の力に依る。

●彼の風貌は、端午の武者人形の如く、眉目逞しく、コートに立つ態度頗る雄壯にして敵を吞む。彼は戰はずして一騎當千の勢あり。

●彼は、サーヴに四十八手の變化を示し、熱球もロビングも自由に亂發し、戰法頗る奇拔にして、敵手の膽を奪ふ。

●彼は、好前衛を得ざるが故に、つねに、一人テニスを爲すに馴れたり。加之、また敵の前衛をも無視す。一見、彼のテニスは傍若無人也。

●彼は、現代の第一流者なるべし。而して、早、慶の大軍を離れて、唯だ一騎、明大の孤壘に據り、蠻勇を揮ふ。如何なる大軍と雖も、彼の鋭鋒に嬰りては、辛き目を見せしめらる。

●若し、一箇人の力量を以て論ぜば、鳥山は勇猛無比なるべし。凡そ何人と雖も、當るに際限あり。彼が、油の乘つて、當り來るときは、澎湃として湧く海潮の如く、限り知られず見ゆ。

其九

●早大は、今春の全勝者を以て期すと聞く。早大のチームは、鈍栗の脊競べにして、未だ群を抜きて、伊藤、岩村の後勁たるべき者を見ず。

●副將澤田は、既に老將の域に入る。其の餘は、皆、少壯氣鋭。甲藤は大器の素質あるべし。臼井、岡部、國領、近ごろ、ともに振ふ。

●國領が、畑、岡に勝ち得て、早大の敗軍を、一髮の危機に支へたるは、啻に、敵の疲勞に乘じたるのみと

いふは酷也。此の春の彼は、沈著にして能く當る。戸塚の一飛將たるを失はず。

其十

●畑は、海棠花を以て比す可き乎。未だ梅、櫻を凌ぐといふを得ずと雖、月に宜しく、雨に宜しく、一段の風姿、時ありて、春光を占領するに足る。

●畑の沈著にして精練なる、モーションの敏速にして、逸珠を拾ふに苦しまざる、打球の自由なる、何等缺陷をも見せざる好箇の後衛也。

●强いて畑の弱點を求めば、或は、其のバックにあらん。彼のバックは應戰に苦まず、然れども稍カーヴするを免れず。

●此の春の、敗軍は、恐らくは、岡が巧みに畑のバックを掩護せざりしにも因らずんばあらず。岡にして、つねに、畑右、岡左の陣形を執るを怠らざらしめば、或は凱歌を一橋に揚ぐるを得しならん。

●畑、岡既に稻毛の難關を破る。若し更に柏尾の難關に蹉跌する無かりせば、其の餘は歴々、一關無かりしなり。

●岡のコートに立つや、其の初、先づネットに接して難攻不落の形を爲し、混戰に及んで、チリ／＼後ろに下がりて、ネットとの間隔を敵にくらまし、然る後、大膽に自由のモーションを執つて、得意のスマッシングを發揮す。

●此の春の岡は、大なるスマッシングを見せず。概ねプッシング、スマッシングの一點張に出づ。彼が、必勝を期して萬全の方針を取りしに由るならん。

●彼は、高球も低球も、共に自由也。ボレイに宜しく、ストップに宜しく、殊にバックボレイは華やか也。彼は、肩にも腰にも缺陷を暴露せず。唯だ往々、肩と臂との間に弱點を微見す。

●彼の、偉大なる軀幹を、輕快に運ぶは、海獸の岩間を潜ぐるが如く、人目を一新す。

●彼のコートに立つは寧ろ偉觀也。輕快、雄大、兼ね備はる。畑は第一流者たるを失はず、岡に至つては、恐らくは、東西に獨歩す。

●彼は熱帶の巨花也。巨花、巨葉、巨幹、堂々として從來、群花の精采を一掃して空しくするもの也。

其十一

●岡は、尚ほ稚氣を帶ぶ。其のミスは、彼が輕擧に本づくもの少しとせず。

●彼に勁敵福井あり。既に、岡の弱處を會得すと稱す。加ふるに、鋭を蓄へ、鋒を磨き、百練怠らず。

●此の兩雄の決戰は、來るべき旬日の中に、神商のコートに擧行せらるべし。諏訪山下、滴翠、碧瀞に映發するの處、願くは、美しき力戰を見せて、此の華やかなりしテニスの春を餞せよ。

吾輩、去秋、久病の後、ラケットを手にせず、空しく疲癢の嘆を抱く。此の篇を草し、僅かに悶を排す。夜深くして風雨來る。園中の櫻花、明朝、飛ぶこと二三分ならん。

黑頭巾記

人物評論（十六）

加藤高明と内田康哉



△内田男と加藤氏

文學博士　三宅雄二郎

何人も何程か運不運はあるが、近來官吏として著しく運不運のあるは軍人と外

交官だ、事あれば大に功を認められ、事なければ一向に知られぬ、他のものては男爵か子爵かになるが精々だが、軍人及び外交官は一躍して伯爵となり得る。若し事變が續けば侯爵或は公爵ともなれる運命てある、勢に支配さるゝことと是程なものは稀だ。此頃日米新條約が結ばれ、引續いて日英新條約が結ばれ、當事者たる内田大使及び加藤大使に就いて多少の噂がある、或は出來がよしといひ或は出來が惡いといふが、現在の情態ては是れ以上に出來ぬと政府側ては思つて居るだらう、兎に角一と先づ落着した形がある。が新條約結ばれて幾干もなく支那に於ける四國借款問題が成立し、米が發頭人て同盟國たる英が之に加はつて居る、借款が成立して直接に日本の利益に牴觸すと言ひ難いにしても、前年の三國干渉に類する嫌ないても無い、或は昨年米國より申出した樣に滿洲鐵道を處分するの已むを得ざるに至りはせぬかと疑はれる、兩大使は之に對し前以て何程の消息を得て居つたか、知りながら多少其間に手を容れる餘地がなかつたか、疑問として存するが、今の大使は昔の歐洲邊の大使と違ひ、絶えず電報て本國政府と打合はせ、功過共に責を分つ譯であつて、善いとて餘り褒める譯に行かず、惡いとて餘り責むる譯にも行かぬ。條約改正は嘗て大事件と考へられ、爲に大隈伯が足を奪はれる、或は議會が解散される、なか〳〵の騷ぎ、それだけ故陸奧氏が功を以て子爵となつた。條約改正の大騷ぎであつたとすれば、今回の新條約も功を立つるの好機會であつた、賞の重く罰の輕き政府として爵無きものに爵を與へ、爵あるものに陞爵するの運びともならうか。しかし功を立つるの好機會であつた割合に餘り目覺ましき出來榮えとも見えぬのを惜しく感ぜられる。

内田男にせよ、加藤氏にせよ、我國有數の外交官てある、それが殆んど同時に新條約を結び得たのも一奇とすべきだ。從來二人共に好運て、特に内田男を然りとすべきである、加藤氏も好運だが、以前は以前、今は男に較べて不幸である、當初の出身からいへば、加藤氏程好運のものはない、天下の富豪なる岩崎の婿と

して何處にも幅が利き、明治二十一年大隈外相の秘書官となり、後大藏に入り、次いて駐英公使となり、三十三年伊藤内閣に外相となり、三十九年西園寺内閣に外相となつた。年齢こそ小村外相より下てあれ、位置に於て先進者てある、小村が北清事變の際列國使臣の間に斡旋して技倆を現はし、日英同盟の端緒を開いたのは、外相としての加藤氏と内外相應じたのであつて、同盟は時勢の促した所とはいへ、其起りは加藤氏の英國駐在の頃よりの事、即ち加藤氏が道を開いて小村伯が開拓の事業を遂げたといふべきてある。加藤氏は駐英公使として評判好かつた。といふも前の公使は唯さへ外交費の少いのに蓄財に汲々として殆んど交際といふ程の交際をせなかつた、或る公使の如きは公使館費て物品を整へ、歸任の際盡く之を持ち歸つた、是から見ると加藤氏は駐在國の紳士と一通り交際をした、宴會の節に縮緬を敷き詰めるなど一種特別の裝飾をして人を驚かし、何や彼や前の蓄財連よりも目立つた處があり、それだけ話を進め得る事になつた。公使として評判好く、歸つて外相となつたので、順序からいへば小村の爲した處を爲すべきてあつたが、其處は運命て致方なく、久しく飜譯局にくすぶり借金に苦んで居た小村がトン〳〵拍子て立身し、異數にも伯爵になつたかと思へば、幾もなく侯爵になつた、間の好いにも程がある。之に反し加藤氏は内閣を去り、横濱で選擧を爭うて負け、日々新聞を經營して維持に苦しみ、散々の體てあつた、小村も立身して見れば加藤にも氣の毒てあり、其儘に爲し置く譯にも行かぬ、自分も英國て評判面白くなかつたので、前に評判好かつた加藤を大使として新條約締結に與らしめ、私情と公職と一擧兩得にした、是て加藤氏も何れだけか運命が開けたが、とても小村侯に及ぶまい、トン〳〵拍子の運命は小村に取つて代られたのてある。

内田男の方は絶えず順潮てあつた、陸奥伯に見込まれ、順を追うて昇進した、加藤氏が外務省に大隈伯を助け條約改正に從事して居た頃、昨年大學を出ましてと挨拶した位の身て、爵を得るに於て加藤氏に先んじ

たのは、後の鴈が先になつたのだ。事の斯くなつたのは種々の事情があり、二人の性質の違ふ所もあるが、加藤氏の初め餘り順境であつたのが後に禍したといへぬでもない。岩崎の聟といへば頗る幅が利く、普通世間で思ふよりも幅が利く、加藤氏は物の分らぬ方でなく、學校に居つて學生に似合はず世態人情に通じたと見られて居た、岩崎との關係の如何をも思はなんだでなからうが、幅が利くに慣れ知らず〳〵人の頭を下げるのを當り前の事の樣に看做すに至つたらう。のみならず英國に居つて英國の紳士を模範とし、生れつき重々しいのを愈々重々しくする所からして人につきが惡い、不愛想不愛嬌の樣に見える、或は澄まして居り威張り居るとも見える、氏は其邊のことを心得ぬではない、不愛嬌にしてたまさか愛嬌を洩らす方が無暗と愛嬌を振り撒くより、效能のあるを知つて居る、其れを行つたらしい處もある、が人が明けて通すに慣れて不愛嬌の儘人に反感を起させたりして、選擧競爭に臨み、自分は議員なんかになりたくないが、選擧されゝばそれても宜いといふ樣な口吻で、元と惡い氣でないのでも、折角運動し居るものに好い心持をさせぬ、奥田氏が同道し、種々に取做して好意を得たのを片方より毀し、遂に落選となつた、日報社でも横井氏を主筆とし而して互に面白く感ぜなかつた、横井は不平滿々であつた、若し加藤氏にして初より岩崎の聟といふ樣な事がなかつたならば、今少しく圓滿に普通の人と交際し得たであらう。

内田男は初め富豪の聟と爲るを罵つた、阪谷男が澁澤の聟となつた頃、阪谷の爲に惜むといつたが、後に土倉の聟となつた、併し土倉の聟たる以前幾年も書生肌で通し、聟となる頃、聟馬鹿にならぬ丈の調子を覺えた。それに熊本氣風ともいはうか、外磊落、内小心て、加藤氏の外から澁つたいのとは違ひ、場合に依り大盃を擧げ大言壯語したりする、小事に拘らず、から〳〵して居る、愉快さうである、選擧場裡に出ても先づ勝を得る方である。が外と内と違ふ所の仄見えぬてもない、磊落で氣が置けぬと見え乍ら、或る人の目に

は却つてそれが爲に氣の置ける感じがする、愉快さうて何だか愉快でないと感ずる、人附合は旨いが案外に不快を感ずるものがある、是が下に執務するを不快として轉任したのもある、併し聟風を吹かさぬ丈の事はある、そこは加藤氏ほどの聟でないだけ都合が好い。外國人を相手とするに至つて甲乙ない、特に英國人と應接する段には加藤氏の方が信用を置かれるだらう、併し本國に歸つて大臣となるには内田男の方が一寸景氣づくかも知れぬ、併し長が續きするかは疑はしい。二人共に外務に限らず他の省にも事務を取ることが出來る、加藤氏は外務と大藏と孰れが適任だか分らぬ、内田男は大藏には向かぬが他の省ならば差支がない、が二人共に今日迄外務で位置を得來つて居るから他に轉するが不得策なるに相違ない。小村侯は外務の外に適する處がない、外相として種々の非難あるに拘らず此二人に劣ると見られる氣遣ひあるまい、外交官は總じて秘密を尊ぶ、又尊ばねばならぬ、從つて何時でも奥齒に物の挿まつた調子がある、何だか隔てがある、所で小村侯は言ふべきを言ひ言ふべからざるを言はぬ、人が何と思つても構はぬ、ぶつたり澄ましたりする跡がない、人をして變な男と思はせ、或は政策の上て反對させても人物の上て不快を感ぜしむる事は少い、彼れはあゝいふ男だとして通りものになつて居る、人好きする方でなくても左程嫌はれもせぬ、割合にさつぱりして居る、表裏がない、才子肌よりも豪傑肌の處がある、小さいながらも男兒の眞骨頭らしい處がある、其れて腕が鈍つても何處となく面白味がある、他の二人は旨みを添ふるが爲に厭がられもする、福德ある者必ずしも貧叟に勝てぬと見える、併し二人も經驗を積んで圓熟すれば是迄と違はう。

△寄宿舍馴染だけの内田

朝比奈和泉

内田の事は學生時代の事つきりしか知らないね、その後は薩張り逢はんから。彼の男は初中終外國へばか

り行つて居たからね、學生時代と言つても僕よりは二年上の級なのだからね、何でも彼級には林田龜太郎、一木喜德郎、早川千吉郎、林權助、鈴木馬左也などが居つたよ、斯樣言つて見ると隨分彼級には人物が居たね。さあ如何かな、大して出來た樣でもなかつたね、中位の所だろう。語學は下手だつたね、彼の級では一木が一番出來たよ。僕はでも同じ寄宿舍には居たよ、何しろ當時は寄宿舍が狹くて困つて居たので、林と内田の室へ僕が割り込んで入る事になつたのだ、二人共まだ卒業せぬ中から外務省出仕を命ぜられて行つて居たよ。左樣、當時の内田の事で何も今記憶に殘つてる事もないなあ。試驗の時にインカムタツクスの所得税であることを忘れて大困却、でも原語のインカムタツクスだけは忘れなかつたので、收入税と答案に書いて出した事を覺えて居る。大笑ひだつたよ。

加藤か、加藤は薩張り知らぬ、加藤などが立派に卒業して仕舞つてから僕は大學へ入つたのだからね。學校出てからは二三度逢つたが深く交りもせぬから知らぬ、背の高い大きいな男で鼻は秀で目は凹んで居る、一見西洋人だね、彼の樣子からして西洋人には向き相だよ。僕が病院に入つて居た時やつて來て、そして直つたら又日々へ入つて來れとか何とか言つたつけ、でも僕は斷つたよ。伊藤公が如何見て居たかつて?、如何とも見て居なかつたな、加藤の事なんとは左樣話さなかつた。加藤の方からは取入つたか知らんが伊藤公は大した人物とも見て居なかつた樣子だな。

△我外交官中の偉才

早川鐵冶

二人共外交官中の好運兒だ、又二人ともやり手といつて宜い、歐羅巴から歸る人達の話を聞くに、他の外交官は大分年を取り過ぎたり、又列強の事情に疎かつたりするといふけれど、二人とも左樣ではない、先づ鐵中の錚々たるものだ。

加藤は大學へ入り始終首席で通し、十四年に卒業し

たが、同級生の皆官途を選んだ中に、獨り彼のみは三菱汽船會社に入り、それも非常に下級から入つた、何でもクラーク位の處から進んで其後小樽邊土の出張所に在勤し、それから三菱社より留學をさせられ倫敦のピーオー會社かに入つて歐洲に遊んで來、岩崎家の重役と爲り得る資格を作つて歸つた、それから岩崎彌太郎によつて重く用ひられ其の駙馬となり、三菱が共同運輸會社と合して日本郵船會社となるに及び、彼は突然去つて官界に入つた、即ち岩崎と最も親善の關係ある大隈が外務大臣の時で、彼は一躍高等官五等で出仕した、此樣な事は異數である。即ち大隈系の外務省内に彼と鳩山とが同時に入り、彼は鳩山取調局長の下に參事官を勤めて一時全盛を極めたものだ。大隈去つて後に彼は大藏省に轉じ主税局長を勤め、それから復た外務省政務局長と成つた、大隈系だけれど岩崎との關係があるから伊藤と近づくことが出來、大隈の後にも巧に官界に出て居た、英國へは初は公使後には大使で行き、其間二度まで外務大臣をして居たが、夫の鐵道國有に反對して桂冠し、それから逆境に陷つた、日々新聞を經營して發展させるかと思へばそれも成功せず、政界に打つて出てて大に驅逐するかと思へばそれも蹉跌して思ひ止まつた、即ち新聞記者としては三宅(雪嶺)德富(蘇峯)に及ぶ能はず、政客としては原敬、元田肇の壘を摩する能はずに了つた、將來は果して如何するであらうか、漸く三菱の一角に理事とか何とかいふ位の名義で居るであらうか。

一體加藤の如きは腕があり、事務は能く執る、外國語は達者だ、英文も能く書けば漢文にも堪能だ、そして高尙の思想を持つて居る、お負けに金は岩崎を控へて居る、鬼に金棒だ、政界に雄飛して行けば宜いのである。けれども是迄難義知らずに來て居る、何でも金力で勝てるものと思ひ人に愛嬌がない、横濱では淺田又七を怒らせて到頭其爲に議會にも出れなかつた、彼樣な傲慢な態度を取つて居ては陣笠連が自由に動くものでない。彼に取つての弱點は是だ、それに私の常に嘆息するのは赤門出の人は一通り藝も出來學問もある

けれど克己心がない、奮闘することがない、易きを望み小康に安んずる、此節は官吏には學問ある人物を使ふを主とし、特に文官任用令なるものを設けて大學出のものに道を開いてあり、其試驗には大學で教えた事をやる、其委員には大學關係の人が居る。此制度からすれば今頃大臣など澤山出て居べき筈であるに左樣でない、大臣を除いて次官以下の高等官からが大學出で多數を占めて居る。けれども何れも腰が弱い。加藤の樣の有數な人物でも、一朝野に下ると、大に爲すべきであるのに能うやらぬ、新聞や代議士で失敗すると早や能うやらぬ、又候特命全權大使位に有付いて辛抱して居る。是は獨り加藤のみでなく滔々として皆然りであるが遺憾に思ふ。私は常に言ふ、帝國大學出の人にド偉い政治家なし、帝國大學出の人にド偉い實業家なしと、それは無事安全の鰻上りにのみ慣れて、乾坤一擲の思い切つた事をする氣力がないからだ、鰻上りでも中には難義知らずに能く立身するものもある、平田東助、小松原英太郎の如き者もある。かさて如何なるか、多くは恩給を狙ひ貴族院を狙ふことと位に止まる。是れはほんの大臣の位地を貰ふて居る計りで加藤も亦此腰の弱い點に於て遂に免れぬ。英國は兎に角彼の第二の故郷だ、政府も彼をやれば便宜であるし、彼に取つても亦便宜だ。で今度の條約にも彼が骨を折る樣になつたが、關稅問題等で色々の失敗もあるけれどもそれは彼の負ふべき處でなくて本省の罪だ。彼としては比較的好くやつたと思ふ。

內田は大和の土倉庄三郎の女婿で、加藤の取調局次長をした時始めて學校を出て其下に交際官試補に出身したのだ、加藤は即ち內田の先輩だ、加藤の英國公使の時にも內田は其書記官であつた、それにも拘らず、加藤は無爵であるのに彼は從三位勳一等男爵である。只勳章だけでも加藤は下の筈だ、即ち內田の旭日章に對して加藤は漸く瑞寶の一等だと思ふ。內田は大學では一木喜德郎と同級で卒業の時には二番であつた。それからして見ると頭も相當に善からうと思ふけれど藝はない、外國語がよく出來ず、英語なども下手で奥さ

んの方が餘程上手だ、佛語も近來一生懸命でやるけれど下手だ、だが是れ位幸運兒はない、彼の是迄の經歷を顧るに大して仕事をせずに進んで居る。初め外務省に居た時にも上には加藤といふ働き手が居る、一騎打ちに仕事が出來るから何もかも自分でして彼を煩はさぬ、華盛頓に行つても公使は陸奧(宗光)であるのに又佐藤愛麿の如き英語の達人が彼の上に居た、それから農商務省に秘書官をした時にも上には原敬が居る、是も仕事をする男だから固より內田の手は要らぬ、內田は只奧さんやお孃さんに陪從して大に御機嫌を取つた丈、又大分御孃さん達の同情を得たとの噂だ。外務省に入つて庶務課長をしたけれど、是は只外國人に對して勳章を贈るとか、彼方から外交官の來る時分に御取次をするとかいふ丈の仕事だから骨の折れる事でない。要するに此の如く、いつも仕事をすべき處には上に偉い人が居る、左樣でなければ其仕事は只の式部官のする位のものであつた。更に又淸國公使館附一等書記官となり、間もなく英國へも行つたけれど、例の加藤の下だから何もせずとも宜い、歸つて政務局長として外務省へ入つたが、大臣が青木で次官が都筑、皆腕こきの揃だから彼は懷手で濟む、次いで外務次官になつたが、これこそは大に仕事をすべき椅子なのだけれど、又大臣が加藤である、是れから一轉し、全權公使となつて淸國に赴いたが此時には反對に敏腕の書記官が居り、次いで全權大使となつて暫く墺太利に居り、それから現任米國駐剳の大使なのだ。即ち大した骨折をせずよい役廻りばかりして今日の位置に經上つたのだ。

彼は圓轉滑脫の性質で人の氣に入る、西園寺に近づけられるのも信用されるといふよりも寧ろ可愛がれるのだ、又桂へも取入る。生れは熊本の田舍醫者の子で、同志社を出て大學に入つたのだが、格別腕があるとは思はぬけれど仕合せのよい人だ。

西園寺八郎が聟を貰うて夜會を開いた時に、私も招かれて行つたが、內田も折しも支那から戻つて大得意で居た時で、一所に招かれた。彼は私が大隈の幕僚で居た時には無任所外交官で仲々能く御世辭を遣つたも

のだが、私の去つた後に其後を襲いで政務局長となつた、爾來久濶て來たが、彼は其晩私に顏を合はせると、やア十年も逢はぬが如何した○一向伸びんじやないか、何して居る？といふ調子、私は、ヘン僕なればこそ官界を見限つて野に下つたの、兎に角是れ丈にやつて行くのだ、貴樣等に此眞似が出來るか、御役目大事と嚙みついて居ればこそだが、素町人に爲つて働く腕があるかといつてやつた、側に中田敬義が居つて大喜び、大賛成て後になつても旨くやつ付けたねといつた。それから少し彼も容を改めて優しい態度になつた、それも其譯、中田は彼の先輩であるに拘らず得意の彼に毎度侮辱の語を浴せられて居たんだ相だ、丁度中田は私の讀んだ伊呂波文庫の高田軍兵衛といふ格だつた。一旦義士仲間から脱けた軍兵衛が、義士が首尾能く仇を仕止め泉岳寺に引上げた時に四斗樽を持つて出て鏡を拔き「諸君御苦勞、一つ飲んで呉れ」といつたといふ事だ、すると義士連は仇討ちには脱けて居ながら、人が旨く首尾をすれば喜んで出る、不都合だといつて大腹立をしたといふが、中田は兎に角自分の仇討を私にさせた氣で大喜びをした。あの鹽梅だと内田は態度上官には如才なく、目下のものには傲慢な男、所謂圓轉滑脱の人と見たが左樣だらう。取入る事が上手だから追つ付け子爵にも爲ろうし外務大臣ともなろう、つまり無事安穩に格別雄飛する事もなく、小村の樣に難義をせずに上つて行かうと思ふ。彼は仕事をせぬから又敵をも持たぬ。

要するに日本の外交界には偉い人がない、其中て見れば此二人は錚々たるものだらう、日本の外交に是迄赫々の功を認むべきものはない。陸海軍の力で漸く今日に至つて居る、日淸、日露の戰爭と二度迄も干戈に訴へて居る、腕力に賴らねばならぬ外交は外交の最も拙なものだが日本ては一兵を用ゐず事を談笑の間に運ぶといふ事は出來なくて、初中終喧嘩ばかりして居る、他を見るがよい、英國などは露土戰爭の際に處して巧に一兵をも用ゐずサイプラスを取つたてないか、伯林會議でヂスレリー、ゴルチヤコフ等が集つて、机の上

の押問答できめてしまつた。露西亜は腕力で勝つて外交で負けて居る、つまり露西亜と土耳其とは外交が下手なのだが、丁度日本が又それだ、此下手な日本の外交家の中で彼等が先づ比較的よいといふのはなんと心細いではないか、藩閥とか系統とか云ふよこのみ顧みて彼是毛嫌ひをし、乃公の如き人物をして髀肉の歎聲を發せしむるとは、近頃國家の爲め人物利用の經濟を知らぬと云ふものだ。

△高々郡長位の器

九皐羽客

あの加藤が如何して彼様なに出世したのかね、成る程體格丈は偉大で如何にも大人物らしいが、器の小なことゝいつたら御話にならぬ、最負でもなかつたら高々郡長位の器だね、傲慢で片意地で、何處へ行つても人と折合が惡い、西園寺内閣の時に鐵國問題で飛び出したといふが彼は嘘だよ。樂屋を知つて居れば事情は別に有るのだよ。鐵國問題なくとも迚も彼内閣には折合が惡くて居れなかつたのを、偶々鐵國問題が起つたから是れ幸に藉口して飛び出たんだよ。元を明せば斯うなのだ、彼は誰とも折合が惡かつたのだが、就中最近の動機となつたのは山縣伊三郎との衝突だ、閣議に山縣が次官や局長をも連れて來たのを見て加藤は直に詰責した、閣議は大臣ばかりでなければならぬに次官や局長を連れ込むとは何事だといふ。山縣は辯護して他の者とは違ひ遞信省などは數字の説明を要するものが多い、左樣いふ事になると一々長官が記憶して居る譯に行かぬ。それ故便宜上臨席させたのだ、外務省でであつたら單に米國との關係が如何だ、露國との關係が如何だとかいふに止まるから大臣だけで濟まう、併しそれとても關稅問題などになると矢張り數字沙汰になる、從つて大臣のみではいかぬ事もあらうから絕對にはいへまいといふ、加藤は然らずと抗言する、遂には大臣としてそれ位の事が分らぬなら、遞相の椅子を去れと迄怒號する。到頭其時の閣議には次官や局長を

廊下に立たして置いたといふ話だ。それから山縣とは初中終睨み合ふ。他の閣僚も是では困る、加藤が居ては困るといひ出し、就中松田正久の如き、彼樣な時には最も猛烈な態度を取る男で、極力加藤を排斥した、西園寺侯も持て餘したんだね、閣内の衆行が此有樣だから加藤も自ら早晩去らねばならぬと意識して來たが、さて正直な其内幕を暴露して飛び出ては世間體宜くない、出るには出たいが口實がないと探して居る時に、恰も好し鐵國問題が起つたから、待つてましたといふ調子で反對し、それを理由として飛び出したのだ、外務大臣が鐵國問題で飛び出したのだ。その時の辭表も加藤が書いたんではないからね、それ迄素つ破拔いては氣の毒だが、實は高木に書いて貰つたんだからね。高木誰れつ?、止さうよ、加藤には如何でもよいが高木に氣の毒だからね、高木某にして置き給へ。

彼は其小器を如何なる處にも暴露して居る、日報社へ入つた時なども實に細かくして唾壺の末に迄世話を燒く。會計主任に粟屋といふ者が居たが、それに對して十五錢ばかりの支出に對してこつぴどく怒つて文句を並べる、特に驚くのは如何だ、彼は入社匆々、窃に安樂兼道を使つて社員の内訌を迄探偵させた、其小心其猜疑の強い事此類だ、そして前社員などを大分ひどい目に合はせて淘汰もした。それは語學は出來る、事務には熱心だ、毎日朝早くから出て夕方迄社に居る、如何しても小吏といふ性格だ、皆に厭がられたの何のつて御話にならぬ。

尾張家の臺所整理のあつた時、彼は其整理の役を頼まれたが、如何にも細かくて皆が困つた相だ、一月に炭いくらと極めて置き、それが三俵豫定より多く要つたとて八釜しく詮議する、到頭一日に客を大凡何人と定め、之に要する炭は何俵などと細かに割當て、如何な事があつても此制限を越えてはならぬなどと無理な事を言つて騷いだ相だ。其細かしい處に氣の付くといつたら是は只の一部に過ぎぬ。彼樣な男がトン／＼拍子て兎に角今日迄の位置になつたのは、矢張り多分は閨閥のお蔭だね。彼奴の事ならウンと惡く書いて宜いよ。

△內田、加藤其他の遣外使臣

望月小太郎

今の滯外外交官中では先づ第一に加藤を推す、頭腦明晰、特に根が商人上りだから何事も計算に明かである、英國の樣な卒直坦懷の國民には極めて同情を得て居る。加藤を除いて其國の受けの宜いのといつたら本野一郎だろう。從前の外交官は何が無しに押し包んでばかり居たのを、本野は虛心坦懷に話すものだから外交官や新聞記者仲間には評判が宜い。栗野愼一郎は佛國の朝野に只極めて誠實な外交官として受けがよい、珍田（正己）は溫厚篤實な人物だが、それが却つて機敏聰明な獨逸國民には信用され安心されて居るのも是亦實際である、更に維納に行くと秋月（左都夫）が居る、出身經歷共に淺いから分らぬが、一昨年來巴爾幹問題が中心となつて歐洲の政況は騷がしくなつて居る。巴里、維納間の情報は賑はうのだが、此先また如何いふ樣な變化を見るも知れぬ、此間に處して彼が如何なる技倆を示すか、その腕前は偏に將來の試驗に待たねばならぬ、海を航して更に亞米利加に行くと內田が居る。內田は事務家として成功した人だ、亞米利加は歐羅巴と違つて事務のみの多い處だから內田の如き人を置くのは、適所に適才を得たといつてよからうと思ふ。

（附記。望月氏の都合によつて我滯歐外交官の精細なる評は暫く擱き、別に氏の「我國外交の將來を論じて其外交機關の刷新に及ぶ」と題する論文を次號に收むる事とした。是が即ち我外交官の手腕を判ずる氏の唯一の標準となるのだから其積りで見て貰ひたい。）

▲加藤君と內田君

田川大吉郎

◎加藤高明君に內田康哉君は、いゝ對照かも知れんが、加藤君は之を見たら怒るだらう、小僧の內田と乃公を同列に置くかと怫々言ふだらう、實際、僕も之は加藤君に聊か氣の毒な如に思ふ、

◎然し一方は三菱家婿、一方は土倉家の婿、共に日本の大金持の婿である、僕は僕の僻み根性でゝもあら

う、此樣な金持の婿、大臣の婿、華族の婿といふ男を、男の中の男と思ふて居ない、失禮ながら、外に著しい其いゝ點を沒却するまでに、僕は此樣な人を卑しむ、僕は男といふ男は、決して此樣な人の婿と爲るべきでない、誘はれても、すゝめられても、苟も大志ある者は、之を謝却するの勇氣と、高潔なる情操と、いつも獨力を以て前途を開拓せんとする理想が無くてはならぬと思ふて居る、此樣な譯で、僕は兩君の技倆と、見識と、品格とを相應に認識するに拘はらず、どこにか兩君に滿たない所がある、例へば僕と兩君とは、非常な位置の懸隔で、遙に相如かざる所があるけれども、僕は兩君の前に尙昂然として立ち得るといふ意氣を、いつも胸間に漲ぎらせて居る。

◎此度日米條約が出來、又日英條約が出來たのが、察する處、貴誌の兩君を擇ばれた理由であらうが、僕は如何に考へても、此度の條約を成功と思ひ得ない、日米條約を非常な失敗と謂ふのは酷だ、前條約よりも少しはよくなつて居る、體裁だけでも少しは改まつて居る、故に失敗だと非難するのは酷だけれど、前條約は日本國民のまだ〳〵滿足して居ない、其滿足を距ること較々遠き、其中心には寧ろ沈痛の恨みを抱いて居る條約であつた、それを此度の機會に刷新したいと願ふて居つたのである、故に此度の結果は、決して退歩ではないけれど、其期待には副ふて居ない、日米間に横はる將來の大いなる患ひは尙のさばつて居る、僕は此度の內田君の功勞を以て直に內田君を頌する迄の氣には爲り得ない。

◎日英條約には何も言ふことは無い、只其關稅關係は言語同斷だ、小村伯は今は既に侯爵と爲つて、一層エラ相な顏付をする樣だが、僕は此關稅問題の一擧で、小村氏に對する平生の尊敬、同情を全く地に委して仕舞つた、今迄は侯も尙僕の頭腦に多大の印象を與へる、絕えず僕の思案に上る一人であつたけれど、此事以來、僕の腦中には侯は最早片影を留めなくなつた、僕は將來侯に逢つても、頭をさげるかどうか分らない、僕は大臣として、侯爵としての、氏に對する敬意を全くな

くして仕舞つたのだ、其樣に僕は關税問題を、不體裁に、不本意に、羞辱に思ふ、それだけ僕は加藤君に不滿足だ。

◎僕の思ふ所では、加藤君は僕等の慨する此思想が分らぬ人では無い、それどころでは無い、加藤君は多分僕等と同感同調の人であらう、加藤君の平生、其言論の針路は、僕に其樣な感じを與へる、而して其加藤君が今回の協約を訂結するに至つたのは、一言以て之を蔽ふ、僕は加藤君が薬鉢に爲つたものかと思ふ、事志と違ふ、あんまり見當違ゐな事情の成行に、刧を煮やし、嫌や氣がさし、儘よ三斗笠横ちよにかぶりて、耻も、外聞も、體裁も、何もかも有つたもので無い、大臣に小村侯の指圖のまに〳〵、行きなりばつたり、碌に注意を拂はないで出來したものだと思ふ、日本の關税率を下げるから、從來英國の税を課したことの無い品物に、將來も税をかけぬといふ約束を承つて、それて雙務だ、對等だ、一等國だは、ほざくにも程がある、僕は之を以て神經ある者の社會には通用しない言葉だと思ふ、

◎そは兎に角に、加藤君は悪い人だ、内田君は甘い人だ、内田君には優しい所がある、加藤君には拗氣た所がある、だから加藤君には骨つぽい所がある、頼母しい所がある、内田君は中性の人だ、或は中程の人だ輕快て、可成り勤勉て、可成り上品て、此といふ失が無いかはり、此といふ目立つた性格が無い、之に較ぶれば加藤君は特色の多い人で、一風ある人だ、一癖ある人だ。

◎其加藤君がナゼ三菱の婿に爲つたか、此は多分其名古屋氣質が、西洋風と入り交つた結果であらう、彼は此點に於て、日本の名敎に遠ざかつて居る、一事が萬事だ、加藤君には英國風が多い、地味な、堅固な、今人的な、意地張の强い所、彼は之を英國風に學んで、之にあやかりたい、之が本當な紳士の風だと思ふて居るに相違ない、而して此は勿論僕の愉快に感ずる所で、君が割合に日本に不人氣なるに拘らず、僕の窃に君に同情する點だ、然し英國の紳士には、君の如き苦味が

無い、英國の紳士は君よりもモッと謙和に更に溫藉である、一と口にいへば、此は彼等の宗敎的感化より來る、其修養より來る、而して君には其宗敎的理想、謙遜、和樂、光明の氣合が無い、齊一變せば魯に至らん、魯一變せば道に至らん、君の紳士道は更に一變を要する。

◎内田君が土倉家の婿と爲つたから、一概に君を當世の薄志弱行の徒と同視するも不當である、君の未婚の時代に僕は聞いて居る、陸奥君が剃刀大臣として、聲名朝野を壓した場合、どういふ乘合か、君を大變に愛して、其愛孃を君に嫁せしめんとした、君は、大臣の知遇に感ずるに拘らず、其親切を無にして之を刎ねつけた、何遍かすゝめられたけれど到頭辭退しきつた、當時僕は君の寫眞を見たゞけである、君の容貌には、人の言ふ如く覇氣が無い、やゝゴム人形に類した所がある、其寫眞を見た僕は、意外な事かな、此人にして此意氣あらんとはと、頗る痛快に感じた事であつた、君にも相應の操守本領がある。

◎内田君が此くして娶つた今日の夫人、即ち土倉氏の娘は金持だけに隨分氣の強い所がある、此人が米國大使の夫人と爲つて、米國の交遊社會に出入して、それにかぶれて歸つた日には、嘸、元氣な夫人が躍り出るだらうと思はぬことも無いが、然し學問がある、才氣がある、容色の美がある、おまけに金があると來て居る。チッとやソッと威張る位ゐは當り前かと思へば思はれぬても無い。

妻を娶らば當に花の如くなるべしとの古詩の意味は僕には久しく分らなかつた、四十を超えた今日成程こんな意味かと考へかけて居る、加藤君の夫人に就ては知らない、内田君は屹度大いに滿足して御座らう、内田君の容貌性格の既に圓滿にして益々圓滿なる所以である、加藤君はどうであらう、其容貌性格から見ると、今日未だブスクス言ふて居らるゝか、或は其氣のある所が即ち君の生命かも知れぬ。

◎兩君の將來に就ては僕には薩張分らぬ、只日本が若し働く人を用ゆるなら、加藤君は尙用ゐらるゝであら

う、日本が若し當り觸りの少い人を用うるなら、內田君の將來は幸運であらう、僕はぼんやりそんな風に觀察して居る。

△得意と不得意

靜觀居主人

私の考では此度の條約改正に就いて內田君は定めし得意てあらうと思ふ、が之に反して加藤君は定めし不得意てあらうと思ふ、其點ていへば二人の間に丸てコントラストが有らうと思ふ、如何いふハヅミて日米現行條約但書の第二條が削れたか知らん、勿論外務省からは削除要求を訓令したてあらうし、內田君にも其意志が有つたてあらう。けれども其訓令の力て能くも彼の個條が削除され、又內田君自身の力て彼れが削除出來るものといふ自信が初から有つたらうとは思はれぬ、如何いふハヅミて彼樣な具合に其道が先方から開けたものかといはなければならん。其削除が出來た時には內田君は隨分嬉しかつたてあらう。削除の出來た事それが內田君の功だ、一寸功を亞米利加て見出した事となる、可なりそれの出來る丈の運動はした事てあらう、兎に角內田君の手柄といつて差支ないが、自信の無いものがやつて見ると案外出來たのだから誰ても得意にならざるを得ぬ。それ故得意と想像する。

然るに加藤君は初から英國に關稅問題が持上つても防げると思つたに違ない、あゝ六かしくせずとも出來ると思つたてあらう、又左樣する事に就いては意見もあり盡力もしたんてあらうと想像する、私の信ずる所ては加藤君は經濟上ては日本人中有數の識者と思ふ、從つて定見がある、經濟界に付色々八釜しい議論もあるが加藤君は自由貿易主義に傾く人だと思ふ。それ故日本て關稅を高むる事に就いては多分同意てなかつたらうと思ふ。高めるとしても其程度に意見が有つたらうと思ふ、そして一昨年の議會て決定した新關稅率に就いてはキット不滿足てあらねばならぬと思はるゝ理由がある、然るに實際の事は加藤君の不滿足に却つて

道理あることを證した、加藤君にいはせればそれ見たかといふ樣に英國には反對が起つた。起つたからとて逃げられもせぬ、乘り掛けた船でやつて行く。初から仕舞迄下らない事になつた、いやなハメになつたといふ事が加藤君の頭からのけられまい、それ故必ず不得意であらうと思ふ。實をいへば内田君には祝詞を言つてやるべきだけれど加藤君に對しては御悔みを言つてやるべきかも知れぬと思ふ。

併し外國に駐在する國の代表者といふものは、必ずしも本國政府と意見の一致は望めぬ、或る場合には衝突がある、内に居る者ですら衝突があるのだから、況して電信、郵便では意見の一致點は求められるものでない、ていや／＼ながらやる事もあらう、其際に厭とて罷める譯にはいかぬ、が加藤君の性行としては、いやはいやと判然言ひ切つて仕舞つて去るが癖なのだが、此度ばかりは穩かに、向ふの言ふ通り此方の訓令通りを其儘にやつた、中繼役を勉めた、大分我慢をやつた、私は此我慢を大に祝する、即ち今日の不得意が他日の大得意の要素となり、政治家としての地位が一段上ることと思ふ、之に反して内田君は、少し小供らしくないかと思はれる、若し得意で居る事が實際ありとすればだ。但し書の削除は皆喜ぶ、けれども其削除には別に公文が與へられて居る、即ち形ばかりの削除で事實は削除にならぬ。内田君は條約文に省けて居ればそれで先づ宜しとするんだらう。如何にも形丈でも省けて居るのは省けて居ぬよりはよいが、それで日本人は難有がるか如何かといふ事を考へねばならぬ、多少でも非難の點があればそれだけ同君の功績にケチが付くのだ、それを御承知なくては今日の得意が或は他日の不得意となるも知れぬ。けれども内田君も氣前よく諦める時には諦めの早い人だから、日本で惹起した批評の要點を彼方で聞いたなら、多分いつ迄も得意では居るまい、男爵が子爵になる夢を見たとすれば其夢を覺ますやも知れぬ、夢が覺めれば根が悧巧な人だから、得意の爲に小供らしい短慮を暴露せずに濟むやも知れぬ。

二人共日本の外交官中では餘程有力の人に相違ない、二人が一番難局に當り、そして兎に角旨く切抜けたのは大功と言はねばならぬ、加藤君は二度も大臣となつたんだ、内田君は亦後來多分外務大臣となる人だらう、處で外務大臣とすればどちらが宜しいか、加藤君が此度大分我慢した所を見て益々有望に思ふが、しかし二度まで外務大臣となつた人物だから、今度は得意の大藏大臣としてやりたい、それが當人の爲にも亦國家の爲にもどうらにも宜からうと思ふ。だから此處では内田君の方を外務大臣として歡迎する事にして置からう。

△加藤の俗、非俗

是無二齋主人

小村(壽太郎)が曾て加藤を評した事がある、伊藤内閣に加藤が外務大臣として入つた時の事で、人あり、加藤と伊藤との關係如何と聞いたら、小村の曰く、俗物と俗物との寄合だから好からうと、是は黒頭巾の書いたものに見えたが、此事は僕も傳聞して居るから褒賛をしてもよいと思ふ。これといふのも小村は手腕ある人だが他人の毀譽褒貶などを氣にせぬといふ質、其身體からが瘦せがれた一種妙な樣子で仙骨を帶びてる人だからだ。小村は公使として外國へ行くにも、妻君を伴はぬ、尤も佛國の公使などには妻君を伴はぬ者もあるけれど、先づ外交官としては妻君同伴なのが普通だ。それは財政上かなんどの都合によつては連れて行かぬ事もあらうが先づ連れるが普通、其爲に妻帶費といふものが定めてある。併し連れなければ支給されぬから連れなければ其金が餘るといふのではない。支那へも如何だつたか連れて行かぬ樣に思ふ。今は外交官は交際官だ、そして交際の役目は妻君だ、外交と交際とは離る可からざるものだから從つて妻君は連れるが便利なのだ、最もそれには妻君の素養、素質もある事だらうけれど、先づ一般に型に嵌つた樣に連れ行くのは無理からぬ事だ、素養素質の向かぬといふ點もある

か知らぬが、兎に角日本の外交官は盡く妻君同伴てあるのに彼のみ獨り左樣てないのは一寸目に立つ。小村は何處か飄然とした趣がある。西洋流の外交官ではなくて東洋豪傑といふ風がある。

之に反して加藤は西洋風にやる、英國風が十分に染み込んて居て一見西洋紳士だ、それに妻君が金持だから金をば勝手に遣ふ。此邊が早や小村の目には俗物と見えやう、即ち金持から娘を貰ふなどいふことからいけぬとするだらう。然らば加藤の小村評は如何か、小村の亞米利加へ行く前の事だが、彼は評して曰く、丸て頭がアジアチックだから駄目だと。

が加藤の側に居るものに加藤を言はすと斯ういふ。俗人どころか、世の中の事に通ぜぬ人、俗人らしからぬこと夥多しい、丸て世間が分つて得ない、書物は分る、書物は初中終讀んて居る。て人間が只書物からのみ教育されて社會からの實物教育は一向受けて居らぬ、そして書物に對する信仰は非常にある代りに人に對する信仰は薩張りない、人の意見を用ゐぬこと夥多しい、人には能く說法する、其態度が我は斯う思ふがといふんてはなく、貴樣は斯ういふがそれは斯うだといふ風にいふと。

加藤は是迄追手に帆を揚げて來て居る、大學を出ると直ぐ三菱に近づき、彼樣いふよい處から妻君を貰つて、其勢力て世に漕ぎ出て居る、浮世の浪風に洒されて居ぬ、岩崎の勢力がなかつたなら如何なるかの試驗をして居らぬから世間の事情を知る資格がない、只順潮を追つてすーと進んて居る。セームクラスの者を見廻すと皆其進み方が自分に比べれば遲々として居る、すると何だか他の者が皆自分よりは馬鹿げて見える、つまり自分の立身出世を位置境遇によるものとせずに、自分が只偉い爲だとばかり思ふ。東京日々の經營時代がよい證據だ、俗てない事夥多しいものを出したから賣れぬ事も夥多しく、月々損をする、それを三菱から殘らず埋めて貰つて居たといふ、彼は又書物の上て兎に角人を愛すべき所以を知つて居る、て折々部下の社員を連れて鳥料理の蒔鶴へ行き、書生流に膝を交へて

語りかはす迄はよいが、毎度壽鶴の女中に五十錢やる、それもまだよいとして、其態度が如何にも乃公は前大臣である、そして岩崎の聟である、それ故に汝等に五十錢を賜ふといふ堂々たるものだ。即ち彼は大枚五十錢と心得て餘程の奮發の氣で居るんだが、何くんぞ知らん時勢は變つて居て、今では一圓位が通例、少し氣張るものは二三圓も與れる、それをまだ大學時代に豊國へ行つて十錢も抛つて威張つた位の事を考へて居るのだ、彼は書生生活より一躍風雲に乘じて急速の出世をしたものだから其間の世態をトンと知らぬ、即ち二十錢時代、三十錢時代、四十錢時代とあつて遂に今日の一圓時代に至つた事を薩張御存じない。感覺の鋭敏な現代人の目からは如何に彼が世間と沒交渉であるかを此一事によつても容易に知らう。

彼が鐵道國有問題で内閣を去つたときに世間が言つた、九州鐵道に岩崎の炭礦があるから、其問題には利害の關係が尠くない、で岩崎擁護の爲に抗議し遂に大臣の椅子を迄抛つたと、之を聞いた彼は傲然としていふには、世間の馬鹿も甚しい、予は一岩崎の爲に進退するものでないと。それも左樣に違ひない、矢張書物の爲なのだ、彼の讀む書物は權利義務の書物だ、特に英國に居たから自然其感化で權利一點張りの風がある、で一度民間に許した權利を政府で又取り上げるのは既得權の蹂躪だ、と考へた事が彼の確乎たる胸底の信念であつたらう。それが日本ではいかぬとか、又自分の將來の立場は如何といふ事を考へるなどはしない、即ち三菱に捉はれずして書物に捉はれたのだ、彼は八方に目を配ることをせなくて矢張り自分が一番偉いとのみ思ふ。それで自分の樣な賢明な者の説は昧者には分らぬ。此樣な處には自分は適せぬから罷めると斯樣來る、だから俗物といつても小村からして見ればの事て、一、二、三位は左樣いはるべき點があらうが、加藤側からいへば世間の事は分らず、そして自ら用ゐて薩張り人の事は聽かぬ男だといはれる、日報社に居た時なども初中終講釋ばかりして居た相だね、が記憶が善く頭腦明快、判斷が早い、是が彼の長所だ、けれども英國紳

士風を學んで如何にも人に無愛相なのでいけぬ。頭のよいのは他人に比べれば其譯だ、貧すれば鈍するて、功名心に追はれたり、生活に追はれたりすると、如何に天性一癖の頭を持つて居るものでも腦力を遣ひきつて多少腐らして仕舞う。然るに彼は富豪の聟として交際費には困らず、名譽心も大して起らず、心はいつも冷てあるから、常に胸天の玲瓏を保つことが出來る。即ち境遇の然らしむる處だと彼の周圍のものはいつて居る。

法學博士 小林丑三郎監修

春季號 四月廿五日發行

四六二倍判凡三百頁

時事集錄

政治 外交 財政 經濟 教育 法令

定價金五十錢郵税四錢

本誌ハ歐米雜誌界ノ例ニ倣ヒ年四回發行スルモノニシテ三ケ月ヲ一季トシ各季間ニ於ケル政治、教育、財政、經濟、法令ニ關スル總テノ事項ヲ集錄シ一ニハ以テ多忙ナル官公署學者政治家操觚者實業家等ニ必要ナル資料ヲ供シ一ニハ以テ社會ノ有ラユル階級ニ向テ内外一般ノ事報統計法令等ニ關スル智識ヲ普及セントス

蓋シ輓近國運ノ發展ト共ニ政治經濟何レモ錯綜ヲ極メサルハナシ法令ハ雨ノ如ク下リ統計亦日ニ益々滋キヲ見ル紛糾ノ世ニ處シ職ヲ行ヒ業ヲ營マントスル者殊ニ官公署諸會社ノ實務家及事業家ノ如キ單ニ自家直近ノ事況ニノミ通曉スルヲ以テ足レリトスヘカラス能ク內外諸般ノ政況事變ヲ知リ財政經濟ノ大勢ニ通シ最近ノ法令統計ニ據リテ事ヲ決シ業ヲ行フヘキナリ然ルニ其實際外觀ヲ觀レハ各自專從ノ事務ニ齷齪シ外他ノ報告統計法令等ヲ記憶ニ整理スルノ途ナク日々見聞スル新聞雜誌上ノ事項モ漫讀過眼忽チニ遺忘シ去ルモノ比々皆然リトス國家公共團體ノ經理ヲ以テ任トスル政治家及行政官法令ノ適用ヲ職トスル司法官乃至社會ノ木鐸タル操觚者ノ如キハ一々官報ヲ繙リ廢紙ヲ檢シテ僅カニ不便ヲ忍フト雖モ他ノ多數ナル學者、著述家、實務家等ニアリテハ此ノ如キヲ得ス事毎ニ急遽諸般ノ調査ヲ要シ散亂セル記憶ヲ追フテ往時ノ新聞官報雜誌等ヲ集纂スルモ雜然タル資料徒ラニ坐邊ニ堆積シテ要項ヲ把取スルニ途ナク輕々事ヲ謬シ業ヲ誤マルノ已ムナキニ至ルナリ世ニ年報年鑑彙報等ト稱スルモノアリテ諸般ノ報告統計及法令ヲ集錄スト雖モ多クハ局部專門ノ事項ニ適シ一般ノ用ニ適セス其遇マ然ラサルモノモ年後又ハ數年後ノ編纂ニ係リ實務ノ常用ニ對シ應急ノ資料ヲ供スルニ足ラス最モ實際家ノ遺憾トスル所タルヲ見ル是レ吾人カ茲ニ本誌ヲ發行シテ此不便ヲ補ハントスル所以ナリ現ニ英國ニ Quarterly Review アリ獨逸ニ Vierteljahrsschrift アリ佛國ニ各種ノ政治經濟法令ニ關スル四季ノ Revue アリ共ニ本誌ト同一ノ目的内容ヲ有スルモノニシテ學者實際家ノ利便ナル絕好資料トシテ爭ヒ求ムル所ナリ吾人ノ微力直チニ本誌ヲシテ此ノ如キ有力ノモノト爲シ得ルヤ否ヤハ測ルベカラザルモ勉メテ已マスンハ或ハ其壘ヲ摩スル難キニ非サランヲ信ス希クハ天下士人諸君吾人ノ此擧ヲ贊襄シ本誌ヲシテ其目的ヲ達セシメラレナハ啻ニ吾人ノ幸慶ノミニ止マラサルナリ

明治大學 發行
同文館 發賣
東京神田表神保町
振替東京一三五番

男爵澁澤榮一氏序
文學士北村台水君著

世界富豪傳

本書は趣味深く波瀾多き世界的富豪の生涯と其成功の秘訣とを精細に叙述せるもの也。皆これ一代の奇傑縱横書策して天下の富を掌中に集む。彼等が奮闘力行の實驗談は讀者をして案を叩いて奮起せしむ。加ふるに文章は極めて平易流暢、何人もこれに依つて致富の徑路を窺知するを得べし。

金剛石王セシルローズ
鐵工王カアネギー
トラスト王モルガン
鐵道王ハンチントン
雜貨商王ワナメーカー
石油王ロツクフエラー
航業王サダーランド
重砲王アームストロング
螺釘王チエンバーレン
石鹼王リバー
獸肉王アーモーア
銅山王クラーク
街道王ヤーケス
新鋼鐵王シユワツプ
新鐵王ヒル
通信王ロイテル
鋼砲王クルツプ
海上王岩崎彌太郎

總クロース美本紙數四百十六頁
正價壹圓廿錢
郵稅十二錢

伯爵大隈重信氏序
文學士守屋貫教[illegible]松本雲舟君共著

グラツドストーン傳

ジヨン、モオレイの具翁傳は近代の大著述也本書は實に該著に據つて具翁の全生涯を詳述せり。其の崇高なる人格、壯大なる雄辯、偉大なる事業は勿論、英國政界の活歴史は躍如として紙上に舞ふ。我國政界の混濁せる今日、本書は政治家座右の參考書、青年机上の修養書たると同時に全國民必讀の書たらずんばあらず。

總クロース美製本、函入
菊判全一冊
紙數五百貳十頁
正價金壹圓五拾錢
郵稅金十六錢

(中付の二)

▲發行所 東京神田區仲猿樂町 振替口座貳〇〇參番 昭倫社▲

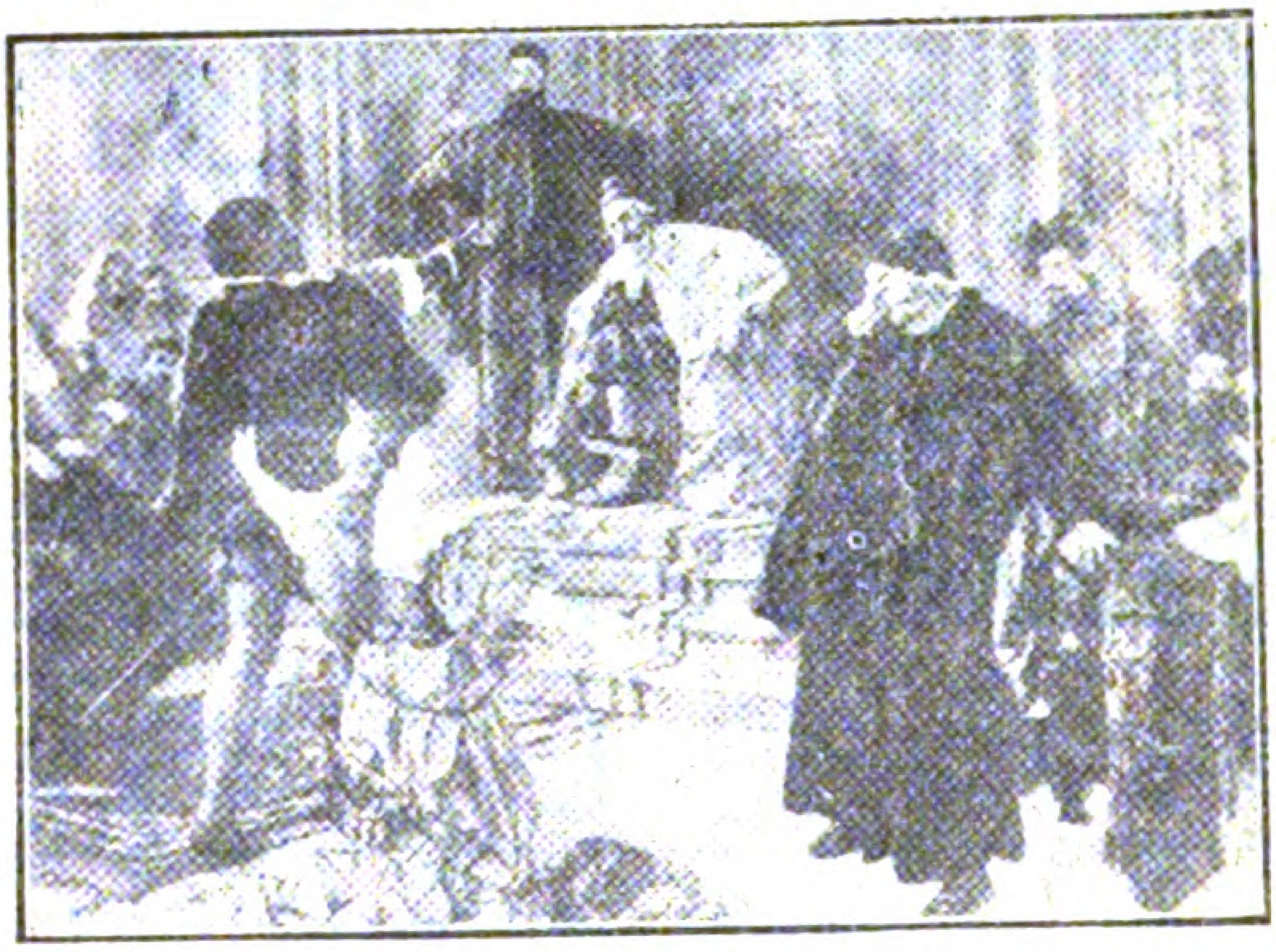
此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

新刊

沙翁傑作集第三

オセロー

文學博士 坪内逍遙譯



(オセロー三色版口繪)

沙翁の作三十七篇、其中特に家庭悲劇と稱すべきは此一作あるのみ、而して其脚色、事件、人物の極めて自然にして近代的なる、其最大傑作中にも比類あるを見ず、譯者また特に此點に心を用ひて譯筆に別樣の工夫を凝らし、多く現代語調を加味して譯出したれば、流麗にして明暢、殆ど一の創作を讀むが如し、而も一字一語をだに苟もせず、一々語を逐うて譯出したれば髣髴原作に接すると一般、若し沙翁を研究せんとする者、之を參考の用に供せんか簡明靈活、之に優るの好註釋書はあるべからず

正價 各卷正價金壹圓卅五錢 郵稅何れも金八錢宛

洋裝天金高雅頗美本 用紙舶來印刷鮮明 三色版木版密畫入

發兌 東京牛込早稻田 早稻田大學出版部 振替一一三番

東京神田裏神保町 合資會社冨山房 振替五〇一番

沙翁傑作集一、二

六版

ハムレツト

好評嘖々の本書は帝國劇場五月狂言として登場決定せり好劇家は豫め本書を見ざるべからず

三版

ロミオとジユリエツト

青春燃ゆるが如き男女の高潔なる戀愛悲劇として發行以來非常の好評を博せるものは本書なり

(中付の三)

信用なき店舖及卑猥なる賣品の廣告揭載は謝絕す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

百鳥競囀千花鬪妍

文藝倶樂部

五月一日發行 第七號 正價廿五錢 郵税二錢五厘

■小説 漂 馬場孤蝶

■小説 侮辱 北島春石

■喜劇 神經質 礫川魔王

■講談 出世の茶碗 眞龍齋貞水

■劇評 演藝當座帳 岡鬼太郎

○吉原の大火と消防隊 卯月子

○妓夫太郎修行 春霞

○感百端 贋阿彌

○勸進帳研究 柿山伏

○東京の水道 樵水生

○女形くらべ 曉紅

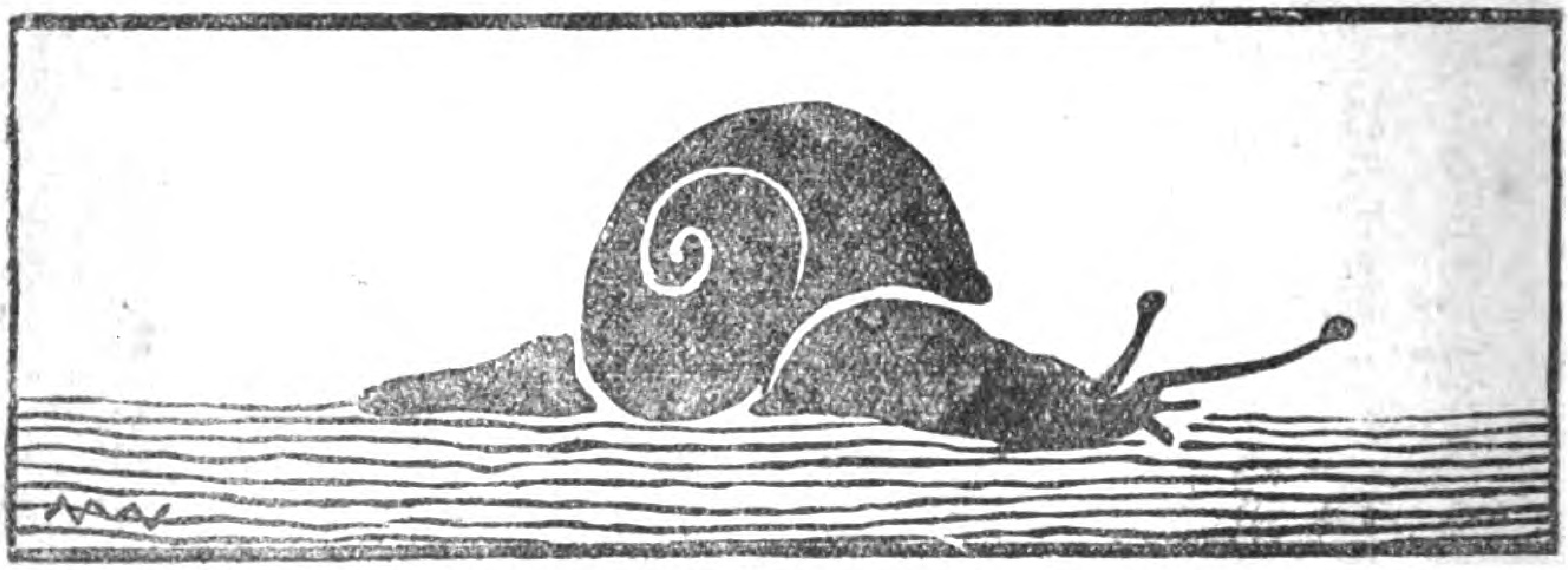
○劇界太平記 孔雀船

○食通物語 竹山人

東京 博文館 本町

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絕す

(中付の四)



死後

正宗白鳥

潮は徐ろに滿ちてゐる。涼しい風はそよ〳〵と吹いてゐる。桐の青葉は屋根の上に影を落して、その影はゆらめいてゐる。軒先には二三の蜂が輕く飛んでゐたが、その一つが唸りながら部屋の中へ舞込んで、障子に身を寄せてバサ〳〵と音をさせた。良吉は醒際の耳にその音を聞付けて目を醒して、黄ろい齒を出して大きな欠伸をした。そして暫らく無心に蜂の行衞を追うてゐた。午睡の前に片隅の天神机で手紙を書いてゐた妹の姿は見えず、階下もひつそりしてゐた。

良吉はやう〳〵に身を起して、解けかゝつた絞りの兵兒帶を締直して、植物採集罐を肩に掛けて階下へ下りた。朝の涼しい間にと思つてゐながら、

何時も愚圖々々しては、日盛りになつてノコノコ出掛けるのである。帽子は被らず、骨張つた黒い素足に小さい藁草履を引掛けて、雜草に蔽はれた小徑を上つた。絕えず右左に目を付けたが、珍らしい草花は見つからなかつた。白い花をつけた幽靈草を一つだけ手折つて罐の中へ入れた。そして松の木蔭に腰を卸して豆粒のやうな目を張つて四方を眺めた。山は禿げて所々赤土が崩れてゐる。目の下の寺の庭に杉が一本高く聳えてゐるばかりて、外には高い樹は見えない。樫と松と椢と柿とそして竹籔の外に目に付く樹木はなかつた。作州の北の果、伯耆境ひの深山とは比べ者にならなかつた。猿が鳴き鷲が飛び、猪や兎の隱れてゐる山里を思出すと、同じ縣下てかうも異ふ者かと思はれた。て、彼地て習ひ覺えて日々の樂みにしてゐた植物採集も、この故鄕てはさして興もないが、日に一度はブリキ罐を肩にして、かうして一人野山を歩かないでは氣が濟まなかつた。

目の下の山の裾には幾列にもなつた石碑が一際鮮明に光つて、白い犬が白い石と石との間を何か嗅ぎながら歩いてゐる。鳶は澄切つた空に輪を描きながら海の方へ飛んでゐる。良吉は二三度口笛を吹きなどしてゐたが、さも起上るのが懶いやうにブリキ罐を枕に身を横へて、靑空を見上げた。松の葉越しに光が顏の上にチラついた。

「ほら、良兄さんは此處に居つた」と、暫くして聲がして、弟の竹夫と甥の君藏とが側に立つた。「此處に來とるとが、私にはちやんと分つとつた。今御飯にするから呼んで來いとお母さんが云ふから、直ぐ此處へ來たんぢや」と、竹夫は自慢さうに云つた。君藏は叔父を見つけたので、悅しさうにその裾にまつは

り付いた。

「まだ飯は欲しうないなあ」と、良吉は大儀さうに云ひながら、ブリキの罐を肩にかけて、一緒にのろのろ山を下りた。君藏は後からその罐を打鳴しながら、「何が入つてるの」と繰返し〳〵訊いた。

「この中には化物が入つてる」と、良吉は笑ひながら云つた。

「化物が入つとるんかな。開けて見せとくれよ」と、君藏は片手を罐に掛けた。

「開けると怖いから開けられん。出られんやうに、ちやんとこの中へ封じて入れとるんだから」

「見せとくれよ。怖くてもえゝから。よう、叔父さん」

「開けると、君藏なんか一攫みに攫まれて、山の奥へ連れ行かれるぜ。作州の山の中で子供を浚つて仕方がなかつたのを、叔父さんが攫まへてこの中へ入れたんぢや」

「そいでどんな顔をしとるの。開けて見せとくれよ」君藏は首を傾けて罐のまはりを見詰めた。

「盆が來たら見せてやらう。精靈樣と一緒に海へ流すんだから」

晝餐の濟んだ頃、八角時計は二時を打つた。良吉は皆んなに遲れて箸を置いて、膨れた腹をさすり〳〵二階へ上つた。妹のお作の鳴らしてゐる手風琴の音を聞きながら、又も眠氣さしてゐたが、ふと階子段の下から父の呼ぶ聲が聞えた。「良」々と二度三度太い聲がした。良吉は妹に注意されながらも返事をしなかつたが、それでも不承々々に階下へ下りた。父は風通しのよい階子段の側に胡坐を掻いて厚い唇を

反して煙草を吸つてゐる。
「まあ其處へ坐れ」と、突立つた良吉を見上げながら、頤で差圖した。良吉は默つて其處に畏まつた。膝頭がよく隠れてはゐなかつた。
「それでお前はよう考へたかい。どうしやうと思ふ」と、父は力を入れて訊いた。
「私はどうでもえゝ」
「どうでもえゝぢや困る。お前ももう二十四だから、何とか先々の量見を極めにやならん。何時までも十二三圓の月給取りでは仕方がないぢやないか。教師なら教師で、正教員の資格を取るとか何とかしなくちや」
「さう思ふこともあるけれど、とても正教員の試驗を受けられませんから。何度試驗を受けても合格せんに極つとるから、受けるだけ損だと思ひます」
「そんな意氣地のないことでどうする。勉强すりや、高が小學校の正敎員の試驗ぐらゐに及第せん譯はない。濱田の種さんはお前より後で學校を出たのに一年岡山で勉强したゞけて、立派に合格して二十圓から月給を取つとる。それにお前は師範でも一年關西中學で二年、三年の餘も學問しといて、何時人もに負けとつちや恥かしいぢやないか」。
父は落着いた聲でさう云ひながら、短かい眉を顰めて良吉の顔を見詰めた。そして、心に適ふやうな返事を望んでゐたが、良吉は目を下に向けて默つてゐた。二階からは手風琴の音につれて、「靑葉繁れる」

の唄が、涼しい風に送られて柔かに聞えて來た。

「何とか返事をせい」と、父は手強く云つて、「教師が厭やなら厭て、自分の望みの仕事もあるだらう。實は此間も郵便局の坂谷が止めるから、此家で引次いでやつて吳れんかと云ふ話もあつたんぢや。お前がやる氣ならその方の話をつけてもえゝ。家に居れば食費も入らんし、仕事の傍ら家の手助けも出來るんぢやから、」

「郵便局なんか面倒臭いから、私には不適當でせう」

良吉は顏を上げてさう云つてケロリとしてゐた。心は手風琴の音に惹かれて、半ば夢心地になつた。そして父の平たい顏は煩はしく夢を亂した。

「面倒臭いからちうて、人間は何もせいで居られるものぢやない。お前のやうな才のない者は初めから百姓にでもなればよかつたんぢやが、今更それも出來まいから、手足を働かさん仕事て、それ相應に先の當ての付く事を考へにやならん。」

「ヴアイオリンでも習ひたいと思ふんだけど。岡山では人に借りて稽古した事もあるんだけど、樂器が高いから買うとは思つても買へません。」

父は煙管を震はせた。わが子の意外な不量見な言葉を憤つたが、口に出して罵るにも張合ひのないやうな氣がして、「まあよう考へて見い。休暇が濟むまでに何とか極りをつければえゝから」と云つて、煙管を投出して立上つて、小庭の方へ行つた。

良吉はやう〲息を吹返して、二階へ上つた。手欄に身を寄せて、「もつと彈いて見んか」と、妹を促した、が、妹は「いや〲」と首を振つた。

「おれが歌ふから彈けいよ」

「だつて、もう彈きたうないもの」

「ぢや、おれが彈くから、お前が歌うて見い」

「あかんべー〲」と、妹は指先で目を裏返して、手風琴を抱へて急いで階下へ下りた。

良吉はニヤリと笑つて、「お轉婆だなあ」と獨言を云つた。そして足拍子を取りながら、小聲で、「春高樓の花の宴、めぐる盃影さして……」と唄出した。顔に似合はず唄の聲は可愛らしかつた。「故郷の空」や「夕風吹きて」を續けて唄つてゐたが、何時か心が唄から離れて、父の言葉が氣になり出した。歸省しなければよかつたけれど、かうして家へ歸つてゐれば、毎日々々父から將來の事を詰問されるに違ひない。去年は曖昧にしといて逃げたけれど、今年はさうはなるまい。休暇中に自分の身の處置を煩く極められるに極まつてゐる。それが厭だ。山奥の小さい分教場で教師をしてゐれば、誰も傍から苦情を云ふ者もないし、一人暮しには不自由はしない。それで自分は滿足してゐるのに、父や兄が睡い者を搖起すやうに餘計な小言を云ひたがつて仕方がない。

「あゝ煩い」と、良吉は心の中で叫んで、暫らく屈托してゐた。

直ぐ右手の白壁の穀物倉の軒には雀が巣を組んでゐて、今親鳥が子鳥に餌を食ませてゐる。子鳥が忙

しく鳴いてゐる。良吉の目はふとその方へ向へた。

夕凪で晝間よりも二階は暑苦しかつた。潮は岸を離れて、黑い潟があらはれた。蚊遣りの煙は階下から舞上つた。風呂へ呼下されて、良吉は烏の行水の樣に身體を濕らせたばかりで出た。父は顔に汗を浮せながら釜の下を焚いてゐる。母はバタ／＼動いてる魚の頭を壓えてその鱗を剝いてゐる。燻つた軒先には蚊柱が立つてゐる。貞吉は濡れた踵に土のつくのも構はず、弟の草履を穿いて菜園の方へ行つた。そして、茄子と胡瓜とを手切つて、爪先でそれを捲りなどして、夕食時を待つてゐた。

夕飯の座は一日中で殊に賑かだ。長兄の退一、東京から歸つた慶作、それに良吉と竹夫と、今年女學校へ入つたお作と、五人の兄弟も皆んな揃つて、十人からの家族が釣ランプの下に居並んだ。良吉は一座の中で一番言葉少なで專念に食事を取つた。食事が濟むと、慶作も竹夫もお作も、何時ものやうに隣に別居してゐる長兄の家へ行つた。その北向きの四疊半へは山から涼しい風を吹下してゐる。良吉は一番後から薄暗い道を横切り小溝を越えて其處へ行つた。

「叔父さん化物を見せてお呉れよ」と、門口でお作に脊負はれてゐる君藏が身體をゆすぶりながら手を伸した。

「戸棚の中へ仕舞つとるから今は出せん。」良吉は敎室にゐる時のやうな生眞面目な口調で云つて、薄暗い部屋を通つて、明るい四疊半へ行つた。退一は胡坐を搔き浴衣の袖をまくつて、團扇の柄をまはして

ゐる。慶作は肱枕て寢そべつて白い脛を出してゐる。二人は話込んでゐたが、良吉が入つて來て棒立ちになつてゐるのを見ると、

「良も其處へ坐れよ」と、退一は尖つた目付をした。良吉は無言て緣側の閾に斜に蹲まつた。

「良ももつと活潑にならにや駄目だぜ」と、慶作はキビ〳〵した口調て云つて、細い白い顔に淋しい笑ひを浮べながら、「僕はまた布哇へ行きたくなつた。熱帶の樹木と廣い太洋が見たいなあ。僕は綠色に醉ひたくつて仕方がないが、どうも日本ても飽足らんよ。殊にこの邊は駄目だ。天然の色彩が如何にも貧弱極るんだらう」と、退一に向つて、前の話を續けた。

「色彩ばかりぢやない。何だつて貧乏臭いさ。おれなぞは天然の色彩なんかどうてもいゝから、もつと豐かに暮したいな。先月のやうに收支を計算して只の五十錢しか餘らないやうぢや心細いからね。資本さへありや、もつと手を廣げて、うんと儲けんるだが。確かに甘く行く目度はあつても、親爺が危かしがつて何だのかだのと文句ばかり云つて、資本を出して呉れんから駄目だ。」

と、退一はさも忌々しさうに云つて、自分の關係してゐる輸出向の海產物問屋の現狀を話し、その發展策をも洩らした。海鼠腸だつて東京へ直かに輸送するやうにすると利益が多いんだが、今はこの土地で製造した者まで尾州の產物になつてしまうんだから馬鹿々々しい。もつと大規模にやつて京阪地方へ持つて出るといゝんだが、今は皆昔のまゝでやつてるんだから智慧がない。

「だから一つ内所て借金してゞも思切つたことをやつて見やうかと思つてる。うんと儲けて親爺に腕前

を見せてやりたいよ。親爺は僅かな財産でも自分でなくちや造れないやうに思つて、下らん自慢してるんだから」と、退一は引締つた口のあたりに力を籠めた。

「貴樣も仕事をやるんなら今の中だぜ。歳を取ると保守的になつて何も出來やしないからな。資本が入るんなら親爺からどし／＼取るさ、僕なんか貰へても貰へなくても、強請むだけ強請むんだ。よ」

「貴樣は横着だから……此間も親爺は横綴の帳面を出して、皆なの使つた金を計算しとつたが、貴樣は外の者の三倍も四倍も絞取つてる。何時の間にこんなに出したんだらうつて、親爺は後悔しとつたぜ。貴樣もあまり浪費せんやうに注意せいよ」

「浪費ぢやないよ。それだけの者はちやんと入るんだものと、慶作は愛嬌を湛へて、「繪を書くには繪の具も入るだらう、旅行するには旅費も入るだらう。僕の使ふ金は一錢一厘も無意味ぢやないよ」

「さう云へばさうだが、親爺の目から見りや、一圓の資本で五十錢の仕事をしてちや算盤が合はんのだぜ」

　退一はこの點では半ば父の味方をしたいやうな氣にもなつた。二人の弟が一人前の年齡になつてゐながら、將來の極りのつかないらしいのが氣遣はしくないでもなかつた。父の死後の所分なども頭に燦いた。

「構ふものか。僕あそんな事構はんでやるつもりだ」と、慶作は威勢よく云つた。

「自分一人立ちの覺悟さへ付きあ、それでもいいんだけど」と、退一は強いて反對はしなかつたが、「しか

し、今年のやうに皆んなの揃つたことはないんだから、極める者はちやんと極めとく方がいゝ。誰れの領分はこれだけと、後て文句のないやうにしとかなければ、面倒な事が出來んとも限らんからね」

「なあに、僕は家の財産について文句なんか云やあしない。貴樣が勝手にすりやいゝ。それに親爺はまだ容易に死にやしない。僕等が白髮になるまで屹度親爺は生きとるよ」

「だけど伯母のやうにばつたり參ることもあるから、壽命は分りやしないね。親爺も伯母の死んでからは自分の身體を氣づかつてるらしいよ。しかしそれならそれで後々の事も些とは相談ぐらゐしてもよさゝうだが、おれにだつて一言も云はんのだぜ。おれの方から云ふのも厭だけれど、默つても居れんから、時々謎を掛けると、お極りの自慢が出るばかりて、薩張り埒が開かんのだ。これまで苦勞したからつて、それを自慢したつて、何にもなりやしない。」

「親爺は棺桶の中へ自分の財産を入れて、あの世へ持つて行きたいんだよ」と氣輕に云つて、慶作は仰向けになつて、天井から垂れてゐる黃ろい藥袋を見て、三年前に歸省した時にも此處に釣下つてゐたと思ひながら、「それで財産は一體いくらあるんだい、貴樣にや略々分つてるだらう」。

「分らんね」と、退一は曖昧に云つた。そして腹の中では見當はつけながら、突如に良吉に向つて、「良はそんな者を當てにして愚圖々々してるんぢやないか。」と、慳貪に云つた。慶作に對するのとは、調子も態度も丸て違つてゐた。

良吉は今まで二人の話にもあまり耳を留めず、ぼんやりしてゐたが、ふと振近つて、「僕はそんな者を

嘗てにやせんと答へた。その聲は不斷に似げなく力強かつた。

「さう覺悟しとりやいゝが」と、退一は鼻先で冷笑するやうに云つて、「これで、身内にヤクザな者が一人でもあると、側の者が皆んな迷惑するんだ」

良吉は兄の言葉の意味を感ずる風もなかつた。そして、忍ぶやうにその部屋を出て、自分の二階へ蹄つて、燈火も點けずにぢつとしてゐた。澄んだ空に星が燦めいて、海には松明がちらついてゐる。良吉はやがて、脊伸びをして欠伸をした。だが、まだ寢床に就くには時間が早過ぎた。で、所在なげに七夕に程近い天の川を目で捜しなどしてゐたが、ふと又自分と周圍との事が考へられ出して氣が欝した。若しか父が亡くなつたらば、後はどうするんだらう、自分は兄の目から除物になつてしまうんぢやないだらうかと、此迄ついぞ考へもしなかつた事が、ふと心の奥にちらついた。

二階には部屋一杯の大きな蚊帳を釣つて、良吉とお作と武夫とが並んで寢ることになつてゐて、この蚊帳の中で武夫はお作から小說の話を聞かされたり、良吉から雪國の話を聞かされたりしてゐる。

翌朝は珍らしく竹夫が眞先に起きて、蚊帳から飛出した。良吉は何時ものやうに、寢た時のまゝで大人しく蒲團を着てゐたが、眠の融けて目が醒めると、寢返り打つて四邊を見た。雨戸の締つたまゝの部屋も明るくなつて、朝風は枕許に通うて吸ふ息も快く凉しかつた。お作は夜具を取外して、寢卷も寬く、白い胸をもちら〳〵出して、まだ心地よげに眠つてゐる。

良吉は初めてかうした妹の朝寢姿を見た。「よく寢る奴だ」、と口に出したが、敢て呼起しはせず、暫くして、蚊帳を藻繰出て、自分で雨戸を繰開けた。朝風は流れるやうに蚊帳の中まで入つた。朝日は夜具の上に縞をなして光つた。お作は身動ぎしながら深い息を吐いたが、やがて目を細く開けて、

「良さんはもう起きとるの、今日はどうしてさう早う起きたの」と、不思議さうに云つて、起きて雨戸開けの手傳ひをしながら、「良さんは滅多に朝の新鮮な空氣を吸ふたことはないでせう。だから、何時もぼんやりしとつて、元氣がないんぢやぞな。」と云つた。

「阿呆云ふな。おれは作州に居る時は、寒中にだつて、早う起きて、自分で火を焚したりしとつたんぢやぞ。この身體(からだ)は寒い風で鍛へとるんぢや」と、握拳で力んで見せて、「海邊の人間よりや、山間の人間の方が餘程精神が鍛練されてらあ」

良吉は妹が掃除する側で、手製の箱の中から蔭干しにした高山植物を取出して、机の上に並べた。どれも皆手當り次第集めた物で、その植物の名前は殆んど一つも知つてゐなかつた。また知らうともしなかつたのである。だが、それ〴〵に大切な寶物のやうな氣がした。破れてぼろ〴〵になりかゝつた一枚の葉も棄てるには惜しかつた。そして、昨日取つて來た幽靈草をも箱の中に收めた。

「一枚どれかお呉れよ、本の中へ挿むんだから」と、お作が上から覗込んで云つたが、良吉は首を振つて、

「作などにやれる者か。茨て足を切られたり手を擦りむいたりして採集したんだもの。一枚の葉だつて疎かになりやせん。」

「そないに惜いんなら貰はいてもえゝ。木の葉の一枚や二枚惜んて何にするんぢやらう。」それを皆な貰らうたつて、一錢の錢も出す者はありやせん」と、お作は笑つて、「良さんの吝ん坊〳〵」と云ひながら階下へ下りた。

良吉は一枚々々植物の整理をして元のやうに箱に收めた。今日こそ涼しい間に山へ行かうと思ひながら、朝餐を食べると、それが大儀になつて、暫らく廣い家の中を彼方此方行きつ戻りつしてゐた。

父は矢立を腰に差し、短い薄い絽の羽織を着て、役場て開かれる村會へ出掛けた。慶作は武夫や君藏を連れて大きな松に取圍まれた八幡神社へ繪を書きに行つた。退一は浴衣に細い紐を締めて、問屋へ出て行つた。下女を相手に汚れ物を仕末してゐる母の喧しい笑聲のみが、家の中に漂うた。良吉は暑い日の照つてゐる戸外へ、家の者がそれ〳〵に出て行くのを見て、自分も一日中の一仕事と、懶い心に鞭つて、昨日とは違つた道から山を上つた。芋畑を越え黍畝を通り、木蔭がなくて日の照りつける道を汗を垂らして喘いて上つた、昔長壽を保つた村の老夫婦が、柴刈り草刈りに來て憩うたと傳へられる一對の「爺嫗石」まて來たが、得物は一つもなかつた。て、彼れは爺石に腰を掛けて憩ふた。白い薄い雲の向うには小豆島や屋島が微見えた。帆を掛けた舟、帆のない舟が風のない海に怠く浮いてゐる。良吉も次第に怠くなつて、身を動かしたくはなかつたが、腰が燒けつくやうになるので、不承々々其處を離れて、來た道を驅下りて、藪の小蔭の泉て乾いた口を濕した。泉の側には石地藏が安置されてあつて、飲用水を汲みに來た村の者の浴せかける柄杓の水て、涼しさうに濕れてゐる。その前には藁蘂て縛つた莖の細い

草花が供へられてゐる。良吉の目は直ぐにその薄黄い花に注がれた。そして二三本形のよさゝうなのを引抜いて採集罐へ収めた。

これで今日の課業も無駄骨折りにならなかつたやうに思はれた。

歸省後十日ばかり、かうして日を送つた。夜毎の二人の兄の凉みがてらの話には、何時も家の前途、父の死後の處分が一言でも二言でも出ないでは濟まなかつた。退一は良吉までも呼寄せて、自分だけで極めた處分法を命令的に申渡しなどした。良吉は何時も煮切らん返事ばかりしては、兄の鋭い言葉に吃驚して、眠から不意に醒めるやうに目を見張るのであつた。

「良」と、七夕の前の朝、父は蚊帳の外に立つて良吉を呼起して、「これから町へ行くから、お前も一緒に連れて行かう。銀行へも用事があるし、佐竹と村上と二三軒寄る所があるんぢや」と云つて、自分で蚊帳の釣手を外して急立てた。

良吉は斷れもしなかつた。で、母の出した糊の利いて肌ざはりの惡い浴衣を着て、父の手渡した風呂敷を抱いて、父と並んで海岸の石ころ道を歩いた。道端の水田は連日の快晴で乾いて、小さい水車を廻してゐる所もあつた。父は毛繻子の重い蝙蝠傘を翳し、子は緣廣の麥藁帽子を被つてゐたが、父の傘は屢々子の帽子に觸れた。

「良は背が高いな」と、父は今氣がついたやうに注意して、「家ではお前が一番高いかも知れんわい」と云

つて微笑した、「男は身體の大きな方がえゝ。身體が大きくて確かりしとれば、どんな仕事をするにも氣力があつてえゝ。お前は腕力も强からうな」

「いゝえ、力はありません」と、良吉は無愛相に答へた。

「しかし、少し力業をすれば力の出來る身體付ぢやぜ。軍人にでもなつとつたらよかつたかも知れん。私も早くさう氣がつけばよかつたが、今更仕方がないし、何か良に適した仕事はないものかと此頃も考へとるんぢや」

「軍人は私は嫌ひぢや」と云つて、良吉は父が更に何を言出すかと氣遣つた。だが、父は職業の事は口にしなかつた。

「どうせ良も一生安氣に暮らせるやうにはしてやる。私もあれだけの子供を育てゝ一生の口扶持に離れんやうにしてやるには隨分骨が折れるんぢやが、しかし、是非それだけの事はしといてやらんと安心は出來ん。これで身體の弱い者や能力の足らん者には、同じ兄弟でも分前の割をようしてやらにやなるまい。どうせ兄弟同士は助け合はにやならんのぢやが。」

父は良吉に云ふともつかず獨言ともつかず、さう云つた。そして二人は別々の考へを抱いて暫らく默つて歩いてゐた。父は手拭で額から首筋の汗を拭ひ／＼したが、良吉は汗のポタ／＼垂れるに任せてゐた。

「私は幾らでもお父さんから田地が貰へれば、それを賣つて、作州で地所を買つて、自分の家も建てと

きたいと思ひます」と、暫くして良吉は不意に心に浮んだことを云つた。

「むん。それは惡い考へでもないが、しかし、地所を買ふには餘程注意してかゝらにやならんぜ。第一何時までも彼所で教師しとる譯にも行くまいし、矢張この土地の田地を良の名義にしても、そのまゝて置いとく方がえゝ。世話は退一か誰れかに頼んどけばよいんだし」

「だけど、私はあの土地では信用されとるんだから、自分で動くまいと思へば、何時までゞも勤めて居られるんです」

「しかし、何時までもあんな所に引込んどるのがえゝか惡いか考へものぢやて」

父は穩かにさう云つたゞけで、強いて難題を持出さなかつた。良吉は初めて父の懷かしさを覺えた。そして、父が田地を分けて呉れるのなら、兄の世話なぞにならないで、一人で山の中に暮らしたいと思つて、急に元氣づいた。

一里の道を歩いて、町を一目に見渡される所へ來ると、高い合歡木が細い葉を垂れてあたりに床しい影をつくつてゐる。父はその影に吸寄せられて木の根に踞つて、兩肌を脫いで扇子で風を入れた。

「私も二里や三里の道は一息で歩けとつたんぢやが、この頃はすぐ足が弱つて、とんと埒が開かん。まだから意氣地がなうなる年齡ぢやないのだが」と、さも心細いやうに云つたが、

「私もまだ目的の半分も達しとらんから、中々樂隱居は出來やせん。もう十年やそこら石に噛りついても生きとらにやならん。」と、勢ひをつけて云ひもした。

目的と云ふて、お父さんの目的はどんな事です」良吉は父に目的があると云ふのを怪しんだ。

「それを聞きたいんかい」と、父は微笑したが、やがて、「私はお前ぐらゐの年齢で親爺に死なれたんだが、その時分にはどうかして木谷の身代に負けん程になりたいと思ふとつた。しかし木谷は才太郎さんの世になつてからあの通り滅茶苦茶になつてお話しにならん。さうする中家の方は木谷の田地を安く買つたのが次第に價が出て、二倍にも三倍にもなるやうになつたから、今度は一つ地内に負けん位になりたいと決心したんぢや。腹の中でさう極めてかゝると、些とも氣が樂ぢやなかつた。しかし私も運の惡い方ぢやなかつたから、一年々々身代が肥りこそすれ痩せはせんだが、何しろ子供が多いのに皆んなが病身で、薬代が入るわ、學資も入るわで、餘程妨害をされたぜ。それに退一も慶作も錢を掛けたばかりで、あの年齢になつて、些とも家の身代の足しにはならんし、皆んな當てが外れてしまうた。子供さへなければ、今時分はどうかかうか、地内の身代に手の屆く位にやなつてゐたらうが」

父はその不肖な子の一人を目の前に見ながら歎息した。良吉は町の方に並んで燃ゆるやうに光つてゐる瓦屋根を見渡しながら、父の所謂目的を解しかねてゐた。そんな事は目的といふ文字に適はないやうに思はれた。

「さあ行かう」と、やがて父は心を變へて立上つた。そして、道々銀行の利子や田地の相場や中國鐵道の株券の配當やについて、細かに敎を垂れた。

「一通りこんな事も覺えとく方がえゝ。金の値打は誰れでも知つてなくちやならんのだから」

「えゝ」と、良吉は謹聽したが、それ程値打のある財産を何時渡して呉れるんだらうかと危まれもした。だが、明らさまにそれを尋ねもされなかつた。

伯母の死んだ前後から、父が自分の身體をいたはり出したことは退一の目についてゐた。食事にも氣をつけ出した。夏になると飯に冷水をぶつ掛けて掻込むのが癖だつたのが、今年は全く止んでしまつた。飯も柔く〳〵と望み出した。少し腹加減が惡いと、直ぐに胃散を飮むやうになつた。

「頑丈な親爺もそろ〳〵箍が緩み出したな」と、退一は獨り腹の中で思つてゐたが、それと共に目に觸れる家の者の色合ひが異つて來出した。弟妹の擧動や、米麥の上り高などが強く胸に映るやうになつて來た。いろ〳〵の計畫が自から目の先にちらつくやうにもなつた。そして父がどの子よりも良吉の身の上を案じたり庇つたりするやうなのを快からず思つてゐた。

「彼奴、因循な癖に圖太いやうだから、一番仕末が惡い」と、或時慶作に向つて話しもした。「彼奴は誰れが何と云つても馬の耳に風でケロリとしてやがる」と屢々忌々しさうに云つた。

七夕の日は朝早くから起出て、子供達が惣掛りでその仕度に取掛つた。良吉もお作や竹夫に促されて一緒に稻の露を取り笹を折つて來たりした。そして寄つてたかつて五色の短冊に「天の川」だの「はたおり姫」などの文字を書散らした。曾祖父の出版した「七夕狂歌集」から、いろ〳〵の狂歌を書寫しなども

した。母は手に汗を責染ませて施物の豆を炊つた。玉蜀黍だの酸漿だのと畝の者を取つて來て、細い竿に釣下げて供物とした。西瓜は深い井戸に沈め、茄子では馬をつくつた。

澄切つた空に銀河の白く流れて、彦星や機織姫のあれかこれかと指差される時分には、退一も慶作も四疊半から出て、祭場に集つて來た。村の子供はぞろ〳〵炊豆を貰いに來て、竹夫や君藏の手からもそれ〳〵に渡された。

「今年は短冊がドッサリついて綺麗だ、笹の枝振りも面白い」と、退一は氣持よさゝうに仰いて見た。

「笹は良さんが籔の中を捜廻つて切つたんぢや」と、お作が云つた。

「だからいゝんだ。植物學者の見立てだけあつて」と、退一は笑ひながら、「祖母さんが生きとれば何か一首やる所なんだが。」

「祖母さんが亡くなつてからは、七夕も盆も面白くなくなつたねえ。」と、慶作は感慨めいた口を利いた。

「うん。昔風の趣味に富んどつた人だつたからねえ。この七夕の祭り方はおれが祖母さんに傳授されて、皆んなに敎へたんだぜ。祖母さんが生きとると、今夜は素麵を食べさゝれるところだ」と云つて、退一は竹夫を顧みて、「竹は祖母さんに素麵を食べさゝれたのを覺えとるか」と訊いた。

竹夫は「うんにや」と首を振つて、薄く殘つてゐる昔の影を思出さうとしてゐたが、お作は「覺えとるよ、私は」と横合ひから口を出した。「此間祖母さんの寫眞を文庫から出して見とつたら、あれと些とも違はん顔が思出されたよ。顏の長い皺の寄つた老婆が佛壇の前へ身體を曲げて坐つてお經を讀んだり、植木

鉢に水をやつたりしとつたがな」
「死んでからもう八年目だねえ、早いものだ」慶作は自分の年齢を基に指を折つて數へた。
「そんなになるかねえ」と、退一は首を傾けて、「これて皆んな一度は祖母さんに抱かれて育つたんだがなあ」
皆んなの心にそれ〴〵に祖母の姿が浮んだ。良吉は祖母が最後の琴平詣でに連れられたことを思出した。高い石段を杖に縋つて上つた祖母の健氣な姿は鮮かに殘つてゐる。だが、その事は口には出さなかつた。默つて獨りて追憶に耽つてゐた。
「盆踊りのお師匠樣も祖母さんだつたぜ。七夕時分から毎晩習つてたものだ。月の差込んだ寐床て、三人揃つて踊り廻つたこともあつたねえ。良も覺えとるだらう」
「うん。二階で飛廻つて親爺に酷い目に叱られたことを夢のやうに覺えとる」と、良吉は白い歯を出してニヤリと笑つた。
「男の癖に踊つたりなんぞして。」と、お作は意外の感じに打たれて、相好を崩して笑ひながら、「良さんも踊つたの。どんな風して良さんは踊つたの。今夜踊つて見せてお吳れな。どんなに可笑しいか私見たいから」
「本式に手拭を被つて踊りの輪の中に入つて踊つたこともあらあ」と、退一はその時を思出して、面白さうに笑つた。

一座皆笑ひを顔に浮べた。凉しい風はサラ〳〵と笹の葉を動した。菜園の方から蟲の音が深沈に聞えた。

「何を云ふて笑ふとるぢや」と、今まで座敷て客と話してゐた父は、微笑々々して、煙草盆を提げてやつて來たが、縁側から凉臺へ一跨ぎにしながら星の空を仰ぎ見て、「よう晴れとる。當分雨も降りさうぢやない。」と獨言を云つて、

「此處五日も日和がつゞくと、大池も乾上るさうぢやぜ。今もその話をして、明日の晩あたり雨乞ひをしやうかと相談しとつたんぢや」と、先づ退一の顏を見た。

「雨乞ひもいゝだらうが、不斷からもつと山林を保護したり、池を渫つたりして、容易に水の枯れんやうに工夫するのが肝要てすね。姑息な事ばかりしとつても仕方がない」

「それはさうだが、金のかゝる仕事はとてもこの貧乏村ぢや叶はんでなあ」父は何時ものやうに退一の口にしてゐるやうな計劃には些しも心を向けやうとはしなかつた。

「かう日照りがつゞいて水氣のなうなつた時には、火事があつちや大變だぜ」と、急に氣がついて、「用心しとくに越した事はないから、離れの古井戸の水でもどし〳〵汲んて溜めとくとえゝ。どうせ慶や良は用事がないんぢやから、運動がてら、水汲みをやつちやどうぢや」

「えゝ」と、慶作は氣乘りのしない返事をして、「だけど、少々水を汲んどいたつて、役に立ちやしないてせう」

「いや、さうてない。一荷の水は一荷の水だけの用をするんぢや」

その格言めいた父の言葉を、慶作は心の中で嘲笑つた。良吉は先つきから、「雨三粒降れば天の川が渡られ」ぬと、一年一度の今宵の晴れを祈つてゐた祖母の言葉を思出しながら、空を仰いでゐた。

翌日も空に雲の氣はなかつた。正午過ぎには三吉爺が疊んだ手拭を坊主頭に載せて、夕方からの雨乞ひを皺枯聲で觸れて廻つた。

「かう毎日々々照付けられちや、稻ばかりぢやない、人間も生命がつゞかん」と。母は身體を持てあつかひかねてゐた。良吉も二三日差障りのあつて、仕事を怠けたのが癖になつて、今日は山上りを止めて、二階でゴロ〳〵してゐた。

「今日は良さん山へ行かんの。お寺の方は涼しいぞな」と、お作は側で寢そべつて小說本を讀みながら云つた。

「山へはもう行かんことにした。この村には碌な植物は一つもないんだもの」

「何處へ行たつて良さんなぞに碌な植物が目につくものかな。學校の植物の標本には珍らしい者がどつさりあるぞな」

「學校のとは譯が違ふぜ。一つ〳〵自分で苦心して集めたんだから。お作は粒々辛苦といふ事を知つとるかい。一粒の米だつて獨り手で出來たんぢやない」と、良吉は教師振つた口調で云つた。

「お父さんがようそんな事を云ふがな」と、お作は蓮葉な調子で云つた。父の言葉と云ふ事に自から冷笑

の意味を含ませたのである。良吉はそれに答ふべき氣の利いた言葉を知らなかつた。て、お作が小聲で讀出す小說の文句を聞きながら眠氣さしてゐた。

退き汐て風はバッタリ止んで、死の照返して部屋の中は茹るやうだつた。蜂ばかり立舞ふてブーンブーン唸つてゐる。

「おや、これて永久のお別れだわね」と、さよ子はハンケチを目に當てゝ、「かうなるのも運命だから、私死んだつもりて諦めてよ。だけど、一生忘れないて頂戴。貴下が何處て何をして被入らうとも、時々私の事を思出してゐて下さるんだと思へば、私それて滿足してよ」

次第に聲を震はせた。輝は首垂れたまゝ暫らく何も云はなかつた。月は雲間を洩れて冴えた光で二人の身體を包んだ。

「僕は忘れたいんだ。此處て別れたら、一刻も早くさよさんの名も忘れたいんだ。」と、輝はやがて顏を上げて、淚ぐんだ涼しい目を向けて、「だけど、さよさんは僕が貴女の事を忘れ得られると思ふんですか。人間はさう容易に戀ひしたり忘れたり出來ると思ふんですか。殊に僕の性分がそんなに浮薄なんてせうか」と力を籠めて疊みかけて云つた。

「私、そんな意味て云つたんぢやないのよ。惡かつたら勘忍して頂戴」

などと、次第に調子づいて讀んでゐるお作の目には何時か淚が浮んだ。拭ふのを忘れてゐる額の汗はポタ〳〵書物の上に落ちた。そしてお作の口から傳はる作中の男女の會話は、良吉の耳にも哀れつぽく

も懐かしくも響いた。やがて、一章を讀終つて、お作は書物を机に伏せて、紅々としてゐる顔を上げて、「良さん、聞いとつたの。些とも知らなんだ」と不平らしくも云つた。極りの悪いやうでもあり、折角の樂みの邪魔をされたやうでもあつた。

良吉は素知らぬ風をして、身體を伸して沖の方を眺めてゐた。

「良、々」と、階下から忙しさうに父の聲がした。

「そら、お父さんが呼んどる。早うお下りよ」と、お作は齒痒さうに兄を促して、再び小説を開いて、口の内で讀みつゞけた。

「愚圖々々しとらんて、些とは身體を動かせい」襦絆一枚で足袋裸足て、肥柄杓を手にして、甲斐々々しく土間に立つてゐる父は、良吉を見ると、眉を顰めてそう云つて、「これから井戸尻を汲んで、茄子に水をやるんぢや。お前も下りて手傳つて呉れ。」これ丈け男手が揃うとるのに、菜園を枯らしてしまうやうぢや仕方がない」

良吉は身に餘る大難役を言付けられたやうて、如何にも氣が進まなかつた。帽子を被り下駄を穿いて土間に立つた。

「下駄を脱いて尻てもからげろ」と、父は叱付けた。良吉はその通りにした。そして、二人て肥桶を擔いて、胡瓜や茄子に水を注いだ。乾切つた土は見る間に水を吸込んだ。

「百姓の家て菜園の青物を枯かすやうぢや仕方がない」と、父は足て肥桶の尻を持上げて汚水を移しなが

ら云つた。

十荷あまりて、一通り灌漑の終りかける時分には、父は腹の皮を波打たせて、苦しさうに息を吐いた。そして、「矢張若いだけに良の方が強いわい」と苦笑した。

良吉の目にすら父の衰えが際立つて見えた。「親爺の身體も、もう役に立たなくなり出した」と思はれた。

風呂で汚れを洗つて、素裸のまゝ緣側に涼んでゐると、珍らしく蝙蝠が軒先を掠めた。良吉はその奇怪な形に興を惹かれて、見えなくなるまでその行衞に注意してゐたが、ふと、「成程蝙蝠傘は蝙蝠の形に似せて發明したんだな」と、さも大眞理を發見したやうに獨りで感心した。發明なんてそう六ケ敷ものぢやない。よく物を注意しとれば自然に考へ出されるんだとも思はれた。そして自分でも今に大發明の出來さうな氣がしてならなかつた。

「やあ、雨乞の火が見える」と、竹夫の叫んだ聲に良吉は發明の緒を失つて目を上げると、彼れの馴染の山には火が打續いて動いてゐる。宮の方では太鼓の音が勇ましく響いてゐる。「雨降れ祇園王、蓑虫出いく蓑と笠と買うてやろ」と、囃立てゝ通つてゐる子供もあつた。その聲に誘はれて、竹夫と君藏とは戸外へ驅出した。

父は稍々もすると庭へ出ては空を仰いで、屢々歎息した。「一度大夕立があれば、ぐつと冷しうなるん

ぢやが。風は大分秋らしうなつて來たのに」と、柿の葉を搖る幽かな風の音に耳を留めてゐたが、やがて何を感じたのか「この秋は彼岸が濟んだら。道後へ湯治に行つて見やうかな」と呟いた。

あたりにそれに答へる者もなかつた。良吉は父の目を外して二階へ上つて、暗闇の中に寢ころんで、發明の方法を考へ續けた。だが、何一つとして鮮かに心に浮びはしなかつた。そして考へ疲れて蚊に喰はれるのも知らずウト〳〵してゐたが、ふと呼起される聲に目を醒ますと、燈火が點いてゐて、竹夫と君藏とが採集罐を拔いてゐる。

「なんにもないがな、叔父さん」と、君藏は中を覗いて訝しさうな顏をして、執念く訊出した。

「化物は何處かへ逃げたんぢや。來年また作州から攫へて來てやらう」と、良吉は眞面目腐つて云つた、「良さんは何時作州へ行くんかな。慶さんは明後日東京へ行くんだつて。今退兄さんにさう云ふとつた」と、竹夫は云つた。

「何か二人で相談しとつたかい」良吉は一寸それが氣になつた。

「何か知らん分らんことを云ふとつた」

「さうかい」

良吉の心にも、又ちらと將來の事が氣遣はれた。そして屈托してゐたが、やがて、

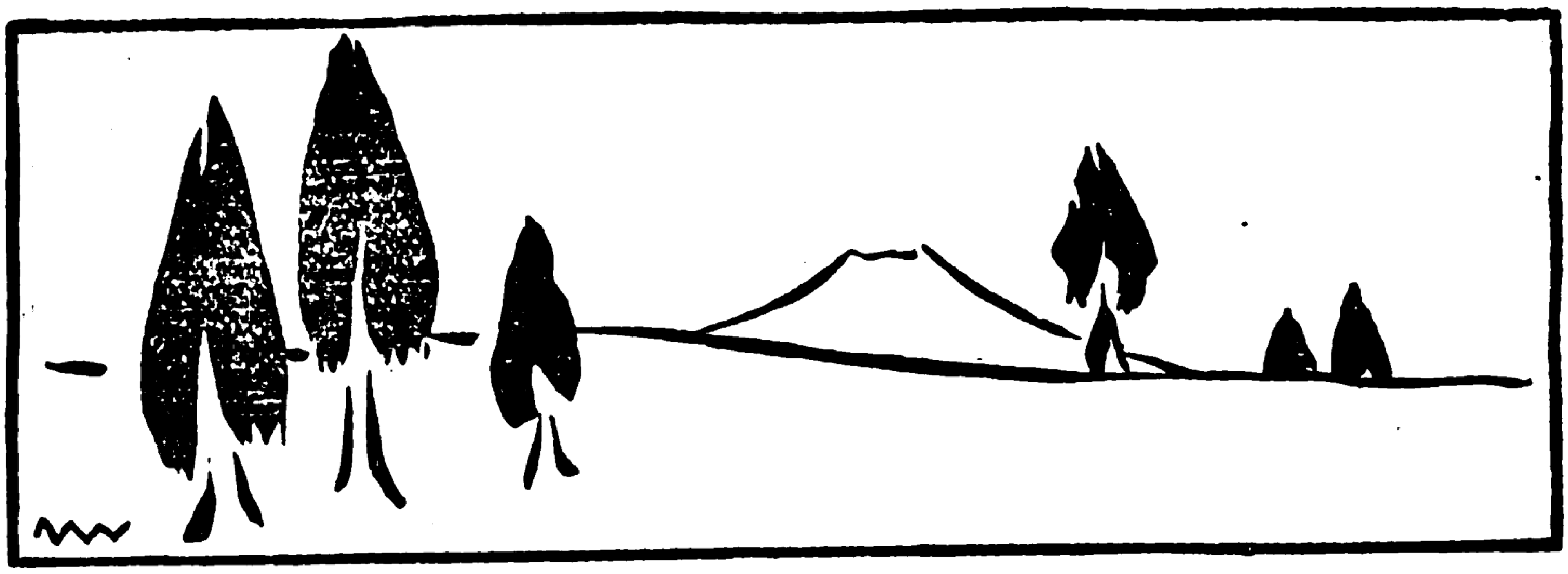
「おれは今度作州へ歸つたら、植物採集はやめて、發明でもしてやらう、兄貴なぞに世話になつて煩い事を云はれるのは厭だ。自分一人でえらくなつて見せらあ」と、心で自分を勵まして、「今に見て居れ」と

聲を出して力んだ。

その聲や樣子の可笑いので竹夫は笑つた。

あくる日も朝から暑い日が照つて、雨を含んだ雲は何處にも見えなかつた。良吉は採集を止めて、終日二階で寢たり起きたりしてゐた。そして山上りよりも、かうして考へてゐる方が氣樂でもあり興味も多いやうに思はれた。

「良、々」と、父の聲が折々快い居睡りを醒して仕方がない。(完)



男體女體

中村星湖

高道祖から洞下へ行く途中の、林間の道路を歩いて來ると、今朝下妻の友人が書いて呉れた通り、道路が二またに分れるところに、深い松木立を脊にして茅葺の茶屋が一軒立つてゐた。原と館野の二人は道路に向けて据ゑてあつた緣臺へ腰を卸ろした。

店さきには蓋の無い駄菓子箱が臺の上に並び、土間の眞中の焚火には天井から吊りさげた自在鍵の大鐵瓶がフッ／＼と白く湯氣を吐いてゐた。顏の平たい指の太い女房は、前から休んでゐた此邊の百姓らしい客に茶を注いでやつてから、新來の二人にも茶碗を運んだ。女房の小汚い手足を見ると、原は可なり渇きを感じながら、その煎じたやうな茶を飲む氣になれな

かつたが、『昨日一日汽車の中で美人を見なかつたので氣持が惡い。』と言つた館野すら無造作に飮み乾したのを見て、誘はれるやうに茶碗を取つた。

茶屋はほんの堀立小屋で、地びたに雨戸の敷居が附き、普通の家ならば上り框にも足らぬ疊の上では亭主が白く削つた藤木をラケット形に押曲げたのを縁にして、細かい割竹でパサ〳〵音をさせながら饂飩あげを編んでゐた、古股引を穿いた膝の側には出來上つたのが五六個積んであつた。その背後の黑く燻つた壁には、乾からびた串ざしの川魚がいく串か挿してあつた。

豆ネヂを旨さうに嚙んでは茶をガブ〳〵飮んでゐた男は、空脊負子を肩にして二人が來た方向へ出て行つた。二人も茶代を置いて其所を離れ、『右北條道、左つくば道』と並べて彫り付けてある道しるべの石から左の道に入つた。やはりすが〳〵しい松林が續いた。

『君！』と黑い冬服を着、うす紫の襟飾をしてゐる原は、下駄穿きですこし先に立つた館野を呼んだ。館野は和服姿だが羽織はやはり黑かつた。『櫻も桃も無い斯う言ふ林の中を歩いてゐると、まるで秋のやうな氣持がするぢやないか。見給へ去年の儘の楢の葉が赤く殘つてゐるあたりは！……そして松林の幹と〳〵の間に日の射し込んでゐる樣子も面白い。』と續けながら原は鼻を鳴らして何か懷しい匂ひでも嗅ぎ出すやうに林の空氣を呼吸した。

『さうですね。』と氣の無い返事をして、館野は灰色の中折帽の頂を烏帽子のやうに突き上げたのを被つた頭を廻しもせずに片手の手首に書物の包を懸け片手に洋傘を杖突きながら大股に歩いた。昨日の汽車

の中でも、今朝友人の宅で顔を洗つた時にも、細い手の指を櫛代りにして大事さうに梳き分けた長髪は帽子の下に垂れて襟を蓋ふ程に見えた。

「この邊ならばツルゲーネフの「あひゞき」の舞臺にしても不足はあるまい。」と小柄な原がつとめて脊の高い館野に並んだ。

「はあ。」

「君は、汽車でアンドレーエフの「七死刑記」を讀んでましたらう。」

「えゝ。」と今更のやうに、館野の眼の大きい青白く瘠せた顔が、原のハアバアト型のスコッチ帽の下の日に燒けた顔と逢つた。が、すぐまた行く手を向き直つた。足駄の齒で二の字を殘す柔かい黑土の上を靴が靜かに踏んで行つた。

「あの中にテロリストとあるのを、君等の間では何と譯しますか。」

「さあ……やはりテロリストで通つてゐますが……」

「テロアと言ふ字から來たのだらうねえ。恐ろしい人と言ふやうな意味なんでせう。」

「ま、さうです。……一體ロシヤではインテリゲントに對した言葉になるので、英語ではインテリゼントですか、インテリゼントの方は例のルヂンやバザロフのやうな高等遊民を指し、テロリストの方は實行派を言ふのです。」

「ふむ。さうだらうね。だが「七死刑記」の中のテロリストは餘り恐ろしき人々でもないな。どれもこ

れも死の恐怖に襲はれてゐるんだから、あそこて言ふテロリストは取りやうては妙に皮肉な意味になるぢやないか。」

「さあ、さうてせうか。」

「僕はさう思ふ。そしてあれだけの物ならば、あの連中の内幕を知らなくても、また刑場の樣子を知らなくても隨分想像で書けると思ふよ。あれに比べれば新聞の記事だけて見た先頃のK一派の死刑の方が深刻だ。日本人も馬鹿には出來ん。」

「こんな生ぬるい氣候に育つても、死の覺悟だけは出來てますね。」

「武士道の餘波だらうか、または君が昨夜小野君の所て論じたやうに死の讃美をする佛敎のお蔭だらうか。」

「それは兩方の影響がありませう。だが氣候風土から來る明快なやゝ輕薄に近いエレメントの方が日本の國民性の大部分を占めてをりますてせう。日本も德川時代の鎖國の儘ならばあんな事件も起らなかつたてせう。」とちよつと立止まつて、舘野はすぐ側に咲いてゐた眞紅な木瓜の花を、無意識らしく洋傘の尖て叩き落した。瘠せた胸を包んてゐる襦袢の襟が際だつて白く、日に透かされる松葉の色が映るか、顏は恐ろしく青く見えた。

「君の所へも刑事が來ると言ふ話だねえ。」と原は眼鏡の顏を仰向けた。

「一時はうるさかつたが近頃來ません。つい十日程前に、私の宿て他の客がかつさらひに逢つた時、お

馴染の奴が來たから「近頃は餘まり見えんが何うした？」と訊くと「もう君には用は無い」つて言つてました。」と言つて、館野は嘗て笑つたことのないやうな面に笑みを浮べた。

二人はまた歩き出した。急に明るくなつたと思ふと、たけ高い松が盡きて、道の側は小松原になり、道を横ぎつてところ〴〵水が流れ、枯草の間に若草が萌え、四五寸の木瓜の木が皆蕾や花を着けて長く續いた。小松原の向ふには二つの頂を持つた筑波山が手も届きさうに近く見えた。

「この木瓜の咲いてることを見給へ。……先達て死刑になつた「十二人」の中にも女が一人あつたと言ふ事は、あの事件に非常にロマンチックの色を帶びさせてゐるではないか。そして君はあのKの「基督抹殺論」を讀んだかね？」と原がまた訊ね始めた。

館野は、いつも原から言葉を懸けなければ滅多にその女性の持つやうな小さな口を開かなかつた。

「見ました。」

「僕はちよつと覗いたゞけだが、あの中で十字架のシムボルを説いてある所は面白いぢやないか。」

「生殖器の表象だと言ふてせう。あれは古くからある説ですよ。」

「さうではあらうが、説の新舊よりは、宇宙のあらゆる美の表現は、同じ意味のシムボルでなければならぬ。それでゞす。例へばこの木瓜の花にしても、松のみどりにしても、蝶の翅の色彩にしても、人間の女の衣服や紅粉を粧ふことにしても總てさうだらうぢやないか、「十二人」の中の女が、警官に『鼻の低い女』と呼ばれたのを憤慨して美容術を施したと言ふ事も僕は大變面白いと思ふ――生物學の方から考

へて行くと、いかにも現實を曝露するやうて大變忌み嫌ふ人はあるけれども、本來の意味がさうだからって、美しい表象はやはり美しいんだから好いぢやないか。」
「十字架はさう言ふ意味の表象にもなりますが、私はやはり死の表象と見ますね。」
「とすると佛敎も基督敎も一致するね。」
「さうです。」
「けれども君の死の讃美も一種の遊戲だと僕は思ふよ。死の外に道が無いならば、默つて死に就く可きぢやあるまいか。讃美なぞしてゐる間はまだ天下泰平だ。」
「……まつたく讃美は憧憬に過ぎない。ロマンチストの行き方に過ぎない。實行の出來ない事は近頃は沈默するに限ると思つてはをります。けれど對手のある時はやはり讃美も爲たくなりますよ。……子供の頃を考へて見ると、殆んど一人の友だちも作らず、空想にのみ生きたロマンチツクの少年でした。」と館野は少し首を垂れた。
「まだ貴郞には詳しい身上話をする機會もありませんでしたが、私は七歲の時にアメリカへ行くと言ひ出して親達を困らせたさうです。人からアメリカの話を聞いたゞけて行きたくて堪らなかつたのですね。「ぢや行つて來い」つて親達が五圓の金を呉れたのを持つて得意になつて出懸けたと言ふ事は今でも一つ話になつてをります。東京へ出て來たのは中學の四年を卒へて五年になつた春でした。東京へ來ると間もなく脚氣を病んで國へ歸り、それが癒ると朝鮮の京城へ飛んて行つて新聞記者になつたが、三日て

やめました。二十二の歳でした。それからまた東京へ出て來ると今度は肋膜を患つたのです。基督教に入つたり社會主義の連中と近づきになつたりして悶え廻つたのは其頃の事でした。文學物に讀み耽つたのも其頃からです。二度目に病んで歸ると、病氣が癒らぬさきにアメリカ行を持出したのです。すると親達は二百圓の旅費の仕度をして呉れ、旅行免狀下附願まで書かせて置いて「この上は醫者の檢査を受けて、體が長い航海にも十分堪へる事であつたなら何時出懸けてもよろしい」とまでになつたのです。親達は健康診斷を受けると、ダメでした。親の方から先に手を廻して置いたとはあとから解りました。親達は國で果樹でも植えて暢氣に遊んでをれ、そして文學もやりたければ娛樂としてやれと言ひましたが、一昨年また〳〵東京へ飛び出して來て、昨年上半期は、吉原、洲崎、千住、新宿と漁つてしまひには橫濱まで行き、黑人ばかりで六十八人の女を買ひました。其結果極度の神經衰弱に罹かつたりして、物質上から言つてもひどい窮迫のハメに陷ちました。下半期は其反動でおそろしい淸敎徒のやうな生活を送つて、この頃やう〳〵整理が着いたわけですが……」

洞下から柔かく風に靡く靑麥畑の間を行き、中菅間を過ぎる頃には、筑波の麓の村々も、山の中腹にある筑波の町の白壁も櫻の花もあざやかに見えた。

「汗ばむ程暖いねえ。山の町の白壁にある黑い小さな窓も見える。」と原が近眼鏡を光らせると、「私には

二階の欄干も見える、今その欄干て女が手招きをしてゐる。」と館野が言つた。

『まさか、アハヽヽヽ。』

『男體の頂にある枯木立の間の社の屋根まで見えます。』

をちこちて泥田を鋤き返す村の人々も、折々體を伸ばしては、何處をともなく眺めてゐた。

『君下駄穿きて疲れはせんかね。僕あ兩方の足が痛んて來た。』

『私もいくらか疲れました。今日のうちに筑波を下つて土浦へ急ぐと言ふやうな事はよさうぢやありませんか。』

『てもついてに霞ヶ浦の汽船にも乘りたいな。』

『私に取つては景色を見るなんて事は何うても好い。筑波も町て休むだけて、頂上めぐりなぞを止めると好いが……ても折角來たんだから。』

淺みどりの芽を吹いた楊の古木が幾本か並び、水車が眠むさうに廻つてゐる川のほとりへ出ると、館野は懷から地圖を出した。

『あゝ、これが昨夜小野君から聞いた櫻川てす。』

『櫻は無いねえ。』

『謠曲にある「常陸の國さくら川」はこの上流なんてせう。笠間の近くを流れる邊に土橋があつて、そこに櫻が咲いてるのてせう。そら、瀛車て、松林の前に浮き出すやうに花が見えるつて私をお呼びなす

つたでせう。あの邊でせうよ。」

「その謠曲の筋を話して呉れ給へな。」

原は斯う言つて楊の影を寫しながら靜かに流れて行く川面を眺めた。「、、えん丸〳〵兒を生め！」と歌ひながらふる郷の川ばたで銀鼠色の天鵝絨のやうに柔かな毛の生えた物の實のやうに丸い楊の花を摘まんでは、小さな掌の間で揉んで揉みちぎつた少年の頃の觸覺をふいと思ひ浮べた。そして汗ばんだ手を日に照らして見た。筆ばかり持つ爲め十分に發育しない小さな手ではあるが、館野のそれよりは赤らんで居た。

「……九州のある由緒ある家で、人買ひの男に子供を盜まれたのです。」館野は話しながら歩いた。「可愛い一人兒だつたので、その親はその子を尋ねてはる〳〵常陸――この國の笠間に近い櫻川まで來ると、一人の稚兒が寺の和尚に連れられて花見に來てゐた、それが自分の兒に相違ないので、親はわが兒を返せと言ふ、和尚は返さぬと言つて爭ふのです……」

中學の校長であると言ふ阿爺の膝元にあるころ習ひ覺えたのでもあらうかと、原はその謠曲の物語りと館野の今の身の上とを思ひ合はせながら歩いた。

物語りは途中で切れた。そして館野は默り込んだ。原も續きを話せと言はなかつた。二人共疲れた歩き方をした。臼井の村に入る頃には原は外套を荷にして、脫いで丸めたのを肩に掛けて見たり脇に抱へて見たりした。手巾で度々額を拭いた。筑波の山に懸かると靴の足がひどく痛んだ。下駄穿きの館野が

いつも先に立つた。

臼井西部青年會の道しるべの新らしい標杭のある側で、二人は大きな石に腰を卸ろした。そしてしばらく息を吐いてゐると、横あひの山路から焚木を脊負つた十二三の女の兒が、男のやうな股引を穿いて下ツて來た。その後から母親らしい汚い女が、やはり山着を着、股引を穿いて小山のやうに焚木を脊負ひ、片手に四五歳の子供の手を曳いて來た。往還のまん中へ來ると子供は跣足の脚空ざまに地びたへ引繰り返り、母親が何と賺しても『ぜにをくれ。』と言つて動かない。『すねてゐろ、こオれ。……そんぢやうつちやつて行くべい。』と振り棄てゝ二三間下つたが、子供が其儘起きないので、荷を脊負つた體を重さうに戻つて來て、石の上の二人を眺めながら、大きな聲で笑つて、無理に引立てゝ行つた。

『さあ出懸けやう。』と原が喫ひかけの卷煙草を投げて體を起こした。

『今のやうなのを見ると實に厭な氣持がする。』と館野は面を澁めた。『惡らしくつて擲つてやりたいやうになる。』

『あの子供?』

『さうです。』

『やはり好き嫌ひて物を見る人だね、君は。』

『私などは妻を迎へたり子を持つたりする氣にはとてもなれない。すぐ厭になるから。……妙な所へ出入しても同じ女と遊んだ事は一度もありません。』

「僕あ女を買つたり弄んだりする金と時間とが無かつたから妻を迎へた。子供が生れるからつて、精神上に負擔は感じない積りでゐる。もし負擔する所があるとすれば、それは物を以て物を償ふだけの事だ。」原は辯解するやうに、また自ら確めるやうに言つた。

「その物を以て物を償ふ事が私等にはうるさい事なんです。物は即ち心だから。」と館野が言つた。

「僕は「背教者ジュリアノ」の中にあるやうに、二つの中の一つを取れば好い。」

「私はイブセンの所謂總てか、然らざれば皆無を望みます。」

「や、人間には「總て」は勿論「二つの一つ」も得られまい、そのやうな夢を見てゐる間に「皆無（ナッシング）」の淵へ陥ちるんだ。生の姿は樣々あれ！さ。」

筑波の町は、入口の鳥居の下から石の段々が積まれてあつた。館野はそれを下駄で輕さうに登つた。原の兩足は、靴が固い石にコツ〳〵當るたびに針で刺すやうに痛んだ。正午すこし過ぎた春の日は、白壁の多い建物をも、建物の間に咲き盛つてゐる櫻をも、何處まで續くかも知れないやうな石段をもクワッと照らし付けた。二人が時々立止まつて振顧ると、麓に續いた野や、村々や、木立や、川や、往還が畫のやうに展けてゐた。南に當る霞ヶ浦のあたりは直ぐ前に横はつた山にさへぎられて見えなかつた。

「お休みなさいまし、寄つていらつしやい。」

一町ごとに立てた道しるべの杭が筑波神社へ近いことを示して來ると、石段の兩側に石垣を積んでは建て、積んでは建てしたらしい建物が次第に大きくなり、何々樓と書いた行燈をさげたのが幾ところか

あつた。そのあたりから年増の女の聲がかゝつた。
『この邊ては宿屋を「樓」と言ふのかねえ。』と原が言つた。
『あゝ、變な女が出てゐるぞ。貸座敷てせう。』と館野が答へた。
『なる程宿屋は宿屋で別にあるね。』と原は外套を擔いだ肩を重くるしく廻しながら眼を走らせた。『貸座敷はあると聞いてゐたがもつと引込んでゐさうなものだ。』
『お休みなさいまし、寄つていらつしやい。』
晝日中斯う呼びかけられるのを後ろめたく感じながら、二人は急いで石段をのぼつた。
『どこへ寄らう？』
『筑波神社わきの江戸屋と言ふ大きな廣告が町の入口にありましたつけ。そこまで行きませう。』
二人は石段を登ぼり盡して、大きな城のやうな神社の石垣の側を右に入つて行つた。江戸屋は、前に新築しかけてある新らしい旅館のかげに、古びながら由緒ありげな構へてあつた。
『眺めの利く室を。』と注文して、二人は女中に導かれて二階へ通つた。廣い屋うちに客らしのは二三人しか見えなかつた。二階の何の室も、前の西洋館まがひの高い建物に妨げられて、餘り眺めは利かなかつた。神社の大石垣の上に古風な土塀の見える室を擇んだ。白塗の土塀のおもても苔蒸した古代瓦のその尾根も半ば朽ち崩れ、それに圍れた朱塗の第一拜殿の前には幹の太い櫻が青白く咲いて、青空もわづかに透し見られたが、其外は前のその壁板もまだ塗つてない未完成な建物や縱横に架け渡した足代の材

木に限られてゐた。

『牢屋の窓から物を見るやうだ。町の途中にずつと眺めの利きさうな宿があつたのに、廣告にだまされて厭な所へ入りましたね。』と言つて、館野は細長い兩脚を投げ出し、汗ばんだ襦袢を脱いて半障子の敷居へ掛けた。原は何より先きに靴下を取つて、踵や指の脊に幾つも膨れあがつた足のマメを手の指でちよいちよい押して見た。

『痛いいたい！』

『それて頂上へのぼれますか。』

『靴さへ脫けば平氣てす。』

『もう山めぐりは止めませうか。』

『こゝに斯うしてゐたつてつまらんから、のぼりませう。君も可なり疲れたらうが、明日へ延ばすとなほ厭になる。草鞋に穿き變へて今日のうちにめぐつて來ませう。』

其所て晝飯を喰べる時、給仕に出た十四五の女中に、原が『あの行燈に何とか樓とあるのはやはり宿屋か。』と訊くと女はたゞ笑つてゐた。食後の茶を飮んでから、二人は疊に長くなつた。館野はその長髮を癖のやうに手の指て梳いた。原は、友のその青白い笑ひの無い顏を、眼鏡越しにぢつと見詰めてゐた。

『刑事に跟けられるやうになつた君の思想や行爲に就いて阿爺さんは干渉して來んかね？』

『干渉します。それが爲に今年になつて學資を送つて來ません。』

『兵糧攻めかね。』

『ま、そんな所です。』

『阿母さんは?』

『言ふまでもなく心配してをります。』

『長男ですか、君が。』

『さうです。上に二人姉はありますけど。そして私の下に男が一人、女が一人あります。』

『阿爺さんは幾歳です。』

『五十八です。』

『失敬だが君は? お幾歳?』

『二十五です。』

原は改めて館野の顔を見た。淸らかてはあるが、何と言ふ年寄染みた顏てあらう。

『ぢや僕のすぐの妹と同い年だ。』

『男だからまだ好いですよ。これが女ならば……』と言ひかけて館野は起き返つた。『私も去年までは毎日死ぬ仕度をしてをりました。手紙ても何ても後へ遺つて惡い物は一日々々に破つたり燒いたりしてキチ〳〵整理を着けて行きました。其頃は眞面目て阿爺に放蕩の生活の告白を書き送つた事もあります。けれど、今はすつかり自分を投げ出してゐるんてすから、何時死んても、また何が死後に遺つても恐れ

ないだけの覺悟は着きました。』

『ふーむ。』と原は一と息吐いた。『今頃の人は誰も皆、死ぬまでの生命を持てあつかつてゐる。』と思つたが、今更らしく言ふ程のことでもないので口を噤んだ。

下妻の友人が一度登山した經驗から、今朝其許を發つ時貸して呉れた足袋を穿き、宿て出す輕い草履をつゝ懸け、宿の所有の杖をたづさへて二人はまづ筑波神社の社殿を見廻つた。午後二時頃の日のかげつた廣庭には、近鄕の人らしい參詣人が幾人か歩いてゐた。

二人は友人の書いて呉れた地圖に從つて、向つて左手の男體へ通ふ杉林の間の、けはしい狹い山路を辿り始めた。草履になると、ヅボンを膝までまくり上げた原の方が早くて、裾の長い舘野のしば〳〵杖にすがつて歩きなやむのを待ちながら『僕あ、これて山國に育つたから山には達者ですよ。君は何處で生れたんてした？……はあ熊本ですか。……日本の文明も九州から開けたんだ。』などゝ言つた。

『私は努力して山へ登るぐらゐつまらん事はないと思つてゐる。苦しいばかりぢやない、登つて見れば汚いのに失望しますから。……だから貴郎のとこの富士山なども、遠くから美しく眺めるに止めときます。』と舘野が言つた。

二人は疲れると休み、休むと、外に通る者も無いので樣々な談を續けた。深川あたりの勞働者の妻や

娘の事、淺草公園の賣春婦の一割は女學生である事、或一部の書生間に「イタリイの女」と綽名のある、大方の國々を經廻つて大方の國語をわきまへてゐる中年の女の事――さう言ふ事になると、多くは館野が語つて原が聞き手になつた。

　五六町登つたと思ふ頃茶屋があつた。茶屋の老婆は『こゝがお山の丁度中途で御座います、休んでいらつしやい。』と呼んだ。素通りをして二三町登るとまた茶屋があつた。『また「こゝが丁度お山の中途」だらう。』と原が館野を振顧ると、その通りの言葉が其茶屋から懸つた。二人は笑はずにはゐられなかつた。

『地圖にある「みなの川」はうつかり通り越したらうか。』『小野君の話してはタラ／＼水だと言ふから氣が附かなかつたかも知れない。』と言ひながら、やはり杉木立の間を登つて行くと、また茶屋があつて、六十ばかりの老爺が『こゝが有名の「みなの川」で御座い。』と言ふ。茶屋の側に、小さな竹樋から細い水が落ちて音を立てゝゐた。二人は其所で一と休みし、みなの川の水に浸した白玉を味はつた。老爺はこの水の山中第一に清い事や、陽成院の御詠の事を說き立てた。

『筑波根の峯より落つるみなの川……か。つまり男體と女體とから流れて來る水だね。』

『あゝ、さうです。』

　この山の木で拵へた、花立だの土瓶敷だのが店さきに並べてあつた。暫く休んでゐる間に、制服を着た二三人の學生が登つて來たので、二人は其所を出た。暗い杉木立は次第に脚の下になつて、振顧ると遠く南の海が見えた。登るにつれて岩石が多く、木立は冬枯の儘の灰色の肌の山毛欅ばかりになつた。

寒い風が黄色い笹の葉を鳴らして過ぎる。

「空が曇つた爲か、まるで冬だね。」

『落寞と言ふ感じの外に何物もない。』

「一體僕等はこの山へ何しに來たんだ。」

「たゞ登つて來たんだ。」

「一體この山の神樣は何と言ふんだらう。」

「何と言ふんだかね。」

「男體と女體の二つある事だけは聞いてゐたが……はゝあ、伊奘諾、伊奘册の命かね。」

「さうかも知れん。」

疲れ果てた館野は原にはげまされて、男體と女體の二つの頂が手に取れるやうな平地へ出た。其所には「依嵐亭」と扁額が掛かつた廣い辻堂のやうな茶屋があつた。二人は茶屋に入らずに東の眺めの利く吹き晒しの臺へ腰を卸ろした。亭主は茶を淹れて其所まで持つて來て、下界の町々の名を言ひ指さしゝて示した。餘り風が烈しいので引返して茶屋へ入つた。みなの川て見かけた學生が最早着いてゐて、「登山人署名帳」と書いた厚い帳面を繰つてゐた。その一人の顏にはニキビが吹き出してゐた。『青山女學院生徒』として下に四五人並べて書いた名前が、横から見た原の眼を掠めた。『どうです、「常陸山」の名前がありましたらう。』と學生達に言葉をかけながら亭主は板片へ檜の青葉を敷いた上に串團子のやうな物を載

せて二人の前へ置いた。

『名物の夫婦餅て御座います。』

よく見ると二種類あつて、一つは團子を平たくしたので、一つは豆腐を小さく長方形に切つたのてあつた。

『どちらが夫てどちらが婦かい。』と原は笑ひながら口に入れてから『一體、この山は何樣を祭つてあるんだね？』と亭主に訊いた。

『イザナギ、イザナミノミコトて御座います。』と答へながら、亭主は爐側に坐つて、夫婦餅を串に挿し、味噌を塗つては火のまはりに立てた。四十ばかりの顏の長い眼のきよろ〳〵する男てある。

鳥打を被り脚絆を着けた若者が、洋傘のさきへ風呂敷包を突つかけたのを擔いて女體の方から降りて來て男體の方へ行かうとすると、亭主は休んて行けと聲を懸けた。

『あの東つぱづれの腰掛けの向ふに道が付いてゐるがあれて眞壁の町へ降りれるかえ？』と若者が訊いた。

『あゝ降りられます。』と亭主は忙しく茶の仕度をした。

若者は急に引返して茶屋の前を腰掛臺の方へ廻つて行つた。

『あゝ』と亭主はあわてゝ『何處へ行くだね、お前さんは、今ゆつくり話してやる。よく間違ふ道だから。』

『なあに、山が降れさへしりや、手間を懸けて行つて見らあな。』と若者は大きな聲て答へてずん〳〵行

つて了つた。
「一體何處へ行くだね……ふーむ、眞壁か、眞壁なら其道て好えだ。」と亭主は忌ま〱しさうに浮かした腰を卸ろした。
二人は餅の價を聞いて銀貨を置いた。
「只今お剩錢を差上げます。」と言つてわざとぐつ〱してゐて二人が出ると矢鱈に「有難う御座います」を浴びせ掛けた。
男體の祉へ着く前に岩の鼻に造つた茶屋があつて、六十許の婆と四十ばかりの女とがゐて茶を出し、汚れ古びた望遠鏡を貸した。それて二人は、利根川の光るをも、東京あたりへ垂れ下つた雨雲をも、霞ヶ浦を走る帆船や汽船をも、潮來あたりの水陸の出入をも、銚子あたりの潮曇りをも覗いて見た。山腹の筑波の町も近く見えた。
「今夜は町へお泊りてすか。」と女が訊いた。
「あゝ……あんな途中に町があつて、あそこの人々は何う言ふ事をして暮すんだらう？」と原が言つた。
「すぐと下の平地に田がありませう、あそこまて降りて百姓もしますが、大抵は客商賣てすよ。」
「そんなに此山へ人が登るかね。」
「えゝ〱。もう一年中。雪のある時にお參りの方もあります。けふなぞは少ない方てす。」
「客商賣つて宿屋と貸座敷かね。」

『さうて御座います。』
『貸座敷は通りにあるんだねえ。』
『さうです。だから夕方なぞお客さんが町へ登つてお出てると、呼び込むものだから宿屋だと思つて入ることがあるさうです。』
『幾軒あります、貸座敷は？』
『貸座敷が七軒宿屋が九軒御座ります。』とこれは年寄の方が答へた。
男體の社の東側には山階ノ宮の測候所の壁が白く、高い櫓には風見がくる〳〵廻つてゐた。社では神主が出て神酒を注いで呉れたが二人は飲まなかつた。
『神主が變な顔をしてゐましたぜ。……うつかり賽錢を出したり頭まで低げた。』と鏈に縋つて岩の間を降りながら舘野が言つた。
『女體には女神が祭つてあるだらう。すると「安産のお札」があるかも知れん。僕あ温良貞淑の僕のワイフに買つて行つてやらう。』と原が言つた。
『こゝの安産のお札はきつときゝ目があるよ。』
『勿論さ。日本開闢の神樣だもの。』
依霙亭まで戻ると舘野は女體へ登るのは厭だと言つた。それを原が强ひて連れて行つた。狹い拜殿へ入ると、原は賽錢を置いてから、そこらを見廻した。

「あ、あつた〳〵。」と言つて、杯に神酒を注いでゐる神主に「この安產のお札はいくらです？」と訊いた。

「一枚二錢です。」

原はそれを始め一枚買ひ、やがてまた二枚買ひ足した。神主が賽錢の中から取出して寄越す一錢の剩錢をも受取つた。

「幾枚買ひました。」と社の背後に出ぬけて待つてゐた館野が皮肉な眼付をして訊いた。

「三枚。」

「ぢや三人產ませる積りだね。」

「三人ぢや少ない。一枚で幾人も產ませるんだ。近所へも貸してやつて、國家の柱石を澤山產ませなくちやいかん。」と原は笑つた。

一間程もない「天の浮橋」を渡れば直ぐ降りてある。女體の道は男體のそれよりけはしい岩石が多かつたが降りだけに苦しくはなかつた。「胎內くゞり」と言ふ息の詰まるやうな岩穴もあつた。「うしろ大黑」と云ふ大岩もあつた。饒舌な二人の批評家は、いろ〳〵な評語を投げ與へて過ぎた。

暗い森林帶へ入ると二人は言葉少なになつた。辛夷の花からでも放つやうな匂ひを館野がまつさきに嗅ぎ付けた。二人は藪を分けて花を尋ねたが、男體への途中でも見た西洋菫のやうな濃い紫の草花の外は見當らなかつた。降り盡すと櫻の咲いてゐる筑波神社のわきへ出た。まだ暮れなかつた。

神社の前から江戸屋の方へ入つて來る石段に年增の女と若い娘とが、こちらを背にして町の方を眺め

てゐた。
「美人らしい。此方を向け。」とこゑて館野が言つた。二人の足音で娘は振顧つた。
「宿の娘だつた。」と館野が續けて失望したやうに言つた。
二人は江戸屋の二階へ戻つた。原は館野に敎へられて、宿から針を借りて足に出たマメを潰し、飯粒を貰つて紙にのして貼つた。
「あの眼は好い。」と館野は、飯粒を持つて來た宿の娘を褒めた。
「東京を出てから美人を見ないので氣分が惡いとか言つてゐたね、君は。」と原が言ふと、館野は「胎内くゞりなど潛つたらますます氣分が惡くなつた。」と冗談らしくもなく言つた。
「安產のお札は何うだ？」と原が笑つた。
「ふむ……」
「兎に角今夜は美人を見やうぢやないか。」

「あれても女か、と言ふやうな奴ばかりだ。」と晩飯後町をぶらついて歸つた時館野が言つた。
「でも行くかね。」と原が言つた。「僕には今夜は要求はない。たゞ"go into the people"と言ふ心持だけだ。彼等の騷ぐ側で坊主のやうな一夜を過ごすも面白いな。」

「私だつてさうです。疲れ果てゝはゐるし、行けばたゞ好奇心からです。」
二人は、其夜八時過ぎに宿を發つた。

翌る朝は晴れて、西の天際にまだ白雪の儘の富士が見えた。二人は朝日をまともに受けながら筑波の山の町の石段を下つた。
「昨夜は大分賑やかなやうでしたね。」と館野が言つた。
「君の方のは大人しく遠ざかつてゐたやうだつたね。」と原が言つた。
「私は始め疲れてゐるからつて言つてゐますと、何か取りに行くとか行つて出て行つた切りでした。四時頃また來ましたが、こちらの勝手で遠ざけたのに、向ふで頻りに詫びを言つてゐました。」と館野。
「僕の方の奴は、退け前はあの通り僕等の座敷と表座敷の客の許を往つたり來たりして酒をガブ〳〵やるんだらう、僕等の許ては割合に靜かだつたが表座敷へ行くと、大きな聲で此頃覺えたらしい「ナンテ間が惡いんでせう」を連發する、客の注文外の物をドン〳〵注文する、氣違ひのやうに笑うんだらう——あれが君、格子の外て君が「これだけは一寸なつてる」と評したのなんだからねえ。そしてあいつは化粧をする時、眉毛を變に釣り上げたらう？覺えてゐない？……あいつの右の眼は入れ眼らしいよ。僕の顔をつく〴〵見て「中島先生に似てゐる」なんて言つた揚句、「眼は私の妹に似てゐるわ、妹の眼は膨れ

眼よ、私の眼は入れ眼よ」とつて指をちよいと右の眼へ當てた時、醉つた紛れの冗談だと思つたら、さうぢやない、ほんとうを言つたんだねえ。」

* * * * * * * * *

「君の室との境の襖を半分ばかり引いた敷居に一つの暗い行燈が置かれてあつた。それを見つめてゐると馬鹿にシーンとして、其靜かな所へ方々の聲や物音が際やかに聞えて來るんだ。腐つて行く物をジッと見詰めてゐるやうな氣持もしました。山て疲れ過ぎた爲に興奮してゐたらうし眼が冴えて少しも眠れぬうちに一時を聞いたよ。」

「君も眠れなかつたやうだねえ。——一時が鳴つて少しすると表二階もヒッソリしたが、其所と僕の室との間の室へ二三人入つて來てズー〳〵鼻を鳴らすもあり、遠慮の無い話し聲を立てるのもあつた。男が一人まぢつてゐたらしかつた。それを小染と、も一人の女て揶揄つてゐるんだね。「小染さん〳〵」と階下から、たしかあの黑痘痕の婆あの聲が掛かつた。二三度階子を登り降りしたと思ふと、今度は飯を食ふと言ふ騒ぎだ。それが今朝の二時頃だらう。あいつが「お茶漬ても仕方がない、早く香々を持つて來ていくろ」つて婆あに言うんだ。茶碗と箸と齒の音のカチ〳〵鳴るを聞いてゐると變な氣持がしたよ。」

* * * * * * * * *

原は昨日のマヽメを氣にして靜かに步きながら、斯う話した。館野は眠むさうに時々欠伸をした。

『一寸感じの好さゝうな家だと思つて入つたのがあれですからねえ。疊も古いし、夜具も薄つぺらで、ぐつと體を伸ばすと足が出るですもの。安い事も安かつたがすつかりディスイリュジョン(幻滅)だ。』と館野が癖の結論を着けた。

『僕の記憶では、…………………………………………。』

『昨夜のやうなのは滅多にありませんよ。私に忘れられない印象を殘したのは、橫濱です。金龜樓のお職て、名も忘れません。八疊の隅には朱檀の唐机に蒔繪の硯箱が載つてゐました。……………………………………………………。』

『君の體を見ると、フレッシュリイ・スクールとも思はれんな。目だけても滿足が出來ませう。』

『えゝ目だけて澤山てす。此間も神樂坂の繪ハガキ屋を漁ると巴里のオペラ座の女優の斯う』と館野は彼自身の片肘を擧げて曲げて見せ『柔かい腕の曲線を見せたのがありました。あんなのは、見たゞけて好い氣持になります。』

二人はブラ〱と北條町まて步いた。

『君、この邊から見ると、筑波山はまるて墓が空を向いてるやうな恰好だねえ。男體と女體とが飛び出た二つの眼球のやうて。』と原は振顧つて斯う言つた。

『何處から見てもあの山はあゝ見えます。』と館野が答へた。

北條町の立て場て馬車に乗る時、館野は『斯う言ふガタ馬車に乗ると、私はよく、誰かの書いた「鴨」と言ふ短篇を思ひ出します。』と言つた。『うむ、客の脚と〳〵が「松葉つなぎ」に組み合はされると言ふのだらう。美人が乗らなくちや物にならんね。』と原が答へた。

八人乗の馬車へ七人まで乗せ込んだが、御者は喇叭ばかり吹立てゝ馬を着けやうともしなかつた。立て場の家の上り框には、白髪て盲目らしい婆が四角な火鉢に倚り懸かり、何かを口へ入れてはモグ〳〵させてゐたが、馬を着ける爲に立て場の亭主や御者共が騒ぎ始めると、その皺だらけの顔を往還へ向けた。馬は荒馬で、それを馬車へ着ける爲に四五人の男が走せ廻つた。

すると、すぐ其所の町の角へ黒の吾妻コートを着た肥つた廂髪の女が、海軍帽を被り青つぽい小倉の袴を穿いた五六歳の兒の手を曳いて現れた。

『恐いね。また引くり返しはしますまいか。』と女は眼を瞬つて、馬車へ近付き得なかつた。

『土浦へはこれが終車てすよ。お乗りなさい。決して先頃のやうな事はありません。』と御者に勸められて、其女は兒を連れて馬車の背後から乗り込んだが『大丈夫てせうかね？わたしは二三日前に、別の馬だつたが溝の中へ引込まれて。』と外の客に訴へるやうにオド〳〵した調子て言つた。

いよ〳〵曳き出すと、馬は案外靜かに走つた。八人乗へ九人乗せたので、肥つた母親は其兒を膝に据ゑ

た。母親に似た眼の強い口の大きな兒は、暫らくの間はコートの上から母親の乳房をほじり出さう〳〵とつとめたが、母親が拒むので止めて了つた。そして母親の膝から摺り落ちて、外の客の方へのけ反りながら、母親の袖を引張つて「何かア〳〵!」と強請り始めた。店屋が見える度に泣き聲を立てたり烈しい身悶えをしたりした。「土浦へ行つたら昔の刀を買つてやる。」と賺しても默らなかつた。とう〳〵靴を脱いで、狭い車室で突き合はせた客達の膝の上を矢鱈に歩き廻つた。眠むさうに眼を瞑つてゐる館野は、時々、憎惡に滿ちた大眼球を剝いて其兒を睨んだ。

とある途中の立て場へ着くと、「筑波太々松明講　下總松戸」と藍地へ白く拔いた小旗を幾つも春風にそよがせて、鮨を壓したやうに客を詰込んだ三臺の馬車が、馬首を北に向けて止まつてゐた。(四月十八日稿了)

「男體女體」も止むを得ず、例の手段を採つた。二ケ處の伏せ字と、星印の入れてある二ケ處である。編輯者の遺憾は此上もない。更に讀者及作者に深く謝さなければならぬ。(記者)

和歌

尾上柴舟選

○　小澤紫紘

熱さめし朝のからだのすが〳〵し麥の穗延びし畑道を行く

うるみたる彌生の空にほの白う櫻咲くらむ朝をうれしむ

いとけなき夢をし捨てゝ走れどもまだ新らたなるよろこびもなし

さくらちる夜の空氣のやはらかさ醉いつしかうるほひて來ぬ

花ちりてあとの梢の風悲し彼方に春のうしろでをみる

さくら既にちりはてつらむ香取なる人を思うてもろくさしぐむ

今もこひし母校の庭の櫻など青葉しにける初夏の頃

母校てふ名に引かされて思ひいづ初戀人のリボンの色も

春の月くちなし色に匂ひいづ花ちりそめしさくらが上に

○　逸見雨山

人思ひ倚るとしもなき夜の窓額にふれたる玻璃の冷たさ

そらさむとあげし瞳にふと入りぬヒステリカルの星のまたゝき

長椅子に落ちたる赤き絹絲の光れり春の風かをる朝

遙々と來しは何事さびしさにたんぽゝ一つ摘みて歸りぬ

春の雨音しめやかに降る宵はランプ押遣り頰杖をつく

今日も亦するどき聲に鳥が啼く白う乾ける河原の石に

○　佐野光雄

いと古き心抱きてあたらしき世に來し如し春の日の街

霜白き家根にみだるゝ機關車の火の子美くし月

夜ながらに

爲す事の多きが中に手を組みて用なき人の如もありけり。

緣側に春日ながれて桃色のはみがきの粉はやはらかに散る

めさむれば既に朝なり、冷笑の如くに白きひかり覗ける

日曜日遊び暮して夕べまたかなしき家の人となりにけり

春のあめ二階より見る海岸の一線白くとほく走れり

紅き緒の雪駄のあとを春の塵少しにごして輕く舞ひ立つ

あたらしき音色もたらし春のかぜ百年老いし都にぞ入る

○　安井竹美

春のひる上沓のまゝおりてふむ庭の草生のやはらかさかな

うす赤く櫻のつぼみ光る日の午後なりかろき病ひにふせる

人まてば心しづかに疲れきてさびしく野路の春にとけあふ

風なきし梨の梢のひとふさの花にあつまる春の日光

みつめたるまぶたの重さほの匂ふすもゝの花に虻のめぐれる

熱ひやしあとのかわけるこゝろもち劇場をてる時におぼえぬ

○　小出秀月

茫として青くけぶれる野の森の光の中に鶯のなく

さくら咲くこの一山の靜かなる午後の光を浴びて立つかな

君とあり山の麓のほそ川を遠く見遣りて涙ぐみつゝ

わが思ふ人と二日は見てありし山のさくら咲くなる春となりにき

限りなき林の中にうづくまり小さき我れの影を見まもる

夜となれば君を思ふにほかならぬわれの心の惜しくもあるかな

○　押垣青花

行きどまりし戀のかなしさ野にいて丶ふと春近き風にあひけり

たそがれのすてどころなき氣まぐれの煙草のけむり部屋にうづまく

蕾もつ櫻のかげの夕暮の微溫の中にものおもふかな

蒲公英の光りてとべるひるすぎの草生をふめば心うれへぬ

孕みたる犬のまどろぶ若草に春の微溫のたゞよへるかな

○　武田青眼

事多く心と違ふ今日をなほ己が力を信じてぞ生く

郵便の來ぬ日は淋しなにとなくその日ひと日はあだなりしごと

ひとひらの雲靑空に哀しめり似たりなわれの野べの逍遙

しめやかに戸の外にふる雨の音の君が寐息に交るしづけさ

○　松島落果

木の肌のしろきあだめに淡雪の雫はしめる心さびしも

いろづきて秋より冬のをはりまで落葉する木のさびしかりけり

夕さればうすら明るくひかりいづ山並の空のかなしなづかし

梅つぼみそむればはやも西方のかなしき山の肌見ゆるかな

靑澄める空に哀しくかゞやける尾の上の雪の朝のうるほひ

○　松井綠水

たゞれたる悲しき舌になんとなう煙草のけむのしみぐあいよし

午後の日に明るく光る豆の花人を思ふにもろき淚よ

茫然とくれ行く春の疲れをばふところ手してながめてありぬ

此の春をふさぎかちなる子のあはれ酒を又なきものと思へる

○　太田忠太郎

親と子とはなればなれに住むごときこの夕ぐれのかなしかりけり

こゝち悪う酔ざめの身に着きて寢るよごれし夜具の襟のつめたさ

このまゝにむなしく夏に送られむ身はいたづらに肥えてあるかな

○　桑田白水郎

ひと葉一葉ちりゆく秋のゆふべより春の芽立ちのものゝあはれさ

朝夕に仕事にかよふ道すぢの草も日をえて青にかへりぬ

ストーブに蓋して春をおもへらくげにや柳も青になりけり

○　佐野珂村

悲しみをすてよ第二の生活に入れよと涙心をそゝる

日が落ちし後の明るさ快さ君を誘ひて川を見にゆく

氣がつけばいつしか丘に來てありぬふところ手して川みてありぬ

○　鈴木風影

白き花着けし小草の一様に丈(たけ)を揃へて風になびけり

六月となりしよろこび綠葉に集ふ小鳥の若き聲など

虻多き納屋の後(うしろ)の豆畑に櫻の花の斷えず散りくる

河ぎしの造船局の鎚の音魚釣る人に憎く響きぬ

半身を湯槽に沈めつく／＼と春の眞晝の日の色を見ぬ

○　訥鶚軒

行先を問はるゝまではあてもなく電車にのりてありしわれかな

たらちねの親のたまひし名にそはぬ人となりしがあさましきかな

物みなの足へる身にも君は似ず悲しきことを知りたまふかな

罪おほき生活なれば反省(かへりみ)も日記ものせて疾く寢入りなむ

○　福山杜鵑花

泣きて見つ笑ひては見つみづからの生命いろどる哀れなるかな

悲しきは旅の路傍に見てすぎし町の女のくろきひとみよ

なすことなししひてなすことみづからの意にあきたらず寂し春の日

春といふものにあひたる寂しさよ櫻咲くなどあづからぬこと

○　山崎俊夫

つまはじきせらるゝわれと思はねど唯何となく人をさけにし

小鳥らがなく聲などを床の上にきくわが着たる寐卷の白き

蒲團など冷たき窓にもち出て日に晒しゐる朝のさびしさ

○　木暮刀水

なに事も興醒くと見て我が胸に手をおくばかり悲しきはなし

朝ごとに宿をはなるゝ旅人のさびしさをもて我が門をいづ

かなしみは港につどふ船のごとあまた重荷をまた運び來ぬ

○　佐藤紅潮

うら安う日光を浴びゆるゆると春の街ゆく若き一群

瀬の音の輕うきこゆる堤防へたそがれ時をしたしみてゆく

萌えそめし草に陽を浴びまどろみぬ吾らの春のうつくしきかな

○　森一雄

ふと一人貌よき人にあへるより加治木忘れぬ旅のかなしみ

旅に行きてこの淋しさを捨てんとす空はあくまて晴れてあれかし

父を措きてひたすら母を思へるが悲しき事の一つとなりぬ

○　井田葉歌

うそ寒く小雨交りの東風ふく厨の窓の春のかなしみ

雪解の泡の浮き來る大川を物も思はずしばしみつめし

○　西村孤舟

十二疊われ一人ゐのさびしさに夜ごとに床のとりざまをかゆ

菜の花の黄ばめる中に立つ女電車のまどに須臾にして過ぐ

○　林　白愁歌

羽切れしつばくらの如き友一人漂然として入り來りける

港の灯空に光れり我れ等又夜の街歩み宿尋ぬ可し

○　水乃夕草

君なりしか君なりしかと思ひつゝ砂丘に來れば涙さしぐむ

○　二松泰河

朝寢せし鈍き瞳に沁み來る雪解の朝の日のひかり哉

○　失名氏

春來ればいたつきながら野に出てゝ木の芽ふく木を見て涙ぐむ

廢園に小鳥巢くひぬ足るを知る幸者（さいはひもの）の春のいとなみ

○　早川忠雄

五時といふふたまた時はかなしかり灯のある家と窓あくる家

○　橋本芳生

亡び行く淋しき町の人々は戀を思はず旅を思へり

○　池内啄耳

煙草をばすばすば吸うて日暮れ時灯のなき部室にはらばひてゐる

○　土橋石花

一時は肉の苦しみ靈のなげき街のとよめき交々に來る

應募和歌は
東京市小石川區原町百三十三尾上柴舟宛の事

俳句

焼野山

高田蝶衣選

兵村の野焼の神事馬も曳く　月精
焼野灰幾日荒磯に漂へり　同
焼野夕日に脚長人が動く見ゆ　同
焼原の撫て風を馬のおびえ過ぐ　同
山焼くや木徳の祠に賽もして　同
野焼跡三月市の杭を打つ　波月
山焼きしを覧の灰に呟けり　同
野を焼くに留魂石を憚れけり　同
風鬼去り雨鬼に焼野を煙らせり　同
焼野來て殘葩に揺ぐ旅愁かな　木犀
山焼くや髒境の駄酒も來る日和　同
上湯中湯隔つ榛原焼く火かな　同
機杼薄暮山焼く火光隣の目に　同

野焼け延びて山背人の異議に來し　雨郎
里に流行る疱瘡や奥の野焼頃　同
野焼人歸る頃月は湖に映えて　同
野焼盛るに明う見ゆ峯の鋒岩も　同
山を焼く里人に騒ぐ僧徒かな　影法師
賊が藏せし鼎拾ふや焼山に　同
山に火を放つ虞芮の黨かな　同
火を好むもの栖む山を焼く神事　同
山焼や狠火を思ふ南部口　水竹
山焼いて蝦夷の塚を祭りけり　同
果なしと見しに法螺聞く野を焼けば　同
山焼けて村もめ寄るや炊く大釜　但翠
歌にある杣灯おもふ奥の山焼くに　同
野を焼くや御屋根葺萱貢ぐ國　同
山焼けて頓に峨々たる徑かな　嵐舟
まらうどや野焼見ゆ窓淋しがる　同
贏さぬにきまる日和や山を焼く　同
辻君の眉焦しけむ焼野火や　不寐庵
公事山に焼き及ぶ由第三夜　同
山を焼く沙汰豫め雉兎にもす　同
山姥の舌焰思ふ山火かな　三石

野を焼けば涸る丶沼風や暮色引く　同
山焼けば神樹の鈴霞む　同
山鳴のやめば焼くなる掟かな　綠星子
野を焼けば遠遊び鷄鳴くしきり　同
無住寺の怪碑に野火をくひ止めぬ　同
湖照りす雲寄りや何處山焼くる　寒泉
醜草は伸びやすし焼野寸の青　同
野山焼く兎角の沙汰も爐主なるが　同
水車醫を頼まんに雨の末黑野を　冬城
發心の兒を倶せり渡頭野火を見る　同
湖濁り釣りにはよけん野焼頃　一酒
焼野寺に殺生供養の人凪げる　同
牛蒡の味落ちて野焼かん日も近し　松蓼
水地の民野を焼きて立つ講參り　同
雨呼びの夜露か野火に染められて　花馭史
箕埃を掃く納屋の戸や野焼映ゆ　同
野焼き居れば鍋錢と見えて石上に　摘星辰
雁もはや去りけりな北山焼くべかり　同
通り雨焼野の巣の雛さびに　百幽
野焼止む所人家や夕映す　同
熱の捨てし土器かほど焼野捨井古る　螺洞

女夫瀧の中山を焼く燧火かな　南子
巫女のいふ疫氣領す野を夕焼く　都月
森の妖婆見しとも夕べ野焼して　哭鬼哉
武に農兵の制もあり山焼くる　一兀
澳荒れを流人悲しむ焼野かな　燕閣
又行ば焼野鼬を畑に見る　人生
旅人の笠に焼野の埃かな　秋紅
奉幣今絶えし塚山焼きにけり　狠子
山焼や渓に溺れし孕み猿　無哲
積石を野火喰ひ止めの雛かな　十盥
地震ふつて避けし二日も末黑小屋　馬峯
山焼や蛸壺かける潮よどみ　蒋柿
野焼く匂など雨に這ふ山下居や　竹美

課題　茂　五月十日締切
　　　能　六月十日締切

規定　△淡路國假屋在釜口高田蝶衣宛
　　　△一人三十句限字體明瞭之事

抹消（前號）　食客の衣も糊して干す春日　波月

評論

露國最近政局

形勢變轉、端睨し難きを思はしめたるものは三月下旬より四月にかけての露國政界なりき、而して其前半は守舊派、親獨派其責に任ず可きものなるも、後半に至ては、實に之を首相ストリヰピン伯の罪に歸せざるを得ず、

在職四年九箇月、勢名隆々たりしストリヰピン伯は、何が故に俄かに骸骨を乞ふには至りたる、こは一旦下院(國民議會)を通過したる波蘭縣會案が、上院(帝國參議院)に於て否決せられたるに基因せり、然かも由來政府の爪牙たり、專制政治が恃んで以て鐵壁とせる同院は、如何にして飜然態度を一變したりし乎、是波蘭縣會案其者が幾分自由的進歩的たり、彼等の意に合せざりしに依らんも、亦たス伯が地方官出身として中央閥族と因縁深からず、少くとも、ヅルノウォ、ツレボフ等一派と相善からず、後者が機會だにあらば、ス伯內閣を顚覆せんと熱望し居たるに出でずんばあらず、

是に於て乎露帝は一旦辭職聽許に內定し、現藏相にコ、ウツオフ(守舊派)に後任を命じたり、然かも皇太后マリアの干渉は來りぬ、形勢は逆戻りし、ス伯留任し、ヅルノウォ、ツレボフ一派は却て上院出席を差止められ、內閣の危機も一應無事解決を告げたりき、

之丈けならば、ス伯は確かに成功せりと言ふ可かりき、恐らくは英雄、伯の如きの士も、亦得意の勢に乘ずる性癖を免れざりしを、即ち留職後、伯は卒爾停會の命を議會に下し、同時に波蘭縣會制(議會の是認を經ざる)を布くの勅令を發したり、蓋し露國憲法に依れば、議會閉會若くは休會中、皇帝は議會の承諾を待たず、或る法令を發布し得るを以て、首相は態々議會を停會し、以て波蘭縣會令發布が違憲となるを防止したる也、

然り同令發布は少くとも形式に於て違憲たるを免れき、併し精神に於て果して違憲にあらずと言ふを得可き乎、露政府當局は果して斯く公言するの勇氣ある乎、

露國上院は激昂せり、四月十四日首相か百方辯解に力めたるに係はらず、五十三對九十九の多數を以て違憲の措置と認定したりき、又下院に於ても十月黨以下從來首相の味方たり、波蘭縣會案にも贊成したる諸黨派迄、此議會無視の非立憲的行動に對しては之を非難せざるを得ざりき、次で首相辭職説は再び傳播せり、幸ひに此事無かりしと雖も、上下兩院に於けるス伯の勢力は、最早や安固にあらざる也、

是を之れ四月下旬露國政界の現狀とす、而して時局は刻々變轉しつゝあれば、神明にあらざる以上、誰か能く將來を豫想せん、遮莫ストリキピン伯は、露國の一大達識的政治家也、加ふるに辛辣の雄腕を以てす、恐らくは胸裡、狂瀾を既倒に返へすの明策妙計あらん、論評子は、玆に多大の注意を以て讀者と共に、ス伯今後の對議會策如何を見んとす、蓋しス伯內閣の繼續と否とは、是英露協商が繼續するか、將た多少增進せる獨逸の對露勢力が更らに增進して英國を驅逐す可きかを決定する所以なれば也、況んや又日露關係にも自然至大の影響を見る可きに於てをや、

米墨中立地帶問題

米國墨西哥間に中立地帶を設けんとするの議起る是米國政治家の畫策と傳へらる、

中立地帶の議、恐らくは眞意にあらずして、敵は寧ろ本能寺にあらん、吁嗟先きにテキサスを奪ひ、カリフオルニヤを奪ひ、弱小邦國の領土を削取して恬然たりし自稱文明國が、巴奈馬運河開通期切迫の折柄、南進策に焦慮するも、亦何の怪む所ぞや、

民主黨の天下

四月四日米國臨時議會召集せらる、民主黨員喜色滿面、何事をか語る、共和黨員に至ては態度悄然、前日の氣勢無し、

是今議會より愈民主黨の天下とは成りたれば也、

(備考　下院議長にはシヤムプ、クラーク氏(從來下院民主黨首領たりし人)選擧せらる、下院に於ける議員總數は三百九十一、民主黨員二

百二十八、共和黨員百六十一、社會黨員一、缺員一、民主黨多數六十六、上院に在りては共和黨猶少しく多數なるも、正派と一揆派とある爲め矢張り中間に立つ民主黨均勢を左右す）

伊太利新內閣成る

三月二十九日、伊太利ルザチ內閣の辭職、聽許せられ、次てジョリチー內閣成る、其顏觸下の如し、
首相兼內外務大臣ジョリチー、國庫大臣テレスコ、財務大臣フアクタ、陸軍大臣スピンカルヂ、海軍大臣カトリカ、土木大臣サッチ、文務大臣クレダロ、農務大臣ニッチ、遞信大臣カリサ、
此間注目を惹くものは首相が外務大臣を兼攝せること、農務大臣が社會黨領袖ヒスソラチに落ちずして急進黨ニッチに落ちたることと是也、
何故ぞや、首相ジョリチは二年前自己の內閣に外相たりしチットニの奮起を促したれども、峻拒せられき、是表面の理由は兎も角も、事實は對墺政策に關係すと思はるれば也、以て伊國外交が案外困難の境遇に立てるを知るに足る、又社會黨領袖が一旦入閣に內定しながら、俄かに中止したる所以は如何、是れ同國社會黨の勢力が評判の如く偉大ならざる一證なる可し、

伊國五十年祭

一方に內閣更迭を見たる間に、伊太利帝國は建國五十年祝祭を擧行せり、
顧みるに伊太利帝國を成立せしめたるは一八五九年、一八六〇年に在り、然れどもヰクトル、エマヌエル二世が伊太利皇帝の名稱を執りたるは、實に一八六一年三月なりき、是伊太利官民が本年三月二十七日を以て祝祭を開始したる所以ならん、
思へば南歐の半島をして、統一以て强國の班に入らしめたる伊國愛國者の功業は、洵に偉なるかな、マジニー、カブール、ガルバルヂーの徒、亦以て瞑す可し、然かも伊太利の發達は寧ろ未來に在り、其事業も亦未來に在り、ジョリチー、ソンニノ、シユリアノの徒、能く國運を指導して、先人の志を愧しめざるを得る乎否乎、
（伊太利祝祭に關して羅馬に博覽會あり、日本人の出品も多しと傳へらる）

對淸一億圓借款

英米佛獨の對淸借款成る、金額一億圓、手取九十五、

滿洲の煙草税、アルコール税、營業税等五百萬圓、及清國全部食鹽税附加税等五百萬圓を以つて擔保としたり、之に對する世上の批評紛々たり、

同借欵の成立は兎も角も米國の勝利也、英佛獨と異り一の借欵を清國に有せざりし米國の資本家が實に本契約の張本人なれば也、試みに左の列國の對清投資表を見よ、

英吉利　一億二千六百九十二萬五千圓
獨　逸　三百九十萬六百圓
佛蘭西　一億二千五百二十七萬四千七百圓
露　國　一千六百萬圓
白耳義　一千六百四十萬圓

右の外に

英獨シンヂケート　二億八千八百九十八萬七千圓
英佛シンヂケート　五千萬圓

（此外に列國共同の對清事件償金未拂六千五百萬圓あり）　（一九〇八年末計算）

斯く對清投資上一歩を列國に輸したる米國、今や俄かに踴躍して好機を攫むに至れり、東洋經營に熱心せる大統領タフト君等の欣喜如何許りぞや、

次ぎに借欵の使途如何、傳ふるもの曰く、六千萬圓は之を幣制改革に投じ、三千萬圓は之を滿洲興業費に投じ、一千萬圓は之を他の目途に使用せんと、幣制改革頗る可、是則ち清國現在通貨の紊亂を救助し、外國貿易の發達を增長する所以ならん、然かも三千萬圓を滿洲興業費に投じ、又滿洲諸税を擔保とせるに至ては誰か我が利權に肉薄するの感無きものぞや、

霞ヶ關の鼎の輕重は、業に已に幾度か之を問はれたり、吾人は今更ら之を縷説するの勇氣無し、然れども失敗は遂に失敗たるの外無きを奈何、

國際仲裁條約

廣大の範圍に亙る英米仲裁條約の締結說起るや、獨逸宰相ベートマン、ホルウエヒ氏、議會に於て辯じて曰く、

軍備制限の問題は一たびに相互的支配の問題に及べば直ちに無効となり終る、即ち他國と比例して如何なる程度の武力を一國に許す可きやの問題に逢着すれば、直ちに行惱む、

又曰く、

英國の如きは二國標準主義の海軍計畫を定めたり是

英國の權利なり、然かも此主張を以て國際的協約の基礎となすは、全然別箇の問題たらざるを得ずと、論じ去つて肯綮を得たるもの、仲裁條約可なりと雖も、未だその事を決定するに足らざる也、何ぞ武備の制限を近きの日に求むるを得ん哉、

摩洛哥と英獨

摩洛哥は佛蘭西、西班牙の勢力範圍也、獨英兩國に至つては、政治上今や殆んど與らず、

然かも此政治的關係、疎遠なる英獨兩國の摩洛哥貿易が、却て佛、西兩國以上に發達しつゝあるは何故ぞ、最近發表の一九〇九年同國貿易報告は語つて曰く、英國貿易は前年に比し三百三十萬圓を增加し、獨逸は一百十一萬圓を增加したり、西、佛兩國は之より下位に在り、前者は九十萬圓を、後者は七十萬圓を增加したりと、此形勢にして繼續せんか、將來歐洲政局一變の曉、英獨兩國にして異議をアルゼシラス協約（西佛兩國の勢力を承認したるものと見る可き）を挾むあるも、敢て怪む可きにあらざる也、

日英關稅協定

日英關稅協定成りて、英國民悦ぶ、我國民に至ては之を賀するものあり、之を弔するものあり、

遮莫、吾人は濶大なる態度を以て寧ろ之を賀せんとす、何ぞや、少くとも日英親和の基礎は、斯くの如くにして漸く動搖を免れたれば也、又本來自由貿易主義を執れる英國に執りては、今回の讓步も甚しき恩寵と見る可きにあらざれば也、然かも最初無益の氣焰を議會に揚げて、同盟國民の惡感せる小村外相の態度と其他外交の巧拙とは、勿論問題外也、

（懷沙隱客）

東洋趣味、西洋趣味

江塔生

負うた子三年の諺がある、これは我子の脊中に居るのを忘れて迷ひ子〱の長太郎やァいて駈け廻る女の愚を嘲けつたものだが、我國の近い歷史の跡を振り返るに矢張是てはなからうか、子寶は己が脊中に在るのを忘れて他人の寶をばかり羨む、そしておい何だい何

よりも結構な實を脊中にちやんと載つけてるぢやないかと言はれて成る程と氣付く。が聊か違ふ處は其子の存在を忘れたのぢやなくて其子の寶なのを忘れたのだ、それて荷厄介にして何處ぞ間の宜い處があつたら抛りたいとばかり考へて歩くのだ、其中他人が見付けて善い御子さんね、子寶さんね、と寶の字迄付けて褒めて呉れると、成る程左樣かと俄に御目出度なり、打ちやる處か今度は神輿に載せて擔ぎ廻る事をする、ノロ松の金煙管を眞鍮煙管と心得て、肩身狹く一服吹かすと直ぐ筒へ挿込む奴が、おい見せろ立派の金ぢやなといはれると俄に其氣になつてヘヘンもので人樣の前を大ッぴらにいぢり廻す樣のものだ。目の見えぬ事甚しい。近い處で武士道などは大分屑籠の中へ抛り込まれ日清戰爭後に新渡戸博士の横文武士道が僅に海外で好奇的にもて囃された丈、本國の日本では若い書生など煤くつた過去の遺物位に押片付けられて居たものが、日露戰爭後になると英國あたりから褒め出して來た、ちびな日本人が巨人の露西亞人を負かしたが、それには必ずいはれ因縁なくんばあらずと碧眼紅瞳にアナライズして探り當てたのが漸く三ヶ條ばかり、其第一が此武士道だつた。すると如何にも左樣だてな事でグッとなり、家重代の唐櫃の底からハタキを掛けて床の間に飾り立てての今の有樣である。今一つには宗教と教育の分離て、是も其以前には日本人には宗教心が薄いとか何とかかとか大分御詫もあつて、此宗教と教育との互の獨立を以て眞額から誇らしく書看板を押し立てたものはなかつたのだが、是も同時に彼方から褒めて貰うと、成る程是で露助に勝つたのかなと考へて見る、今一つは最も滑稽の菜食だ、菜食などはゼンなしの禪坊主のやる事、日本人は一體佛敎に魅せられて殺生禁斷で靑くなつて來たんだ、西洋人は肉食するから彼樣に脂切つて見るから生氣に充ちて居る。人には肉食すべく牙齒が存して居るなどといつて騷ぎ、禪坊主迄が袈裟さへ脱げば喰つても構ないなどといつたものだが、何くんぞ知らん日本人の強き所以は菜食に在りなどと同時に聞くと、左樣かとばかり感心して昨今は又菜食主義を奉ずるもののあるとも聞く。騷ぐ當人は平氣で居るが側から見たら些は滑稽でも堪るまいし、或は餘り淺識短見、操守する所がないので歯痒くても堪まるまい。なぜ斯う迄浮薄なのであらうか。

　私は之を東洋趣味。西洋趣味の點に於ても亦同樣に考へて居る。昨今では少しく知識あると自惚れる階級、

側から見てハイカラとする階級となると、まだ趣味に於ては妙に西洋よがりばかりする。音樂に於ても三味や琴は駄目だ、ピアノ、ヴァイオリンだ、それてオルケストラだ、長唄なんか如何なるといふ態度、舞踊よりもダンスといふ好み。詩歌、小說の次第に範を西洋に採るのは言はずもがな、更に繪畫其他の藝術に於ても漸次其傾て進んて居る。西洋畫流行て日本畫家も表に強い事を言ひながらそろり／＼移りかけて以前の樣な放膽な一筆描の山水花鳥は影を隱し、丹を糸の如くに引き並べ、紫を毛の如くに塗り重ねた風のもののみが其數を殖して來る。能樂の如きも九段の能樂堂あつて亂流の砥柱と控えて居るけれども頹勢を如何せんといつた樣な有樣て居る。以上はザラに並べて來ただけ、吾人は一々に亘つてそれが盡く絕好絕妙のものだとはいはぬが、併しながら吾人は直觀し大觀して優に西洋趣味を離れて互角に對立し得べき特色を有する東洋趣味なるものの存在を認める。管々しき敍述は此處に許さぬから遺憾ながら走るが、私は曾て之を以て田中王堂學人に語つた事がある。其時學人は之を「東洋趣味は單純なる形式の中に複雜なる內容を現はすものだ」の一語て言ひ現はされたか、誠に左樣てある、此一語が最も能く明瞭に我東洋趣味の根柢を語るものと思ふ。即ち東洋の文學藝術なりは、最初は單純なる內容に單純なる形式てあつたろうが、時代の進步に伴ひ民族の文明に趣くに從ひ、思想內容は複雜となるから在來の形式のみては到底滿足な表出を見る事が出來ぬ、其場合に西洋ては形式をも亦內容に從つて複雜にすべく改めて進んだのだけれど、東洋ては最初の形式其儘を助けて如何に此單純な形式によつて複雜な內容が現はさるべきかと工夫した、其結果連想作用に多く訴へるの方法を取り、文學藝術にはそれを誘導すべく暗示を豐富にする手段を講じた。斯ういつては極めて抽象的だが、日常目睹耳聞する所のそれ等に向つて仔細の注意を拂ふがよい、必ずや默會する所あるに相違ない、俳句や歌が既にそれてある。ウヲーヅウヲールスの水仙の詩は佳作といはれるが、大江丸の「水仙や門を出づれば江の月夜」に比して、何れが暗示的てあり、何れか暗示的てなきか、そして何れか餘韻あり何れが餘韻あらざるかは明瞭だと思ふ。ウヲールヅウヲルスは長坂某の沙門良寬歌集の序にも引かれた樣に、何處か東洋趣味のある詩人だが、併し尙ほ相去る萬里の感を免れぬ、良寬の「焚く程は風がもて來る落葉哉」は永

く彼等の門障を覗くを許さぬ趣がある。能樂鳥追を見ても左近尉が花岩に乘らす其船の如き、活歴派の芝居を見た目の標準ては幼稚極まるともいはれ樣が、前述の用意を以て見ると俳句同樣の趣味が出る、更に墨繪の所謂文人畫の如きを見ても、筆勢遒つて苦澁し、忽にして走つて達磨の衣皺を作りもする、其處に幾多の暗示の力て連想が働き、油畫などには見ること出來ぬ氣韻の生動を見る。私は西洋趣味を以て東洋趣味より優るとか劣るとかはいはぬ、否優劣はない、互に異なる軌道の上に立つもので比較はならず共に並び存すべきものと思ふ、換言すれば人類より其何れを奪つても何となく趣味に貧疎を感じ、寂莫を覺ゆる事と思ふ。人の皮膚には黃白の差別あり文字には横書縱書の差別ありとしても微妙なる情緒の働には共通點があり、暫くは互に諒解する能はずとしても何時しか自然に或は人爲に何等かの方法を取つて相融合しあふ時が來るものだ、して見れば東西交明接觸の結果東西人種交通の結果として、何時かは彼の趣味の我に悟らるゝ時のある如く、又我の趣味の彼に諒解せらるゝことなしとせぬ、東洋と西洋とてシンメトリーの取り方が違ふ、彼の左右齊整するを欲するに對し、我は左に奪へば右に救ひ、右に奪へば左に救ふを欲すると稱するけれども而かもラオコーンの立像は東洋流のシンメトリーに叶つて居る、我迚も生花や舞踏に於ては變化萬狀曲折極らざるを愛するけれども、顏面のみは西洋流のシンメリーてなくては承知せぬ、右の瞎眼兒には左の觀骨如何とやらなるべしと活花式の注文を付けるものはない。して見れば彼此己に量の多少の差こそはあれ、互に默會すべき共通の情的要素は持つて居る。日ならずとか月ならずとかは言はぬが、遠からぬ將來には屹度彼等は東洋趣味なるものに一種のシステマタイズしたる解釋を與ふる程の諒解を得るに至るべく、すると武士道的、宗教對敎育問題的、菜食的に彼方から褒め出されて俄に又此方て騷ぎ立つ事ないともいへぬ。狩野芳崖は今ては一代の巨匠と仰がれて昨秋上野に其遺墨展覽會が有つたが、眞筆の點數甚だ少く、原畫は多く米國に在るのだ、是れ何によるかといふと明治の初年には芳崖などは、極言すれば大道繪師に近い程にも見られ一枚椽大の筆到底朝夕のパンを得るよすがとはならなかつた、それを夫のフエノロサ氏が發見して、千金遠く購ひ去り、多くの畫幅を本國に齎したによるのだといふ。それからして世に知られて多少末年には花を咲か

し、今ては明治の一大書聖とも見られて居る。即ち我東洋人の發見し得ざる趣味を却て西洋人によつて認められて居る例の、此樣に明確なものがあるではないか。此の如きは我國民に對し長へに一大恥辱を美術史上に於て殘すものだが、豈獨りこれのみならんや、ボカンとして居ると復たも此樣な愚擧を再びし三たびすることなしとせぬ。私は我國民の賢き智慮を用ひて猛省し、他人から我背上の子寶を教えて貰はぬ樣にしたいと思ふ。

新刊批評

▲新苦學法

島貫兵太夫著
警醒社發行

力行の逆境者に取つては、如何に賴もしい著述であらう。如何に力のある書き方であらう。新苦學法とは此書の末に錄してある「新苦學法」に對する內容の名である。精神的に、實行的に、導かぬまでも、而も好個苦學生の友である。(金四十錢)

▲早老の豫防法

ヘルマン、ウエーベル原著
大西直三郞摘譯

七十六歲何壯者を凌ぎつゝあるドクトル、ウエーベル氏が自家經驗の衛生講話である。これにベルツ博士の長壽論の附錄がある。(樂山堂發行金二十五錢)

▲小品 初汐

並山拜石著
大阪駸々堂發行

小品二十餘篇に、テニズンの詩數篇の譯がある。體裁は此頃流行の氣のきいた袖珍本である。(金四十五錢)

▲破壞思想の救治策

添田壽一氏著
博文館藏版

大逆事件あつて以來所謂破壞思想なるものが國民の注意に上り、其救治策を語ることが一種流行の觀を爲して居る、此書も亦是によつて生れたものである。添田博士は我國の破壞思想の發因として第一に思想界の不統一、第二に新奇を好む人心の弱點、第三に敎育の方針を誤り智育に偏すること、第四は有害無益の著書の多いと、第五に經濟上の變化に伴ふ生活の困難、第六に封建の餘弊たる武士は食はねど高楊子の遊食を欲する

もの多いこと、第七に家族制の弊頹等を枚擧してある、而して其最大因として第七の救治策に最も重きを置いてある。我輩は以上歷擧の事實は事實だから事實としてなら無論證認するが、聊か其大小輕重の定め方に於て博士の睨みはあらぬ方に外れて居ると思ふ。我輩は幾多の現代思想界の恐るべき潮流を見ては居るけれど、大括すれば經濟上に基因する社會主義の思想と、青年の頭腦を支配せる懷疑的思想との二つに歸すると思ふ。病源此處に在れば救治も此處に在る。此に於て我輩は前者に對しては資本對勞働の問題を解決すべく過剩價値の分配法を健全なる學理によつて確定すべき事を慫慂し、後者に對しては、是は在來の思想以外に更に泰西の新要素の加はり、今迄の統一の囊で收まり切れずに外に喰み出てゴッチャ返へして居るのだから、此新要素を包括し統一すべく更に大なる思想が現はるゝ爲めには一大哲學者、又其れが信念となる爲には、一大宗敎家の出現を望まねばならぬ、が大哲大聖は容易に出現の望めぬ者だから、今の計としては、切めて懷疑にも積極的態度を慫慂し、一國の民心を其方に向けて共に勇猛精進の道に出たいと思ふ。此希望に對する博士の說法は何となく急所の周圍を廻り廻る樣な氣がして聊か齒痒き感がする。博士は經濟家であるから、其家族制度を說くの熱誠を轉じて我輩の望む原因の前者に對して丈なりとも、更に明快の論斷ある好著述の出る事を望む。(定價金四十錢)

▲増訂釋迦牟尼傳

井上哲次郎堀謙德著
前川文榮閣發行

是は井上博士の舊著に堀氏が更に新材料と新研究とを附加して合著とし、新に出版したものである、舊著の方は高木壬太郎氏との論戰の材料となつた者な事は世人の記臆にまだ新たであらう。それは兎もあれ。釋迦牟尼傳として在來の者の中最も能く大成した好著である事は疑はぬ、釋之に今新たに加へた補註と近[illegible]附錄とは極めて佛傳研究に有益なもの、佛敎書類目錄の如き亦特志の佛敎學徒に向つて極めて重寶なものと信ずる。(定價貳圓五十錢)

▲通俗修養論

村上專精著
丙午出版社發行

疑うて道に惑へるものには修養は第二位に陷るが、智に悟つて情の從はざるものには修養は第一位の問題となる。それ故今の懷疑の世には此修養論が眞に幾千の價値を齎すかは知らぬとしても、只懷疑とまでは行かず自墮落にして放縱なものには多大の効驗あるべしと思ふ。此著は所說懇篤實行に導き入るべき大なる力を持つて居る。(正價金壹圓)

▲オセロ

坪內逍遙著
富山房發行

沙翁四大悲劇中の一として此オセロの傑作な事は英文學研究の徒の誰知らぬものはないが、それを邦譯して原著の妙味を左ながらにして寫し出すのは此博士ならでは出來ぬ藝と讀みもて行く中にヒシヒシと感ずる。東西洋と隔つて思想、感情、風俗、習慣、歷史の違う處から同じ語でも言ひ現はし方に非常な差がある、長永に燃ゆる天の妙光吾々を圍繞する四大原素といふ樣な言葉にても差別は掲焉だが、それを節立たず、讀んでバタ臭き點微塵もあらしめず、ムーアの血も我々の血も同じに流れる心地させる事最も推稱すべしだと思ふ。(正價壹圓參拾五錢)

▲象山書翰集

色部城南編
有朋堂發行

我國開國者の急先鋒として最も人目の表に立ち、京都で横死した象山の精神の流露を左ながらに此集に於て見る、項を國事、藩事、銃砲、探鑛、醫術、文事、敎育、私事、交遊の十條に分ち、更に松陰書牘の象山

の一篇を附録としてある。(金一圓四拾錢)

▲繪本水滸傳　小杉未醒著　佐久良書房發行

クラシック者の現代語引直しは現今の流行だが、此も流行の潮流に乘じて生れ出た。「未醒氏と水滸傳」といつても宜い樣に、水滸傳は最も著者の愛讀のもので、豪快放曠なる魯知深の風丰の巳に氏の繪筆によつて幾度世間に紹介せられたかを知らぬが、遂に此一篇の現代語譯の大著となつて現はれ、中に無數の特色ある漫畫が挿入された。定めし著者には胸底の溜飲を一時に吐いた心地すべく、筆に靈あるも爭はれぬ。(定價金貳圓)

▲古事記通釋　池邊義象著　啓成社發行

日本の神代史は、古事記、書紀、之を一括して記紀と稱し。記紀の他には何物も存ぜぬのであるが、如何せん只古代語の現代人には耳遠きのみならず、漢文跋扈の時代に編纂された事とて、擬漢文流の上り下りがある、中には漢字の義譯語もあれば邦語の音譯漢字もあるといふ妙チキリンの文體で讀者は少い、お負けに和本では大分大きな讀みづらい體裁の者であつたのを、今通釋附の而かも一卷に小さく纏めたのは多大の便利を感ずる。(定價一圓參拾錢)

▲露西亞探偵物語　清風草堂主人著　萬里閣發行

在哈爾賓夏秋龜一氏供給の露國探偵事實譚を、人物の名丈を假に日本人にして物語に書いたものだ。露西亞の裏面を窺ひ知るによい便りとなる。(定價壹圓)

▲近世八家文選　武島又次郎　金子元臣　池邊義象　合選　株式會社啓成社發行

眞淵、春海、蒿蹊、秋成、雅望、濱臣、廣足、芳樹の八家の文粹を蒐めたもの。(定價五十錢)

○實驗簡易强健術　(川合春充著定價六十錢)文榮閣書店發行

○病間八ケ月　(佛教徒無漏田範一氏の追悼編)興教書院發行

○我愛する偉人　「一部青年の修養編」(吾恥庵主人著定價五十錢)敬文館發行

○修養衞生自己測量　(ウイリアムデビッド、ハイド原著鈴木券太郎譯補、定價五十錢)丙午出版社發行

○歐州救貧事業の大勢　(セルラース女史原著井口丑二譯)警醒社發行

○椿說弓張月「上篇」　(幸田露伴校訂、定價正價二十錢)東亞堂書房發行

○新訂通俗三國志「第一」　(幸田露伴校訂正價貳拾錢)東亞堂書房發行

次號豫告

○大久保利通論　德富蘇峯氏

維新三傑中の大手腕大久保利通!!!。蘇峰氏の其人物を觀察し研究するや久しく、今や儀案定まり、之を堂々たる雄渾の辭に託するもの。

○嶺雲自敍傳　田岡嶺雲氏

或は蜜の如き戀の笑まひ、或は肉を千切る離別の涙、忽ち孤劍義和團に投じ、忽ち桎梏囹圄に泣く、遂には九死の病に僅に一生を得る。嶺雲氏の半生は即變幻萬狀の絶好小說。

○小說 下級官吏の死　田山花袋氏

意を凝らす三閱月、紙を費す百枚强。今や人工天工に迫るの妙ある花袋氏の筆、最も精彩を此篇に於て發揮すべし、六月小說壇の白眉たるを疑はず。

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

槇山平三郎先生著

官立學校英語擬試驗問題 附解答并應用

全一册 四六判美本 正價五拾錢 郵税六錢

原濱吉先生著

官立學校數學擬試驗問題 附解答并應用

全一册 四六判美本 正價五拾錢 郵税六錢

森脇俊作先生著

官立學校國語擬試驗問題 附解答并應用

全一册 四六判美本 正價四拾錢 郵税六錢

練習は最良の教師なり受驗登第の秘訣は實に**受驗準備の練習を積**むに若くはなし本書はこの受驗準備を遺憾なからしめん爲に前記專門大家の新に著作せられたるものにして**各卷五十回以上**の擬試驗問題を收めたり各問題の種類は各先生多年の經驗と**多大の苦心**とを以て受驗に最も適切なる**基本的問題**のみを**精選**し之に**詳細正確**なる**答案**を附したるものなり受驗者諸君本書を精讀して後試驗場に臨まば實力と練習と兩つ乍ら完備し**如何なる難問**も立所に之を**解決**し得て受驗の易々たる事宛も物を嚢中に探るが如くなるべし。

英語研究會編纂

最近十二年間諸官立學校英語試驗問題答案

全二册 上卷（自參拾貳年至參拾八年）**下卷**（自參拾九年至四拾參年）**正價各五拾錢** 小包料各**八錢**

英文和譯、和文英譯、英文法の三科の全部を各專門家の先生が最も精細明確なる答案を附したるもの也

（後付の一）

發兌 東京神田今川小路 金刺芳流堂

信用なき店舖及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

（後付の二）

五月號之縱論横議

太陽

五月一日發行 第六號 正價卅錢 郵稅三錢

▼都市集中の大勢　尾崎行雄

▼クロポトキン著法律と強權を評す　平出修

△時評　浮田博士、本多精一、金子筑水、淺田江村

■小説 妖術　泉鏡花

■小説 兒の疑問　小川未明

■脚本 石山越　井手蕉雨

○倫敦印象記　長谷川天溪

○落首と流行歌　岩野泡鳴

○重荷　江見水蔭

東京本町 博文館

●太平洋問題　戸水博士、中村博士、寺尾博士、大石正巳君、大[illegible]毅君、肝付男爵

●日英新條約批評　林伯外諸大家談

●日米の關係に就て　末廣博士

●朝鮮制令違憲論　井上博士

●生物學上より見たる老衰及天壽　速水博士

●上杉博士の婦人問題を讀む　田岡嶺雲

關東大賣捌所

東京神田表神保町 東京堂
仝 神田裏神保町 上田屋
仝 京橋尾張町 東海堂
仝 京橋元數寄屋町 北隆館
仝 本郷本富士町 盛春堂
仝 京橋西紺屋町 良明堂
仝 日本橋本石町 至誠堂

關西大賣捌所

大阪東梅田町 盛文館
仝 京町堀 太華堂
京都佛光寺 東枝書肆

○壹冊定價 金貳拾錢外ニ郵稅金壹錢五厘(海外郵稅拾錢但淸國を除く)

冊數/國別	內國	國外
六冊	金壹圓貳拾錢	金壹圓七拾貳錢
十二冊	金貳圓參拾錢	金參圓參拾四錢
以上郵稅共		

▲但し特價號は規定以外に代金を申受くべし▼

送金注意

一郵便爲替にて御送金の場合は本郷西片町十番地反省社と指定し拂渡局を東京東片町局と指定せられなば途中盗取せらるゝの虞なし
一弊社振替貯金口座は東京三十四番なりこれにより御送金の方は登記料壹錢を加へらるべし然らざれば御送金の內より差引くにより端金となりて却て御面倒となるべし
一郵券代用は必ず壹割增に送らるべし
一前金切の節は帶封に朱書いたすべし次の前金を送られざれば其號限にて發送を止むべし
一領收證を出さず索まるゝ向は返信料を添へらるべし

明治四十四年四月廿七日印刷納本
明治四十四年五月一日發行
(禁轉載)

發行兼編輯人 麻田駒之助
印刷人 天野耕一

發行所 東京市本郷區駒込西片町十番地 反省社
振替口座東京三十四番 電話下谷一九一九 電信略號ハンセイ

印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 秀英舍第一工場

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

旅順工科學堂教授工學士 久保田圭右氏著

通俗畫用遠近法

今の科學の世の中に於て、遠近法の理用に據らざる構圖作畫は其自滅の期遠きに非ず、本書を讀まずんば畫家は其立脚地を失はん、本書を讀まずんば繪畫の批評家も鑑賞家も、焉んぞ其極致に達することを得んや、何となれば畫面に於ける人物器具、建築物、山水樹木等の眞位置及び相互の關係は、本書によりて始めて闡明せらるれば也。

菊判洋裝　全壹册

紙數二百八十餘頁
圖版百九十餘種
正價金壹圓六拾五錢
郵稅金拾貳錢

第一高等學校教授理學士 森總之助氏編

物理學講義實驗法

斯學の理論を説明するに最も適切にして興味ある實驗二百有餘を選み、而かも普通の物理書に見ゆるものは一切之を載せず其材料は學校の常備品、若くは咄嗟に辨ぜらるゝもの、若くは手輕に自製し得らるゝものなれば、中小學校の教授用は勿論、又家庭に於て子弟に座興を與ふる間に、自然に科學的知識を啓發せしむ。

菊判洋裝　全壹册

紙數二百五十頁
圖版百九十五種
正價金壹圓六拾五錢
郵稅金拾貳錢

丸善株式會社

大坂支店　心齋橋筋博勞町　（振替貯金口座大坂第七四番）

東京本店　日本橋通三丁目　（振替貯金口座東京第五番）

京都支店　三條通麩屋町西入　（振替貯金口座大坂第一七三番）

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す